

639-127



1200501566025

39

127

口  
複  
写



20 2.15



納本

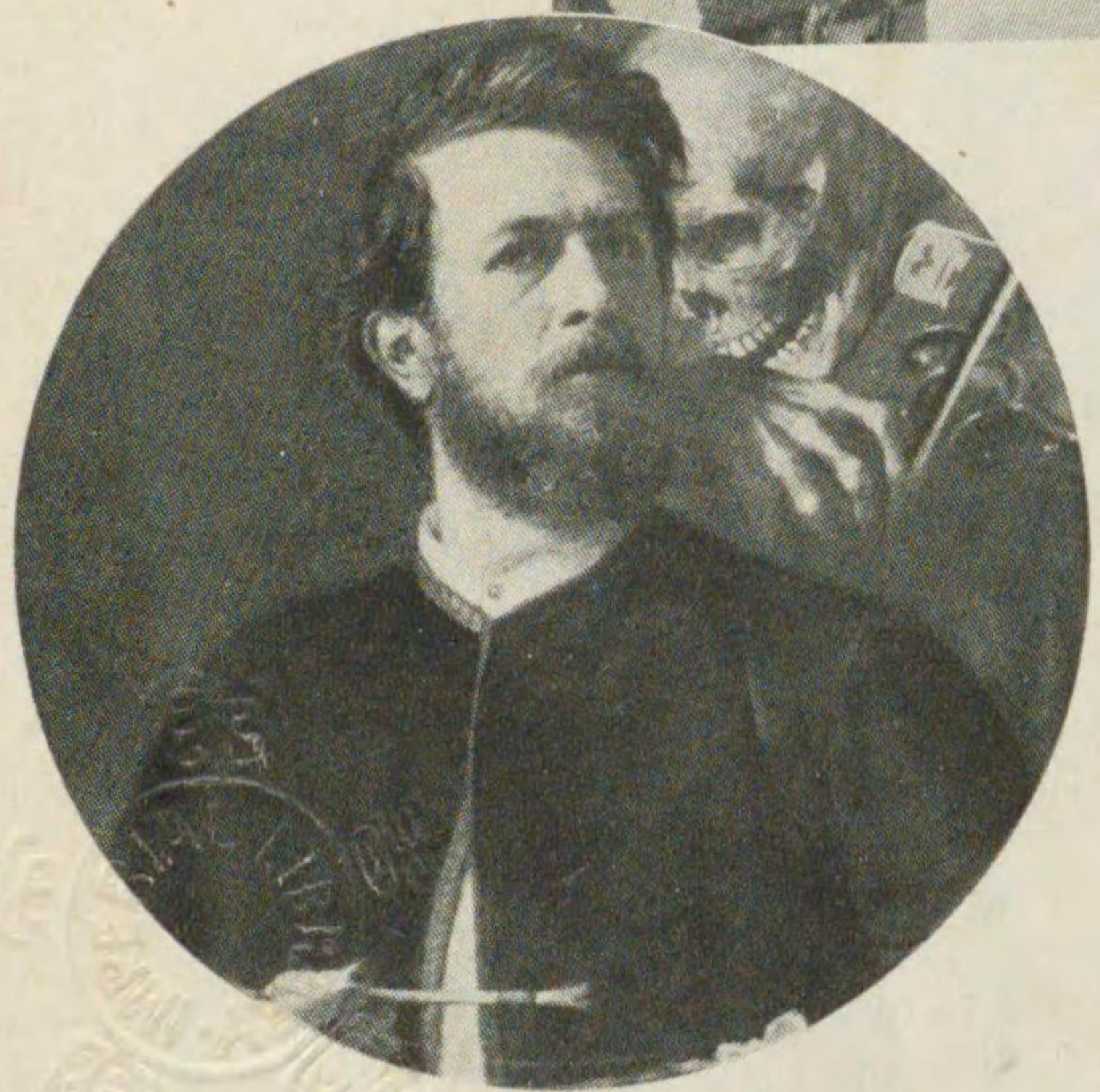
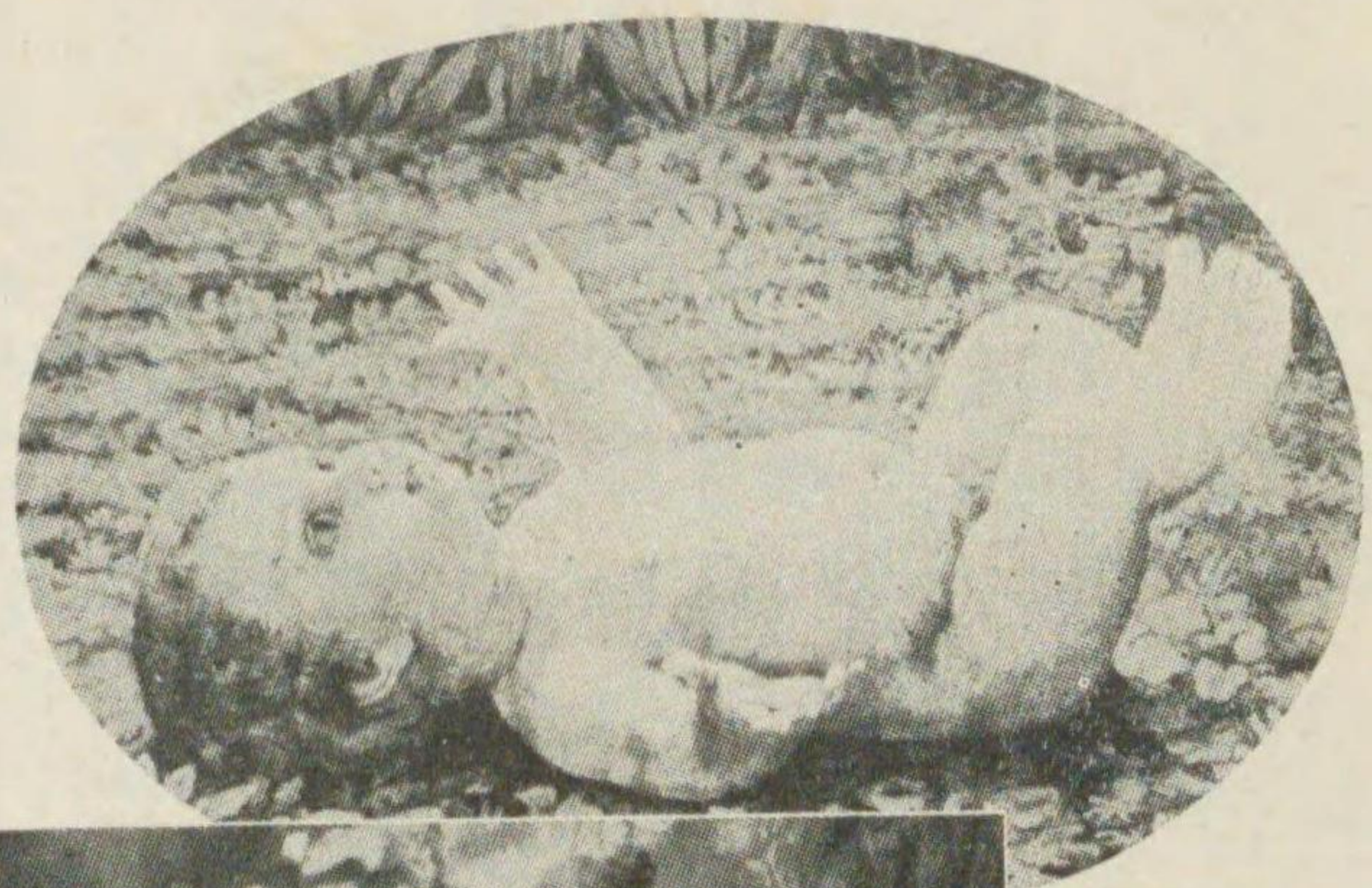
人 物 春 秋

佐々弘雄 著

改 造 社 版







- (上) オットウ・ルンダの赤坊の繪——  
(これは自然生のありのままの人物の姿を寓意す)
- (中) アドルフ・メンツェルのアトリエの壁——  
(この壁は加工された人物の分析を意味す)
- (下) アイノルド・ベックリンの自畫像——  
(これは評者たる著者自身の戒めのつもり)





639-127

序言

どう云ふ因縁で、また、どう云ふ考へで、人物評論をはじめたかと聞かれると、一寸困まる。三、四年前の改造に張良論を頼まれて書いたのがきつかけになつて、その後、時にふれ、折にのぞんで書いた。たゞ自然に書き、また書かされて行つただけの話である。ひたむきな気持ちで書いた場合もあり、のんきに隨筆でもかくつもりで書き流したこともある。また、時局評論がある個人中心に展開して見る手法から、人物論と銘打つた場合もある。

時に突込んだ批評もし、時に、悪口に墮したこともあつたかも知れない。しかし、多くの場合、育成的な心持ちの働くことの多かつたことも事實である。いづれの場合でも、別に成心があつたわけではない。各片々の小篇とても、少なくとも一週間位は心を静め想を練つて一番妥當と思はるゝポイントを掴んで書いた積りである。たゞ自分は、知人を書いた場合は別として、特にある政治家、社會運動家、思想家を論ずる場合にその個人に會はないで書くことに努めた。會ふ機會のないためにもよるが、又、人物論をやる場合に處する私の考へにも基いたのである。

熟知の人の場合は蘆山の裡にあるもの蘆山を見ぬ恐れがあるので、未知の人は未知のまゝで書く方が大觀が出来ると思つたからである。そのために、個々の事實に就いて誤聞や受け取り





やうの違つた點が免れがたいであらうが、此點は機會を得て訂正し度いと思ふから、敢て大方の垂教を乞ふ所以である。

又、政治家、社會運動家等各般に互り、収録するところは論評の機會ありしものと、日頃から留意して書き下ろした歴史的人物に限られた。重要性と云ふ點から云へば、まだ、加へねばならぬ多くの現代人、歴史的人物がある。だが、これは、可及的に努力せんとしたものゝ、紙幅の關係と、改造社で出版を急がれたゝめに、逸してゐることを知りながら、割愛することにした。此點も讀者のお諒恕を得て置きたい。他日また新著に包含する場合がないとも曰はれないから、人のことばかり書いて、自分はどうかと聞かれたら、舊態依然たる吳下の舊阿蒙に過ぎず、うす暗い書齋に住む一讀書人にすぎないと答へざるを得ない。慚愧の外はない。そして、唯此小著が銷夏の資ともならば幸ひと思ふのみである。

麻布日ヶ窪にて

佐々弘雄

目次

人物論緒篇

人物論 ..... 一五

英雄は不代替物か? ..... 一一

社會運動家・思想家篇

大山郁夫と麻生久 ..... 一九

大川周明論 ..... 三七

尾崎學堂の心境 ..... 五〇

河上肇と大塚金之助 ..... 六〇

吉野作造博士とデモクラシー ..... 八三

河上肇と吉野作造の對照觀 ..... 一〇〇

『時の人』赤松克麿論 ..... 一〇五

堺利彦の思想 ..... 一一一

佐野學に就いての思想 ..... 一二四

直木三十五論 ..... 一二九

青山熊治の人物 ..... 一三九

政治家篇

濱口雄幸の遭難 ..... 一三九



濱口君の心腸	.....	一四九
若槻新總裁論	.....	一五三
久原房之助の人物	.....	一六八
江木翼の引退	.....	一七三
人及び政治家としての井上準之助	.....	一七六
犬養毅宰相論	.....	一九八
犬養健の木堂觀	.....	二二七
伊澤多喜男の政治的立場	.....	二三三
政界ダーク・ホース論	.....	二四八
宇垣一成の政治的立場	.....	二六五
森 恪 論	.....	二八三
鈴木喜三郎論	.....	二九三
高橋是清と云ふ人物	.....	三〇五
鳩山文相論	.....	三二二
歴史的人物篇		
—其他雜篇—		
張 良 論	.....	三二七
諸葛孔明の人格	.....	三五五
人間としてのマルクス	.....	三七四
マクドナルド	.....	三七七
シュトレイゼマンの雄辯	.....	三八〇

人物春秋



人物論緒篇

人物論緒篇



人物論

人物論はむづかしいものだ。殊に個人としての長所短所とその社會的關係を把握することにむづかしい點がある。思ふことの十分の一すら全ふし得ない場合が多い、それは一つには人物論は、一般的な人間解剖を必要とするし、従つて一番手近な自己内省と關聯することが多大であ

るだけ、無責任に外物としての人物を素朴に認識し、論評するだけでは不充分であるからだ。殊に自己の好惡をその外物になげかけて無反省に論ずる場合には、批評さるゝ人物の長所や短所が浮彫さるゝどころか、評者の缺點や曲つた主觀が知らず識らず露出する恐れがある。況やためにする所ある人物論はむしろ評者の自己剔抉になり、評者人格の内面バクロに了はる場合がある。



※ ※  
 およそ人物論に於て、確守さるべき観點は四つあると思ふ。

その(一)は、社會的觀點。

その(二)は、人物の個人的要素、その長所短所。

その(三)は、この個人的要素の社會的關聯。而してこの(三)は更に(一)歴史的にその個性が築かるゝに至つた生立ち、家族、先輩、團體の關係(2)現在その個性のもつ社會的關係

(3)將來に亘つてもつであらう所の社會的意味。の三者を注目すべきである。

その(四)は、評者の社會的立場及び見解、個性に對する省察。

この四者は多かれ少かれ具備せらるべきものである。

この中、上記した(三)に就いて、評さるゝ人物の個性に關聯して、その生理的要因を見免してはいけない。僕らには到底この要求を充たし難いが、初歩の生理學心理學の知識や、骨相學位の用意はしてゐながら、その方面を突き込むことには自信がもてぬし、又はゞからねばならぬ場合が多い。この點僕はこの二三年痛切に感じてゐることだが、白柳秀湖の政黨親分子分

と云ふ新著を讀んでゐたら、明治時代の政界薩派の一巨頭黒田清隆を論じたくだりに、奇行狼藉の多かつた此の人物を知る上には生理・病理的觀察の必要なることが説かれてゐるのを見て、知音の感を催した。

※

※

人物論は文藝上の手法と同様に、リアリズム、アイデアリズム等々が存在する。社會的批評もある。がこれが單にイデオロギーをその人物におつかぶせるだけでは人物論は出來ない。わろくすると公式的觀念論になる。又單に其人物の由來を説明するだけの社會的批評では、解説的リアリズムになつてしまふ。だから人物論の一番すぐれた方法はやはり辨證法的でなければならぬと考へる。其社會的關聯、即ちその個性と社會的背景・動向との關係から、個性の肉體分析、その肉體分析によつて現はれてくる特異性と後天性等に觸れなければならぬ。又評者が關聯して成立つ人物論である以上、評者自身の個性・社會社をば、筆にはのぼせないまでも、省察精選しておくことを忘れ得ない。

※

※



マコーレーの人物論はリアリズムの最上のものと考へる。そのロード・クライブ傳等々讀んだ記憶によつても實にすぐれたものと思ふ。個性としてグーダラなクライブが東印度會社の一クラークから、ふと勇氣をふるひ起す機會が與へられて出世してゆくあたり、實によく書けてゐる。評者は少しも主觀を加へないが、クライブと云ふ男が、クラーク時代つまらぬ原因で一度ならずピストル自殺を企てながら、いかにして出世して行つたかゞわかる。平明な叙述の中に僕の觀取したことはクライブは三流の人間であることだ。內的に信念のない個性で、植民地で亂暴を働いたり、暴力的支配で、善良無比な羊のやうなインド人を強壓する點ではいやに勇敢になるたちである。従つてその最後も不正と不名譽の中に、たしか自殺してゐる。

印度總督ヘースティングスも同型のやゝ政治的手腕のある男だが、エドモンド・バークの有名な議會に於ける彈劾演説を聞くにたえかね、自ら『世に自分ほどの悪人なしとさへ感じた』と云つてゐる。その正直な點は認むべきであるがバーク以下の人物であると思ふ。

と云つて、バークを僕は第一流の人物とは思はない。桂太郎とこれを彈劾して殆んど愧死せしめんとした尾崎行雄の關係によく似てゐる。

森鷗外の人物論的小説たとへば阿部兄弟の如きも記憶にのこつてゐる。無理のない筆致で、淡々として薄幸の阿部兄弟を叙してゐる。その頃の人物評論家では幸田露伴を僕は尊敬してゐる。角度の廣い深味のある實に優れたものが多い。賴朝論はその一つと思ふ。これは有名な高山樗牛の清盛論に於て霸氣や氣を負うたものよりすぐれてゐると考へる。直木三十五の宮本武藏や大鹽平八郎を取扱つたものは、右の樗牛のものほどのレベルには達してゐないが、從來と觀方をかへる點に力を入れてゐる點で共通してゐる。従つて共に才人の人物論と云ふ感じがする。蘇峰の大久保甲東傳は從來と觀方は變へてゐるが、無理がなく、傑作である。

樗牛の瀧口入道になると、漱石の虞美人草類似の鼻持ならぬロマンチズムに陥つてゐる。

※ ※

横山健堂、鷲城、山口孤劍等の人物論はたいしたものとは思はない。寧ろ寸鐵的な中江兆民の一年有半等に於ける人物評は雞群中の一鶴の感がある。たゞ兆民の生理的原因が、かれを非常に短氣な批評家たらしめ、ニヒリズム的傾向を濃厚にせしめてゐる。たゞ文章のイキのよさ



は其の時代一寸類を見ず、現代にもつて來ても太刀打ちの出来る人はないかも知れない。一寸大森義太郎に似てゐるが、もつと上手らしい。

馬場恒吾の人物論はマコーレー流のそれで、リアリズムの極致に近い。人物を掌の中でもむ様にいかにも手に入つてゐる。たゞそのリアリズムは手法に關する限りに於て云へることであつて、論評と評者との關係に於ては、自由主義的希望が織込まれてをり、掘り下げ方に申し分がある。たゞ之が論評に一種の品位を與へてゐることは確かだ。又その手法もリアリズムの冷厳さの一面を缺いで温い人情味をもつてゐるが、之も評者の人間の反映と見るべきものである。

※ ※ ※

幾多論じ度い人物評論家、及び作物があるが別の機會にゆづる。たゞ人物論をやること自體が英雄主義ではないことは斷わる迄もない。寧ろ人物の全面的な關聯性に重點を求めらるべきで、神祕性に求むべきでないことを附記して置き度い。従つて、ルナンの名著キリスト傳でも、弱き人間としてのキリストが處刑前ゲツセマネの園で、いかにあらゆる凡俗の苦惱と戦つたかを描いてゐる點がすぐれてゐることを指摘して置き度い。

## 英雄は不代替物か？

※ ※ ※

時代が行詰つてゐる。轉換期に否應なしに迫出して行く。誰しもが、どうにかならぬか、このまゝでいゝのかとおぼろげな感じを持つて來る。『洗天風雨幾時來』らんと待望する。風樓に充つると云ふか、何んとなく迫切の感が一般に擴がる。

『唱和求才不<sub>レ</sub>是才』一寸間に合ふ刀筆の才がえらくなる。逸材は學校を途中で追はれる。卒業生も財閥の子弟から先きに片づいてゆく。

大衆は益々窮乏して、失業百八十萬、賃銀低下、俸給切下げが津浪のやうに襲來する。

近年農民層三千二百萬人は、十四億の收入減を見た。

勞働者層一千六百萬人は六億圓の收入減を見た。



サラリーメン層一般は、一寸どれだけ分らぬが、一般官吏は八百萬圓の減俸、その外植民地官吏、公吏、軍人の減俸も生やさしいものではない。

労働者農民層は勿論、中間層も益々生活低下の大濤に打ち挫かれてゆく。が、先のめどはついてゐない。

かう云ふ時代に、英雄待望的氣分の溢るゝのは必然的である。

乍併、個人的な英雄、——と云ふのは個人主義的な、即ちブルジョア的な英雄を待望するのは時代の大きいなる錯覚だ。大衆の間からその生活體驗の結晶體としての傑物は、あくまで必要である。

長谷川さん（如是閑）は行動の科學者と云ふやうな言葉で、英雄を考へてゐる。その意味は科學者の定義する科學と云ふのではなく、行動の効果が學術的の、客觀的の認識に一致すると云ふにあるとする。そしてブルジョアの側にも、プロレタリアの側にもかういふ科學者は存在し得ると云ふのである。

しかし、筆者は、かう二元的には考へない。英雄なり傑物なりの意味は時代に寄與する大人

物といふことである。さうでない個人的英雄はドンキホーテ以上のもではない。そしてかゝる英雄は、いまの生産關係の發展と云ふ基礎構造との關聯から論じて、どうしても、この新しい生産力に相應したものでなければならぬ。さうでないと何等の寄與をなし得る筈はない。だから、かゝる新しき生産力の發展を代辯する傑物は、當然、プロレタリアの側からのみ生れる。敢て勞農者であることを必要としないが、少くもその線にそひ、その鬭争を鬭争する者でなければならぬ。だからブルジョアの英雄と云ふのは、ブルジョア陣營中の傑物と云ふ位の意味で、決して時代全體の英雄とは云へないものと思ふ。

しかし、かやうな純粹な時代的指導者（英雄）の外に、階級的要求をある程度攝取しまたは攝取するやうな、いをよそはうて、ブルジョアの擁護を試みる妥協的天才がある。筆者の見解では、ムツソリーニはこの第二の種類のものに屬する。かれは一見ガムシヤラな斷行家に見える。

しかし、それは、その欺瞞に對し不滿を抱く大衆の彈壓に於て、斷乎としてゐるのであつて、時代の進展に對しては寧ろ無類の妥協家なのである。かやうな種類のいはゆる『英雄』は時代



の眞の潮を指導するものでないから永續性がない。過渡的な支配者にすぎない。自分の一生は權力支配を持續し得ても將來は確實でない。曹松の詩に『澤國江山入戰圖。生民何計樂樵蘇。憑君莫話封侯事。一將功成萬骨枯。』と云ふのはまさにかやうな小英雄批判の句である。

※

※

英雄は、時代の生産物だ。たゞ時代が、進展性をそのまゝ露出するとき進歩的指導者(英雄)を生み、疲憊過度なときは妥協的英雄を生む。これ以外に英雄の出ようはない。ナポレオンは時代が要求したとは云へないだらうと反問する人があるかも知れない。

しかし、内亂に疲れ果てた『フランス共和國が必要とした軍事獨裁官であつた』ことは確實であり、當時の民族國家自立の保證のための必要物であつたことも歴史の示す通りである。シーザー、クロムウエル、秀吉、隆盛、皆時代の産物ならざるはない。

英雄は、だから、第一段に於て時代の生産物である。若しさうでなく、魔神のやうな個人的偉らさが、時代をシンコ細工のやうにこねくるのだと見るならば、西南役で何故西郷が亡んだか、ナポレオンが再起後卒然として倒壊したか、問題となる。

そして第二段に、英雄は、不代替物ではない。勿論時代の指導者となる位の個人が頭腦、肉體ともに普通人以上の出来具合であることはたしかだ。しかし、それだけのことであつて、神祕的萬能者でもなんでもない、ある傑人がある時代に出現することは純粹に偶然であるが、そのすぐれたる一人間を傑人たらしめたことは時代の力にある。だから、その時代の力と時代の要求の存する間は、その傑人を除き去つても、その補充の必要はなほ存在し、且つその補充は見出されるのである。

菊池寛がレーニンが居なかつたらロシア革命は出来なかつたらう、と言つたことがある。それから、また『マルクスと云ふ人間が居なかつたら、同じ時にもう一人のカルクスとか何とかいふ者が出て来て同じやうなこと言つてゐるか知らん?』と疑問を挿んでゐる。

レーニンが居なかつたら、トロツキーがレーニンになつたらう。マルクスが居なくても、エングルスがマルクスになつたであらう。隆盛が居なくても益休がゐる。

エングルスが『唯物史觀を發見したのはマルクスであるがチエリー、ミニエー、ギゾウ始め、其の他一八五〇年までの全英國歴史家も亦、彼等自ら立證する如くその發見に突き進んで



居たのであつた。』と言つて、偉人の代替性を立證してゐる。

筆者は、この見解が正しいと思ふ。

マルクス出でずんば、カルクス、カルクス出でずんば、ミルクスでもコルクスでも必ず出たと思ふ。……その才能に多少の差異はあらうとも……。

田中、犬養、濱口、若槻歴代首相いづれを見ても、やまがそだち、洗天の風雨はまだなかなか……。たゞ、風雨とよもにカルクスが出るか、ニポレオンが出るかそれはわからない。

社會運動家・思想家篇



## 大山郁夫と麻生久

### 一

全国労農大衆黨が生れた。それは、何んと云つても、合法無産政黨運動の一時機を劃するものであつた。その將來がどうなるか？ 無産政黨としてどれだけの價值があるか？ それは將來の實踐のみが證明するであらう。また黨大會の模様を見ても、いろいろの問題が俺達の「實踐」にあるんだと云ふことで將來に押しやられた形ちであつた。

しかし、これだけの結成でも、容易なことではなかつたことは察せられる。綱領問題に關する彈壓、委員長問題についてのいざこざ等が内外の障碍であつた。

労農黨の傳統的イデオロギーと共に、大山委員長を推してやまなかつた總評議會關西支部は



敗れ去り、大衆黨は勞農黨との妥協の必要上麻生氏を書記長にした。

そして、三輪、河野、田所、淺沼、宮崎、平野、鈴木、田部井等の中堅どころ十四名を常任執行委員として、書記局と併んで黨務の執行をはかる仕組みである。本質に於て、大差なき迄も、多岐なる合流勢力の上に立黨された組織としては、かやうな書記局中心、常任執行委員中心の運用組織は蓋し妥當なものであらう。

だから、「全勞農」に於ては委員長問題は、本來執着すべき性質のものではなかつた。大山氏が合同行惱みを避けて、先づ委員長推薦を辭退し、麻生氏も同様の態度に出たのは無理からぬことである。が、ともかくも書記長として新黨の中心に立つた麻生久氏と、平黨員として合同への誠意を誓ふ大山郁夫氏とは、將來もなほ對照的の視點とならう。

社民黨への途か？ 合法左翼政黨への第一歩か？ 新黨の前路に横はる岐路に對して、黨幹部の中心たる麻生氏と、黨内大衆と行動し非幹部派を以て任ずる意圖かと想像さるゝ大山氏の立場とは、共に重要な意義をもつてゐる。「輝ける委員長」大山の罐詰めを以て、一の大團圓とする酷評に私は、同感しない。また麻生氏が書記長の地位を舊日勞黨のためにのみ利用し、中間

黨存在の永續性を固執する指導者であるとも、私は、考へてはるない。無産者的政黨への發展の可能と、その實現の意識が大衆の裡に、また黨内大衆間に醸成せらるゝ場合、それがこの二箇の指導者に反映せぬ筈がない。また、かゝる寫象性と云ふか、適應性と云ふか、さうした特性を、私は、共通に、大山と麻生の人間の裡に見出すのである。だから、私の大山郁夫論と麻生久論は、かゝる運動の將來に關聯して、多少の影響力を持ち得べき兩者の特性——それを起點として展開せらるべきである。

## 二

大山氏は義士の本場播州赤穂の出身、——だが、本來自由思想の人である。野球に名高い神港商業の出（この出身校は誤りだとの指摘を受けた）、スポーツ・フアンの内テリは、ホホー、さうなのか、と云ふ程度であらうが、この人を出したことによつてのみ校名が記憶さるゝ時代もあらう。早大政治經濟科を出たのが、明治三十八年、直ちに教師となり、獨米四年の留學後教授となる。型の如き秀才の人生路である。大正六年大朝社に入つたが、大正七年寺内



内閣との衝突で鳥居素川、長谷川如是閑、榊田民藏と共に退社、我等の同人となり同時に早大教授に復活した。

大山氏の社会的行程は、實にこの第二次早大教授以後にある。そして、その後の社会的行動に於ける二個の道程は、大正十二年軍事研究團事件以後早大教授としての學内争闘と、大正十五年三月以來勞農黨黨首としての政治争闘との二つにある。

大正八九年までの大山氏と大正十一年十二年以後の大山氏とは別人の感がある。温雅、端正の學究としての大山、血みどろの争闘を戦ひ抜く社會争闘場裡の主戦闘士としての大山、それは歴史の進行のみが知る一つの人間神祕である。君子豹變と云ふか、それは大山氏の素直に純白なる性情の現はれである。若き學生を誤る大山師とか、煽動師と見るのは、ブルジョアのデマに近い。たゞ、イージー・ゴイングとは云はぬが、ナイーブ・ブラクテイッシュ(素朴實踐的)な點はある。この點がブルジョア側から大山師と罵言せしめ、無産黨運動の一部からもドンキホーテ流と批評されたりする。たしか昭和五年新潮誌にドンキホーテになぞらへた匿名の大山郁夫論があつたが、あれなどはその一例であらう。しかし、私の見るところでは、それは

大山氏の特性の反面にすぎない。詐術や野心であれだけ、實踐が押し通せるものではない。むしろその特性は善良な意思とおほらかなる誠意とにあり、純粹な感受性と不死身の推進力にある。それがかれを常に運動の尖端に押し上げてゆくのであると見る。

ガツチリした理論家ではない。それだけに、河上肇博士の如く狷介孤立には陥らぬ。が、一面そのために、潮の流るゝまゝに、情に棹すものの如くに流さるゝ缺點をもつ。その變通な性、——と云ふよりも寧ろ流動性とも云ふ方が適當だが、——が、かれをして、實踐家たらしめ、同時に煽動家たらしめる。かれはハインドマンの如く煽動し、ケレンスキーの如く雄辯である。「大衆の前に立つとき私は勇み立ちます。そして大衆の頭となり、口となり、手となることに無上の喜びを感じます。それから今度の總選挙です。今度といふ今度は、私は比較的短期間に異常の數に上る大衆に接觸しました。それは恐らく、前後を通じて十五萬人に上つたでせう。それだけの大衆に三週間にわたつて間斷なく呼びかけたのです。多い日には約一萬五千人に呼びかけました。少い日でも二三千人に呼びかけました。私はさうした大衆と共通に心臓の鼓動を感じたのでした。」



(大山氏論文「東京第五區の勝利は大衆の勝利だ!!」参照)  
 かれの全行路に於ける第二のメルクマールを跡づける者は、誰れしも、かれの感激の強靱性を、その高揚性と共に感ずるのである。

舊勞農黨時代、新黨準備會時代、勞農同盟時代、新勞農黨時代を経ていま全國勞農大衆黨に至るかれの政治闘争の全過程は大衆への情熱的思慕にある。謂はゞ「大衆萬歳」の思想とでも云ふか、丁度武者小路實篤の人間萬歳または人類萬歳に似てゐる。あるとき、私は、かれを無産運動に於ける武者小路として考へた。しかし武者の行き方は高踏的で獨尊的で、大山よりも却つて福本に近いと思つて、この考へは訂正した。寧ろ彼は大衆の戀人である。あるときは相思の、またあるときは片思ひでもいゝ。唯、只管に「大衆萬歳」を彼は叫ぶ。

大山氏は云ふ。「今や我々は更に、この大衆の最後の必然の勝利への動かすべからざる確信をも得るに至りました。吾々はあるひは幸ひにその日の喜びを大衆と共にすることが出来るかも知れません。あるひはその前に倒れるかも知れません。だが、よしその前に倒れようとも、その時はきつと『大衆萬歳』を叫びつゝ歡喜に胸を躍らせつゝ瞑目するでせう。」(上掲論文)と。

かれが同志山宣の死に際しても「反動の嵐の吹荒れて黒雲が四邊を掩うてゐる今日、我々はその前に白色テラーの犠牲となつて山宣の如く倒れるかも知れない。だが、よしその前に倒れようとも、その時には我々はきつと大衆の輝かしき將來の勝利の行進を眼前に描き、歡喜に胸を躍らせつゝ聲の限りに、「大衆萬歳」を叫び云々。」(大山氏論文「同志山宣の死と我々の決意」)と言つてゐる。冷嚴なるレーニンの鐵桶のやうな強靱性はそこには見出せない。華やかな、やゝ恍惚たる情操の世界ではあるが、その眞劍味は疑ふべくもない。私はかゝる引用句によつて安價なるヒロイズムを髣髴するの意圖をもつものではない。かれは勿論階級運動を「不可測の大多數者の利益のためになされる不可測の大多數の自主的運動」と理解する。それで、所謂英雄主義やブルジョアの英雄の否定者であることは云ふを俟たない。が、反動期のいま英雄的階級たるプロレタリア、階級的英雄先進分子は寧ろこれを禮賛するのである。(大山氏論文「英雄的階級、階級的英雄」参照)

舊勞農黨の實にめざましい躍進は、外廓黨としての名にふさはしきものであつた。

かれは委員長として多くの指導者の間に位して最大の能率を發揮した。よき指導者も濟々多



士であつた。福本イズムに對しては、乍然、あたらずさはらずで餘り意に介しなかつたやうだ。が、その覆没に際し大道憲次等の攻撃に對しては、寧ろ辯護的立場に立つた。河上肇に對しては、ほんとに氣はゆるしてはるなかつたらしい。しかし、その突如たる解消聲明に對しては足をさらはれた感じであつたと述懐する。だが、かれにとつて最も大いなる苦痛は、今尙親愛の追憶をもつと云ふ細迫兼光との別離であつたらう。山宣の死に眉一つ動かさぬ沈勇細迫去り、インテリ出にはめづらしい樸訥漢小岩井淨去り、かれの周圍は次第に寂然たるに至つたことは否めない。インテリ出の細迫、小岩井をはじめ舊勞農政治部長益田豊彦の如きも既に居らず、勞働者出またはそれに近い渡政、三田村、或ひはバクーニンの如き山縣等々なき後のかれは、運動の基本的潮流の圏外に逸脱し去つた感あるも、亦是非なことだ。しかも、かれは、震災時に同行檢束された昵近の田部井の外石原、山崎と共に新勞農黨樹立に直進し、社民は「ブルジョア第三黨」、「日勞黨と同一體」の日本大衆黨「支配階級の鼻息に恐れをなして」去つた勞農大衆黨「頭のとつぺんから足の爪先まで、陰謀團であるかの觀を呈する」舊無産大衆黨系云々と、日連張りの八宗攻撃をやつてのける。こゝらあたりが、雄氣滿々、騎虎の勢に

乗ずるの觀なきを得ない所である。

かゝる認識の錯誤と、拋物線的行動のとめどなき場合は、かれに屢々ある。たしかにあるが、これあるがために、私は、却つて逆に、その將來を未だ疑問符の下に置いて考へるのだ。好んでかれが「我等の行く處は戦場であり墓場である」と云ふ。その未知數の宿命と、算盤玉をはじかぬ意氣、——そこにまだかれの將來がある。議會に入つては、鈴木文治のうけると云ふ「威壓感」の代りに「侮蔑感」を喚起し、「活ける屍のやうな議會」を睥睨する。濱口首相を「名寺の寶物」「由緒ある骨董品」に譬へ、「借金支拂法案」を笑はれては、「諸君は笑ひを以てこの話を迎へてゐるが、農民は涙を以てそれを聴くのだ」と喝破し、「涙ぐましいことを言へば笑ひ、可笑しいことを言へば怒る——それがブルジョア議會の姿！」と憤激する。そして山宣の言葉たる「山本宣治たゞ一人孤壘を守る。だが、私は一人で淋しくない。背後に大衆が支持してゐるから」を常にモットーとしてゐる彼だ。その熱情と意氣！——私は狀勢の變轉によつては、かれが政治鬭争の將來はまたどう變るかかわからぬものがあると思ふ。

溯つて、れかの第一の道標たる、教授時代の學内鬭争を見る。かれの學内に於ける努力は主



として學生大衆のアジにむけられたと言つて過言ではない。勿論、社會運動方面にかれの弟子から、陣營はちがふが、三宅、淺沼、稻村の三羽鳥を出したやうに學、究者に市村今朝藏、廣島定吉、中野登美雄を生み、二木保幾にも影響を與へてはゐる。高田總長の信認厚くその懇望によつて再度早稻田政治學の講筵を占據したことは、學園早稻田に於けるかれの地位が總長候補を以て目せらるる程度であつたことの明證となる。早稻田改革運動のとき天野爲之派と共に、大隈夫人銅像に反對し、親友伊藤重治郎と共に早大を退き東朝紙に入つた。が、東朝脱退後は再び復歸したのだ。

そのまゝであるたら、大山氏は高田氏の後を襲つて、理財家田中穂積博士あたりを押えて總長になつてゐたかも知れない。またさうしたことはあり得べきことであつた。何故ならば當時、かれの思想はデモクラシーを一步も出でず、吉野作造博士に雁行して思想的啓蒙期を劃するにとゞまつてゐたから。しかも、かれは吉野博士ほど尖鋭ではなく、官僚に對する一敵國とまではゆかなかつた。大正九年頃であつたか、筆者が東大學生として、三十二番講堂で、大山氏の演説を聞いた記憶によつても、その頃氏はギリシヤ時代を謳歌し、古代文化の絢爛たる時代と

デモクラシーを嘆美する調子であつた。吉野博士が浪人會と闘ひ、福田徳三と結んで、黎明會を起したのに類する經驗は、大山氏に於ては、漸く大正十二年五月、軍事研究團騒動以後に於て生じたのである。

この事件は軍部文部の政策に従ひ、鹽澤氏等を顧問として生起せる軍事研究團に對し、雄辯會、建設者同盟等が一せいに反對せる事件であり、大山氏が森傳等の縦横クラブと對陣せる場面であつた。その結果は反鹽澤派の田中理事の兩成敗意見が通り、左翼から伊藤光、田所輝明等が學校を退いてゐる。これが、大山氏の鬭争場裡への初陣と見るべきであらう。越えて同年六月、警官の恩賜館侵入事件が起り、六月廿五日神田青年會に於ける大學擁護の演説會があつた。このときの大山氏の演説は吉野氏の浪人會との論戰と共に劃期的の事件で、演者泣き聽衆亦泣く場面であつた。三宅雪嶺翁、福田徳三博士も應援演説をしてゐる。この前後でもかれの思想は、一時マルキシズムにクロボトキン倫理學の要素を加味したものを考へてゐたやうだ。大正十五年三月勞農黨委員長に推されたときは、市村、五來(素川)、長谷川(如是閑)諸氏の反對、或ひは「不逞學生大山を誤まる」と論じた淺沼氏等の反對を押し切り、小柳、加古、佐



野（楠弘）氏等若き學生の意見に同じて、早大を去つた。このときは高田總長の苦衷を察した爲、あの辭表問題がゴタツキ、一部から猛烈な強迫があつたりしたが、終にかれは早大を去つた。このとき委員長と教授の兼任が辭任の原因ならずと主張したのは阿部賢一と、志賀重昂の二教授だけだつたさうだ。そのときの進退でも、高田總長は再三引とめたが、終にとゞまらず、高田——浮田——大山の進歩的政治學の傳統は高橋清吾の繼承によつて切斷されてしまつた。大山氏の教授時代は、社會思想の啓蒙と學生大衆の意識化促進とに社會的意味があつた。そして勞農黨に投ずるに及んで、マルキシズム左翼理論に進み、果敢な鬭争場裡の人となつた。かやうに、デモクラシー——マルクスの修正——純正マルキシズムへの思想的動き、それは云ふ迄もなく時代の動きそのものであり、わがプロレタリア運動の啓蒙期から政治行動化へまでの全過程のイデオロギー的反映とでも云ふべきものであつた。かゝる流動性に、かれ大山の成長性があり、かれの全貌が存するのである。

麻生久氏は、大分縣人、東大出身である。が、大山氏とちがつて、學究型とは、およそ、縁の遠い方だ。だから帝大出インテリ指導者間に異色ある存在である。東日記者、友愛會入り、全日本鑛夫總聯合會の創立、日本勞働組合同盟の組織、日勞黨結成から全國大衆黨を經、今日の全國勞農大衆黨に及んだ。

その行程は、口よりも手の先きに出る實踐家膚のかれであることを示してゐる。だから、組合運動からコツコツやり上げて、政治運動へので行つたゆき方で、それだけ、どこか腹の据はつたところが目立つのである。學生時代から學校は休み勝ちで運動に氣のむいた方で、棚橋小虎、山名義鶴と三人組みでのびて行つた。この交遊關係などは「濁流を泳ぐ」の中によく出て來る。そして、宮崎龍介、赤松克麿、石渡春雄、三學生の背後にあり、吉野博士を擁して、新人會の創設をやつた。

吾々の學生時代、今は工科の講堂となつた當りに第二學生控所と云ふのがある。そこで夜の會合毎に出て來て、アジ演説をやつたかれであつた。圓い紅顔にガツチリした圖體から、あのサビのある聲を押し出すやうにアジツてゐた。



宮崎の奔放、赤松の快活、石渡の重厚、そして麻生の熱意は吾々何もわからぬ學生にとつても非常な魅力であつた。麻生氏は小節に拘泥しない。時とするのだらしがないとさへ思はれる所がある。それで、藝術的のムードと流動性が同志をして不安に思はしめることがある。が、強靱なそして健康なかれの熱意は、ガツチリとかれを引緊めて、自からを階級闘争の押しも押されもせぬ闘士にたゞき上げて行つた。

「生きんと欲する者は闘へ！ 生はたゞ闘ひの上にのみある。自己を、そして又人類を、永遠の生に向つて生かさんと欲する者は、パンを獨占して、多數を飢餓に晒す、不合理な資本主義に向つて、自己の死屍を乗り越しても闘はねばならぬ！ 今はそれが單に思想の命令としてはなしに、ひしひしと迫つて來る生活の飢餓がそれを命令するに至つたのだ！」麻生氏「生は闘の上にある」とかれは云ふ。大山氏とは、またちがつた質の、闘志満腹である。

大山は多くインテリ層の人氣を獲得する。が、麻生氏は鑛山の地下から湧き上る呻きに似た聲援を背景に荷つてゐる。山宣の如く華やかなる死は彼を待たぬであらう。戦ひ抜いた、老鑛夫の如くに死ぬであらう。筆者が學生のとき、温厚なる井口孝親氏の論文集「未來はわれ等の

ものなり」を讀んで面白かつたと、かれに語つた。かれはボスの如き莊重さを以て、「それは當り前のことぢやないか。現在がわれらのものなんだ」と鼓舞した。私は、最近かれの足尾血戦記をよんだ。その中に、「未來は我等のもの」と云ふ一項があり、昭和五年總選舉で落選の後日譚として、宇都宮市某小學校六年生の「選舉ごっこ」で彼れが最高點で當選したことを片假名交りで知らせて來た小學生の話が載つてゐる。麻生さんも氣が永くなつたな、とそのとき私は感じた。しかし足尾の闘争は決して誰れでもあれだけにこなせるものぢやあない。ロイド・ジョーヂがチェンバーレンの根據地にむかつて、非戦論をかざして割り込み、戰闘的平和主義者の異名をとつたことなどは、到底麻生の地底の死闘に及ぶものではない。足尾愛國同志會や、人事掛り、等々の彈壓に抗する地底の麻生支持者の闘争は、通り一邊の都會的選舉闘争とは違ふ。此種の闘争力は八幡の淺原、北海道の山縣と麻生等の外餘り類例がないと思ふ。それで、筆者は、昭和五年全國大衆黨成立のとき麻生氏に聞いて見た。「足尾は骨でせう」「ひどい所だ」……「またやりますか？」「何度でもやる。一生かゝつてもやるさ。」とかれはニコニコして答へてゐた。この地力がかれの根にある。氣が永くもなつたらうが、地力が延べにも強くなつた



のだと更に私は感じなほした。

「掘れば掘るほど我身はつまる、我身の墓穴を我が掘る」所の鑛夫、「生命を的に働いても、住む家は豚小屋、食ふ米は南京米、貧窮に苛まれつゝ年老いて獲るものはヨロケ」に過ぎないところの鑛夫、——この鑛山労働者大衆のために立つかれ麻生の前路や、また、多難であると云はなければならぬ。

麻生氏が、「濁流に泳ぐ」や「父よ悲しむ勿れ」の著者として小説もかく人であることは、人がよく知つてゐる。ゴーゴリやアルツイバアシエフ等舊いロシア文學を彼は好いてゐる。が、かれが、繪畫の、殊に浮世繪の愛好者であり、今はその暇もないであらうが、相當の鑑識眼の持ち主であることは知る人が少ない。その點、かれの人間味は、シエークスピーアを熱愛したマルクスや、ゴルキーに無限の友愛を抱いたレーニンにもひそむ所の軟らか味が流れてゐる。私は、少しも、レオニン、マルクスの高きに於て麻生久論をやつてはゐない。麻生氏も勿論現在の自己を以て、かれ等に擬せられることは迷惑と思ふであらう。唯、筆者の云はんとする所は、かゝる一面を以て麻生氏の弱點を衝いた氣になる輕卒な闘士論を戒しめ度いと思ふ點にある。

繪畫愛好者としての麻生氏に、ミレー畫集をのぞいてゐる中に眠りに落ち、一つの夢を見た話がある。それはミレーの「落穂ひろひと羊かひ」の生活のやうな未來境に於ける田園生活の夢である。不思議に、筆者は、この麻生氏のと並んで、大山氏の「忘れられない夢の話」(文藝春秋昭和五年十月號)と云ふのを覺えてゐる。それはかれが、震災のとき保護檢束された後でチブスを患ひ、その高熱のときの夢の話して、青年が二人來て、大山氏に對しその青年の父がチブス菌の入つたものを大山氏に喰はせたことを謝罪に來ると云ふ筋である。

階級的闘士として聖人や機械ではない。夢もあらうし、人間的缺點もある。それを徒らに責めるのは、悪意あるデマか傍觀者の批評のための批評で、運動方向の選擇と、闘士としての内面的雜物の克服、そこにほんとの内面的な闘士評論が立つべきであらうと思ふ。

インテリ出には、矢張りインテリ階級層の内面的雜物が、克服せらるべくして残つてゐる。麻生氏には未來社會の夢、大山氏には闘争受難の夢、——これ等は克服せらるべき夢であるに相違ない。が、夢は夢でも、たゞの駄夢とはちがつて、面白いと思ふ。しかもある程度、大山麻生兩氏の人間を現はしてゐる點で一層興味が深い。





ファッシズム化の現段階と新黨の將來、——繰返して云ふが、新黨の前程に横はる岐路に際しての態度決定、——それに對する大山、麻生兩氏の使命は大きい。社會民主主義政治を英獨のごとく豫想するのは、誤謬に近い。いまは段階がまるで進んでゐる。此點は、むしろ適當なる實踐家の評論に待つが、この迫接せる段階に於ける新黨の前途は、幾多の難問を孕んでゐることは確かだ。

この難路を前にして、大山麻生兩氏が、そのナイーブ・プラクティッシュな行き方をガツチリしたものにし、組織的に新黨を方向づけることが期待される。少なくとも反ファッシズム闘争に於ける大衆の結成、それだけでも重大な仕事だ。(1931.7.8稿)

## 大川周明論

### 一、人及思想家としての大川周明

大川周明は右翼思想團體中に於て明炬たる存在である。人及思想家としての彼は、豊富なる内容と、鋭峻な機鋒を以て重きをなした。けれども實踐家としての資質は、その多角的な活動力があつたにも不係ず、未だ未完成のものとなし、筆者は見てゐる。筆者はかれを知ること甚だ淺く、かれの風貌に接したのは、五、六年ほど前、かれの主宰する東亞經濟調査局に參考書ありに行つたとき知友K君の紹介で二三分同座したきりであつた。従つて、實踐家としてかれを論ずるのは、多く坊間傳ふるところに據るのであるから、多少の危惧なきを得ないと思ふ。

けれども、かれの占むる歴史的立場とその爲人から、筆者は文の人、氣節の人としてより多く評價するのである。かれには多くの譯、著がある。筆者の知る限りでも、「日本の言行」告日



本國」(リシヤル)「復興印度の精神的根據」(リシヤル)「國史概論」(リシヤル)「日本精神研究」(リシヤル)「日本及日本人の道」から遡つては「日本文明史」等枚舉に遑ないほどだ。しかしこれらの諸著に於て科學者大川を發見することは困難だ。寧ろ、その人間及氣稟のいかなるものかを感得する。そしてかれの博士論文の如きは、例外的のものと思ふ。

従つて、かれの眞骨頭は、より多くその人物論に見出される。横井小楠、佐藤信淵、石田梅巖、平野二郎、宮本武藏、織田信長、上杉鷹山、上杉謙信、清川八郎の諸篇は小冊子とは云へかれの爲人を知る上には不可缺のものであると思ふ。

かれと併稱せられ、屢々かれと對立の關係にあつた北一輝の「支那革命外史」が第一革命時代を叙して不朽の名文であるやうに、維新革命の諸士を讚美したかれの人物論には切々たる衷情の吐露せるを見る。北一輝は「古今東西統計表を抱きて革命したるものなし」と云ひ、宋教仁を授け、武漢破れて長江を下るあたり、「踰躑として」非命に斃れた宋の「棺車を引いた」あたり、揮身の文章を爲してゐる。大川周明は平野二郎が佯狂して養家に團欒の妻子を捨て、「君が代の安けかりせば豫てより身は花守となりけむものを」と詠じ、京師の獄裡に長槍で慘殺され

しとき「憂國十年、東走西馳、成否在天、魂魄歸地」と辭世したのに、無限の傾倒をつくして居る。「伊藤山縣等の成金大名(權内ベク内から成上つた)」と云ひ「小田原のラスプーチンの前に最敬禮を表する藩閥者流」と云ふ北一輝、——「空位空名」に狂奔する徒輩を輕侮する大川にはたしかに、稀れに見る浪士の氣慨がある。乍併、餘りに詩人的に、餘りに志士的に、従つて又科學的省察を缺いた、ゆゑに亡羊の感があつたのではないか?

けれども大川の思想的巡歴は決して、頑固一點張りではなかつた。その思想的振幅は、非常に多角的であつた。かれが熊本五高に學んでゐた頃好んで沼山津ぬまやまづの閑村に構井小楠の髮塚に詣でた。田圃に立つ自然石の墓標、清流に臨む小楠塾舎を低回して、かれは「曠原大澤西東に接し、朝靄暮霞光殊なり」と小楠詠する所の沼山津の景を嘆詠した。そして、かれは「四海の戰爭を止め」「世界の一致協同」を提唱せる小楠の思想に傾倒したのである。殊に小楠が水戸學派の肥藩保守派に對して「格別見識もなく、従つて大策もなく、たゞ大和魂とやらを振廻す人人は外人を以て直ちに無道の禽獸となし、最も著しきは初より之を仇敵視してゐる。天地の量、日月の明を以て之を見るならば、何と云ふことであらう。この頑迷固陋が、國家蒼生を過らんと



することは痛嘆限りなき次第」と云つた言葉を推稱する。電線の陰をけがれだとはかり扇子を頭上にかざしたり、牛肉を棒の先きに結んで歩いたりしてゐた熊本の守舊派にとつては、奇想天外の思想家であつた小楠のために「豫言者その家郷に敬重されず」と嘆じてゐる。

かれはまた西郷南洲を「東洋政治禪の一大巨匠」と見る。平野國臣を「狂狷亂を好む實行家」としてよりも「花守ともならまほしき清高隱逸」の人と知る。また「戦へる僧謙信」を武威文雅の兼備者とたゞえる。又法然親鸞の曇鸞道綽の淨土思想を悦ぶ。更に佐藤信淵の救世済民を尊重する。しかも單に日本人だけではなく、プラトーンの理想國、エマーソンの人間自然の融和、ベームの「至深の内生」陸象山王陽明の格物思想、ダンテ、ダ・ギンチ、スピノーザ、ヘーゲル、フイヒテにも入門する。そして「予は實に日本に思想なし」と思つたことさへあると云つてゐる。五高時代ソシアリストの評を得たかれは「社會制度の根本的改造を必要とし、實にマルクスを仰いで吾師とした」こともある。

かやうにかれの思想的遍歴は頗る多岐に互つたが、終に「精神多年の遍歴の後、予は再び吾が魂の故郷に復り、日本精神其者のうちに、初めて予の求めて長く得ざりし莊嚴のものあるを

見た。」と述懐し、その思想教化的活動が社會教育研究所となつて現はれた譯である。

思想家としてのかれは、フアーストの巡歴を踏んだが、社會的人道主義者たらずして、民族的國家主義者に成長して行つたのである。その巡歴は草鞋ばきと握りめしでなされずに、長劍と奔馬とを以てなされた。従つて、かれの思想はヒロイズムの典型的経路を進んだのである。ムツソリーニが、わが教師はマキアヴェリ、マヂニ、シヨーベンハウアー、ニーチエ、ステイルネル、ウイリアム・ジエームス、ジョージ・ソレル、ブランキイ、パレト、オリアニにありと云つたのに比べて、はるかに東洋的に汎神論的に、その先達を求めてゐる。思想家としてのムツソリーニの教師選擇には、權力、權變、主我、勢威と云ふやうな一定の方向があつた。大川の選擇は遙かにナイーヴに無差別的であつた。しかもなほ、そのコースは、英雄主義的に逸過されて結局ムツソリーニのそれに趨きつゝあつたのである。これは科學的規定を第二義にし現制度の修正的方法を推進するそのメトードの當然の結果であるし、又一面かゝるメトードが時代の支配的勢力の必然的方向に合流する自然性をもつてゐたためである。その意味でかれも亦現代の寵兒であつたと云へる。



かれの思想が四通八達の段階を踏んだやうに人間大川も實に多角的である。ストイック的な一面にエペイクリアンがひそんでゐる。果敢な闘争力の半面に多情多恨がかくされてゐる。實にかれは公私ともに多情多恨であつた。大連市の巷間に亂酔し、宮崎では犬養に面會を拒まれて側近者をへこましたりする。豪放性があるかと思ふと、酒亭でゆき合つた知人に清遊の口外を親展で封じたりする。單純に似て複雑、複雑に似て單純な人間大川には、英雄と凡人とが雜居してゐる。放歌高吟するかれは醜つて沈黙考する。讀書三昧の次ぎには、猪突邁進する。その變轉の間に少なからざるスキを見せる。これは乗ぜられやすき社會人大川の缺點であると共に、親しみやすき人間大川の美點をなすに相違ない。かやうな點は多かれ少かれ何人にもあることだが、大川の場合はその干満の差が際立つてをり、その型が大きいと云はねばならぬ。けれどもかやうな性格的多面性は創造的才分にはむいてゐるが、守成的な或ひは組織的才幹を閉め出す場合が多い。少なくとも事功を収める實行家たり得ないと云へる。筆者はさう云ひ切る前に實踐家大川の足跡を顧望して見度い。

## 二、實踐家としての大川

かれの實踐家的手腕のまづ發揮されたのは、五高時代が社會的に知られた最初のものであつた。それは明治卅九年頃であつたが、櫻井鏡二の兄さんの櫻井房記が五高校長の頃、栗野大使がロシア赴任承諾の條件として老母を看せしめるために五高生たりし息子を、文部省の規定に反して一高に轉校せしめた事件がある。この條件を遂行したのが時の首相の桂であつた。一高でも問題となつたが、五高でも大騒動になつた。櫻井校長排斥が日頃から不人望だつた渡邊教頭排斥と變はり、これに武藤(虎太)二宮ら渡邊反對教授連の内紛も一緒になつた。その結果櫻井校長學校騒動となつた。澤柳らが鎮撫使として派遣されたのもこの頃であつた。その結果江藤(現辭任して松浦寅三郎が代り、渡邊は轉任、武藤、二宮らは休職となつた。學生側では江藤(現奉天圖書館長)が放校になつた。此時の學生運動の最も尖鋭なアジテーターが、わが大川周明であつたのだ。はじめ學生代表などになつてゐた高田保馬の變説を痛撃して大内兵衛らの下級生にヤンヤと曰はせたのもかれ大川周明であつた。當時の大川が、首相桂を相手に取て不足は



ないと許りに蹴起した有様は目に見えるやうだ。かれは後年大正十四年頃、行地社を安岡正篤、狩野敏、村上徳太郎、清水行之助、長野朗らと共につくつた。

この當時から、かれが社会運動に逆流する態度に出たことは云ふ迄もない。が、大川も一種の争議を引きうけてゐる。それは安田保善社の社員七十名の罷業である。はじめは、社員側の味方であつたが、北一輝が横から出て来て、専務結城豊太郎と私的會見を果ぐるに及んで、大川も後れじとその轍を踏み、武士道的解決法だと云つて罷業社員に「切腹」(辭表提出)を迫つて罷業者側をして啞然たらしめた。ところが數十通の辭表をまとめて結城にもつていつたところ、辭職勸告を君に頼んだ覚えはないと云ふ結城の一言にこんどは大川が啞然とした。結城は罷業側を一人一人會見して従順を宣誓せしめて復社せしめたが、引込みのつかぬのは大川であつた。かれは、このとき、北の支那革命外史出版以來、固く結盟した北と別れた。そればかりではなく、大川自身の聲名も地に墜ちた。これは何も初めから悪意をもつてした事と云へないが、理論的吟味の缺けたために犯した過誤であると思ふ。

更に後年、山本条太郎を説いて、東亞經濟調査局を滿鐵から分離せしめ、獨立せる組織とし、

思想傾向や膚あひのちがつた優秀分子をも抱擁して眞面目な調査研究を續行した。今日、内部的動搖があり、將來の方向が益々危ぶまれてゐるにもせよ、ともかく研究所機關の乏しい我國に一研究機關を残したのはかれの一事業であつたと思ふ。

昭和六年政治的變局の次第に擴大するにつれ、かれの實踐慾はむくむくと擡頭して、その千里の逸脚に拍車して止まないやうになつた。裏面的動向のどれにもかれの姿は影の容に添ふが如くであつた。その間に於ても舊知牧野内府との關係がかれに誤解の暗雲をかぶせたりしたのである。昭和七年二月に至り行地社を擧げて新團體神武會に合流せしめ益々その運動範圍を擴大した。しかし、その、蹉跌前後から、運動の中心は次第に神武會を去つて、南洋事業家石原某の支持により大將田中國重を會長とする明倫會あたりに移つて行つたと思はれる。

大川の實際運動はかやうに、アジテーションに特長をもつてゐる。組織力はあるが、一組織を創造すると同時に次の行動の方がより多くかれを牽引する。だから組織自體もそのアジの一方法に過ぎないと云ふやり方である。その意味でかれは、ムツソリーニよりもダナンチオに近い一面をもつてゐる。それは丁度大山郁夫がケーア・ハーデイでなくてハインドマンであるの



と、やゝ似てゐると思ふ。

### 三、かれの歴史的地位

大川周明の思想が汎神的であり、その人間が情熱的であり、且又その實踐が煽動的であるのは、たしかその性格に主觀的原因があるのだが、一面に於てかれがさうなつたに就いて客觀的の理由がなければならぬ。それは右翼運動に於けるかれの歴史的地位を觀ることによつて明らかになると思ふ。右翼思想運動にもその發展に三つの段階があつた。その第一は啓蒙期であり、その第二は日本研究時代であり、その第三は實行期である。現在茨城縣の愛郷塾、柴山塾の如き、和合恒夫の長野縣松本に於ける端穂精舎の如き、又は嘗つて埼玉縣内務部長にして森格に近い横尾惣三郎の香川縣や岐阜縣に於ける農民學校の如きはこの第三期の産物であり、權藤成卿の研究及びその學塾は第二期のものである。そして大川、安岡の時代は寧ろ第一期の啓蒙期に當ると思ふ。丁度社會思想に於ける吉野、大山、河上時代に相應する。わが大川はすべての時代を通じて幅の廣い歩武を進めては來たが、その特長のすべては啓蒙期に歸屬すべ

きものである。従つて、かれの多方面な思想内容や、情熱的な行動には、啓蒙期を作り、或ひはそこに永く生息した思想家に共通な惱みを見出し得るのだ。大山郁夫が袋路に突入して外遊を餘儀なくされたやうに、かれも亦、思はざる不覺を見るに至つたのである。

### 四、蹉跌せる大川

國家機關のすべてを通じて今や急進的なファツシヨ行動を抑制して國家的統制力を全面的に強化せんとする傾向が觀取される。丁度イタリーに於て、マテオツテイ事件や政策問題に就いて、インテリ層や農民層出身のファツシヨ指導者がムツソリーニと衝突して、敗退した一九二四年頃の情勢に酷似してゐると思ふ。それは政策の可成り大きな轉向と云はねばならない。滿洲國自治指導部に於て國家社會主義傾向のものが百數十名退職した。急進的な少壯軍人も多く這般の人事異動に於て閑地についた。五・一五關係軍人は陸海軍ともにやゝ嚴罰方針に傾いたと傳へられ、非軍籍者が司法部に引渡された。愛郷塾主は橋本中佐に助けられて自首することが出来た。かゝる形勢の裡にあつて、大川がいかにして蹉跌しなければならなかつたかは容易



に想像される。けれどもかれの失脚は事實以上の或ひは過認された事實に基く、必要以上の運命に適當するのではないかと想像される。歴史は残酷である。それは生物ではない。歴史は激流である。暗礁に充ちてゐる。

筆者はかれを多面的で複雑だと云つた。が、その内最も著しいのはかれのもつ二面性である。本來かれは清河八郎に私淑すること頗る深かい。かれの著「清河八郎」は、恐らく、その人物傳中最大傑作であると思ふ。清河は大川と同郷の莊内藩である。郷里を出奔して、夷人館焼打ちをやつたり水戸天狗黨と聯絡したりした。その上、關西九州に迄赴いて、尊王攘夷派の結成に狂奔した。一轉して、幕府の大赦をうけて浪士組を組織した。しかし浪人組の指導精神は近藤勇の新撰組などと違つて山岡鐵舟、高橋泥舟らと結んで、勤王攘夷主義であつた。攘夷の勅諭を隠匿したのを厭ひ、且つ浪士組の異心あるを知つて、その信用失墜のため偽浪士組に亂暴狼藉させた幕府と尖鋭に對立するに至つて、終に麻布一の橋で暗殺されたのである。大川は清河を「幕府召集の浪士組に入つたとて、かれの晩節を云々するは荒涼無限の沙汰」と辯護し、かれの死後、「改造團體たる」浪士組が「御用團體たる」新徴組に變つたことを痛憤してゐる。そしてこの

短氣の幕末志士がその妻に「我性急且暴、動作<sub>ニ</sub>奮怒聲<sub>ニ</sub>、彼(妻のこと)必付<sub>ニ</sub>我意<sub>ニ</sub>、知<sub>レ</sub>顔解<sub>ニ</sub>其情<sub>ニ</sub>。」と一詩を送れる人間味や、その學識に無限の敬意を表してゐる。

表面浪士組頭にして、實は勤王倒幕派たる清河は、たしかに、かれの心境と通ずるものがあつたらう。

客觀的に大川の運動が右翼團體のものであることは十目の見る所だ。しかし主觀的のかれの内心は清河式のものであつたに相違ない。勿論幕府對朝廷と、資本家對労働者農民との關係を混同せる誤謬はあつたにしても。

かれの知音安岡正篤は同書に跋してかう云つてゐる。「清河は眞に維新の先覺中でも非凡な人傑であつた。唯其の英氣餘りに煥發し過ぎ、その才鋒甚だ露出し過ぎた。さればこそ彼の畏友高橋泥舟も之を案じて彼の性命の爲に深く養晦の工夫を説いた」と。又曰く「兄は正明(清河)と郷土を同じうし、又實に風神を同じうする。若し大正維新を思ふて、正明を求めらば、兄を看みるが一番である。私は唯深く兄の不慮を免れんことを心竊に祈る」と。昭和の正明たる大川の身上を道破し得て至妙であると思ふ。(1932.6.10稿)



## 尾崎罌堂の心境

※ ※

尾崎罌堂は急進的なブルジョア・デモクラシーの指導者として果敢な闘争生活を經來つた。刺客や壯丁に肉薄された事も二度や三度ではなかつた。だが其度ごとに閃光の如き機智と膽力でその利那を突破してゐる。かれが煙草の火のついたのを右手にもつて、火鉢にかざしてゐれば、咄嗟にこれを相手の眼に擬して危難を脱し得ると云つたことがあるさうだが、これなどかれの機敏な神経の鋭さを示す一斑である。尤もその程度の迫害者なら、この位の方法で防ぎ得ると云へるかも知れないが。

横井小楠が、かつて江戸で襲撃されたことがある。數名のものが白刃を提げて二階に押し上つて來た。咄嗟に小楠は、ほつかむりして『旦那方ちよつくらごめん』とか何んとかいひなが

ら、その間をすり抜けて梯子段を下り、難を逃れた。

罌堂はこの小楠の態度を激稱して、この沈勇、敏捷さは到底學び得ないと云つた事がある。かれは自由民権運動のスツルム・ウント・ドランクの間を切抜けて來ただけに、常に死生の問題を考へさせられて來た。このことが、常にと云ひ度いほどかれの念頭を去來する。殊に大正政變時代の華々しい幾度かの憲政擁護の大運動のときなど、犬養木堂と共に、實に目ざましい死闘を敢てしたと謂はねばならない。

だが、主義上終生の政友たりし犬養が五・一五事件に斃れたる後に於て、彼の心境は俄然衰弱を見せたのではあるまいか。外國には馴れてゐる筈のかれにしても、老齡にして異境にある者が多少神衰氣味になることは、あり勝ちのことであるから多少心身の疲勞を覺えたであらう。又テオドラ夫人が重病で終に死去するに至つた身邊の悲境も想像に餘りある。更に罌堂會やその他の崇拜者同情者が何や彼や、申し送つたことも手傳つたことであらう。

だが罌堂畢生の文章だと自ら云ふ『墓標の代りに』は、かゝる怨すべき幾多の事情のあるにせよ異様の感じ以上のものを與ふるものではなかつた。



『老齡の身を以て、天涯地角を漂泊する以上は、何時死んでも差支ないやうに墓標を造つて置く方がよからうと考へた。それも世間普通の石塔や銅標では、面白くないから、其の代りに第二維新の方針ともなるべき事項を列記して、之を墓標に代用しようと思へた』のが此の一篇の生れた所以だ。

そして更にかれば附加して『近來日本には暗殺が流行するから、私如き者でも、歸朝の上、忌憚なく國家のために赤誠を吐露すれば或ひは殺されるかも知れない。前途有爲の青少年の身を以て、捨て、置いて、やがて死ぬべき古稀以上の老人と、生命の交換をするのは、随分算盤の合はないやうに思はれるが算盤などをはじいては暗殺は出来ない。團氏や犬養氏を虐殺したものの、あるのを見れば私を虐殺するものもあるかも知れない。先づあると思つて打算した方が、安全率が多い——。私は何處までも『打算的だ』と。この打算から最後の御奉公となるべき意見書を作成する期間、英國と云ふ安全地帯に滞留すると云ふ。

いまやその小論も完結したから近く歸朝のはこびになるさうだ。

筆者は随分注意してこの墓標の文句を精讀した。あの時代の、あの年齢の人としては可成卓

見と思はるゝ節々や、響きのある行論の句々がないではない。併しながらその要點は、武力主義に基づく施爲は、如何に巧妙敏活であつても世界の氣勢に背馳すと論じ、武力主義に對し平和主義を強調した點と、國家主義に對して國際主義を主張した點とであつた。しかもこの議論が、政治家の當然なすべき事務に觸れずして、レクチュア式になされてゐる。それへ結論と見るべきものは、餘り急務とも思はれない漢字廢止論である。

日本が暗殺者でうよく／＼してゐるやうに思ふ點にも認識の過不足があるし、その上、尾崎學堂がその一對象となつてゐるやうに切實に思ふことは、更に大いなる錯覺がありはしまいか。借問す。漢字制限又は廢止論を唱へて虐殺されしものありや否や？ と。さうだとすれば田中館博士や土岐善麿は可成り不安な筈である。どうも筆者には、かれが被害妄想を抱いてゐるやうに思はれてならない。親切のつもりで色々云ひ送つた學堂ファンが最負の引き倒しに終り學堂をして愕堂たらしめたやうに惜まれるのである。

※ ※

學堂若かりし頃某生命保險の勧誘員が加入を一生懸命に口説き立てた。かれは宰相として國



葬になるものだから保険の必要はないと答へたと云ふ。

かれの墓標論は、この國葬論の變型した稚氣旺盛せるものがある。死を見ること歸する如くして、實は甚だしい派手好みが現はれてゐるのではないか？

粵堂は伊勢に生れ、福澤諭吉門下として、慶應義塾を卒業した。犬養と共に福澤門下政客中の雙璧だつた。新潟新聞主筆たりしときが僅かに十八歳、或ひは甲州峽中日報の主幹となり、報知に木堂と共に論陣を張つたりした。大隈伯の下に統計局書記官となり、又大隈と共に下野して改進黨領袖となつた。かれの南去以來の政戦は彼れをして押しも押されぬ議會闘士たらしめた。今日に至る迄一貫して三重縣選出の代議士たる經歷の中には自由主義の最前線闘士としての苦闘の歴史が織込まれてゐる。

憲政黨内閣に文部大臣となつたときは三十八歳であつた。内閣倒壊後、政友會に入り、虐待されながらも東京市長となり、星亨系の連中にこづきまはされた。又大隈内閣のとき臺閣に列し、大浦事件を摘發して、司法大臣として公平振を示したりした。

かれの經歷中、最も注目すべきは評論家時代と、保安條令に追はれて、悠々外遊の途に上つ

た頃と數次の憲政擁護運動の時代にあつたらう。

大臣席の桂總理を指頭で鋭く刺しながら、まさにかれを氣死せしめんとした彼には、印度惡總督ヘースティングを弾劾したエドモンド・バークの風貌があつた。この時の彼の追憶は二三年前のサンデー毎日々か何かで讀んで今なほ印象に新たである。

又ワシントン軍縮に先だつ前年、軍縮論を力説して先見をたゞへられたのも、かれの政治生活活中のエピソードであらう。

かれの理想、理想追及の氣魄、黨類になづまぬこと、清廉なること、人格の清澄なること等は確にかれの政治的行藏を顯著ならしめ、彼の人物を傑出せしめた所以である。

※ ※

けれども憲政黨内閣の後、遽かに大隈を去つて伊藤に接近し、伊藤に翻弄されて、遂に進歩黨を除名されざるを得ざるに至つたあたり、又その後にも離合、出入の常なきは、理想家の一面なりとしても、人間的稀薄さを感じしめる。

中江兆民は此の點に關して尾崎を評して『先年共和演説の餘毒を拂拭するには、伊藤侯天寵



の渥を慕ひ、侯に頼り以て身を立つるに如かずと慮かりたるものにて、其の露と謀を連ぬる云々は、特に一時世人を瞞着せしに外ならざりしと、此の想像にして真に近き乎學堂終に節義に病むこと無きこと能はず、左りとは學堂も亦其の聲價を減ぜられざる能はず、我れ其更に一層政事家的なりしを信ぜんと欲す、要するに其の智木堂に及ばざること遠きこと甚だし」と。

兆民の此の批評は想像をまじへ稍酷評に失すると思ふが、多少その傾きはないでもない。殊に、かれがイギリスのビーコンス・フィールドに私淑して容貌、服装に擬つた虚飾的傾向は、山口孤劍の指摘したやうに一つの缺點であると考へる。

孤劍が、フロツクに山高帽をかぶつて向島の花見にゆきべらんめえの兄にい連から嘲笑された學堂を叙述してゐるのもその一例である。その後五つ紋に白紐、また素肌を出さぬため襦袢の下にホワイトシャツを着てゐたと孤劍は學堂を裸體にまでしてゐる。そして芝居に出る若殿様のやうだと評してゐる。

東京にいゝ理髮師がないため三日に一度電報で横濱から外人の職人を呼んだと云ふのは、やや誇張かも知れないが、かれの生活が大隈張りにせいたくなものであつたことは容易に想像し

得る。従つてかれの借金も後進や子分を引立てるためよりも、貴族的生活に起因する方が多かつたらしいのである。

山口孤劍の剔抉してゐるかゝるかれの生活的一面は缺點には相違ない。が、もつとひどい悪癖、悪趣味をもつた政治家の多いのに比すると寧ろ奇癖と見るべきものに過ぎない。況や請託其他不正の少しもない學堂の眞面目は、群小政治家中傑出してゐたと云つていゝ。寧ろかゝる純潔性が奇妙な形ちで身邊の習癖として現はれたものと見るべきものである。

尾崎學堂の眞骨頭は理想主義的政治家たるにある。その生涯を通じて今日に至る迄の議會政治への貢献は、たしかにかれをわが政治史上における秀抜なる歴史的人物たらしむるに足る。

だが、政黨の腐敗と、議會政治の低下とは近年のかれの心境を著るしく搖盪したらしい。そのため洋行以前でも、かれは必ずしも政黨政治の支持者ではなかつた。宇垣一成との關係などは彼の議會政治に對する心境の變化を物語るものではないであらうか？

従つて『墓標の代りに』を讀んで、歸來後のかれに從來通りのデモクラシーの闘士を期待するものありとすれば、それは甚だ目算が外れるかも知れない。筆者の想像する所ではかれが鈴



木を援けて純乎たる政黨内閣の樹立に努力するよりも、宇垣あたりと結んで超然協力内閣に盡力するか、或ひは政黨聯立内閣を思案するのではあるまいかと思ふ。

これをかれの虚飾癖から出た大臣病に出ずと解するものがないでもないが、矢張りかゝる方法によつて、かれの墓標に論述された政治的意見の實現を計ると見るのが妥當である。

かれは政治上多年の知音たりし犬養の死に精神的打撃を蒙むつたらしい。だが、總理のごとき顯位になきかれの現状には先づ此の危惧はない。況や鈴木の如く可成り強く政黨内閣を突張るイデオロギーをもつてゐないのであるから、此の點に於ても、危険は半減する。寧ろあの被害者の意識のみが危いと筆者は考へざるを得ない。

粵堂は大手を振つて歸朝して大過なしと思ふ。現在の状態では、かの意見、かの熱情もなほ活躍の餘地がある。その結果、かれの政治的生命も相當打開されて來るかも知れない。

犬養なき後に於て、このベテランがいかに政界に孤城を守るか？ その守り方は犬養や鈴木と別途に出るかも知れない。恐らく上記したやうに、議會政治、政黨政治の一本槍ではあるまい。兆民の所謂『學堂の政事家的』な點はこゝらにあるかも知れない。

だが、その方向たる、平和主義と國際主義はいかなる政治形式によつて實現し得ると考へてゐるのであらうか？ 議會政治政黨政治を弱める方向に求め得ると考へるのであらうか？ 尾崎粵堂の『理想家的』(空想家的)な點がこゝらにあるのかも知れない。とまれかれの歸國後の政治生活は一つの疑問である。(一九三三・一・一〇稿終)



河上肇と大塚金之助

※ ※

小杉天外の小説の中に銀笛と云ふのがあつた。可憐にして純情美しい少年の姿がそこに描かれてゐる。

少年は草笛を吹く。

この少年が幼き大塚金之助の面影であることを知る人は少ないであらう。かれが四十二歳の今日に至るまで一貫して育みつゞけて來た内面的の情熱は純粹で眞直ぐな、生れながらのものであつたと私は思ふ。

畏友三枝博音にたのまれて唯物論研究會發會に講演に行つたとき、歸りゆくかれの脊中を見ただけの私であるけれども、かれの知友、弟子に當る人々の印象を綜合して、さう思つて間違

ひないであらう。

かれが講義などするとき「眞理の探求者はいばらの道を進まねばならぬ」と云ひ、又多くの人が「食なく飢えてゐる。私共は一杯のコーヒーすら安閑としては飲めない」と云ふかれの心持ちを何人か、刑事被告人なるが故に、輕蔑し得るであらうか？

進歩的インテリゲンチヤでも、特種の例外的資質をもつ人を別として、大部分同伴者の又は傍觀者的な傾向をもつてゐる。従つて、人道主義的な氣分が、濃淡の差こそあれ、つきまとうものであることを否定出來ない。

かれにひそむこの持味を、センチメンタリズムの故に、ヒウマニズムの故に、石もて打ち得る自信あるものが果して幾人あるであらうか？

一般理論が、進歩的インテリゲンチヤのいかなる肉體と腦細胞を通じても具象化し得るものと速斷し、その速斷に出發して、非難すべからざるものを非難し、推稱に價ひしないものを推稱することを自分は執らない。尖鋭な理論を口にし、筆にすることはたしかに進歩的インテリの習癖の一つに相違ない。だが、これは客觀的規定であつて、それが主觀的な個體的な内容と



正しい統一を保つてゐるかどうかが問題である。客觀的規定の機械的適用が個體を空洞とするに役立ち、又客觀的にも餘り有用のものでなくしてしまふ場合のいかに多いことか！個人は生れながら社會人だ。個人は社會化された人間である。けれどもこの公式は、機械的適用をそのまゝ肯定するものではなく、具體的内容ある社會性及び階級性を要請する意味を含んでゐるのである。

大塚金之助は完全に——然り完全にと云つていゝ、——書齋人であつた。又學窓裡の人であつた。

かれのものした論文のどれを見ても、孜々たる好學研究以外のものを私は見出さない。その究理の底邊に潜在するところのものが何であつたかその志向が那邊を指呼してゐたか？ についてはもとより云ふも無益だが、かれの生活態度が眞理の底を叩き出すことに盡きてゐたことは十目に見る所であつたと思ふ。

計畫經濟を論じた昨年あたりのものでも、その他筆者の讀み得たすべての論文は丹念に讀書し、克明に拔萃し、根氣よく集積されたる資料的性質のものであつた。文彩あるかれの筆致

は、あのやうに純資料的の論稿をば、蠟を嚼む思ひをさせず、すらすらと分かりやすく、讀む者に印象させたことは確かだ。だが、それは少しもアジ、プロ的煽情を罩めたるものではなかつた。筆者は、マルキシズム理論の學問的研究の深さに於て山田盛太郎、榎田民藏、向坂逸郎の三者に敬服するが、これを實證的研究と現實的知識の體系に具體化する點では猪俣津南雄の堂々たる巨匠の面影と、わが大塚金之助の倦む所を知らざる眞摯なる學究的態度を推稱したのである。かれの仕事には大山郁夫のもつ行動性は現はれてゐない。又福本和夫の、又三木清の、おつかぶせるやうなものを持つてはゐない。

それだけに行き過ぎや、誤謬や、誇示を避けて、あくまで具象的に、滋味のある基礎的な勞作を示したと云ひ得る。大山、福本、三木の示した能動的な、多彩で果敢な特長を、かれは持たない。そこに却つてかれの存在理由があつたかと思ふ。

卓越した克己的勉強家がやるカード式勉強法をかれは採つてゐた。讀破し涉獵しゆく充棟の書籍を、裏から表てから、又部分的に全體的に、或ひはザツハリツヒに、ベルゼーリツヒにカードにノートしてゆくゆき方である。左肩から右脇下に讀むな、め讀みや、孫引きや、序文讀



みやインデックス読みをやるやうなことをしない。それは丁度支那學の最高權威者狩野直喜、政治學界の元老小野塚喜平次式の勉強振りであつたと思ふ。

従つて、彼に著書と名くべきほどのものがないと云つていゝ位ひだ。それはバラドックスのやうだが不勉強なるがためではなくて、ほんとうに勉強家であつたがためである。

かれの唯一の著書は「世界經濟恐慌と消費組合運動」と云ふパンフレットであつた。

有名なマーシャル經濟原論の翻譯、かれの主宰により數人の同人でつづけられるヴァルガ世界經濟年報の譯書、日本資本主義發達史講座中の文獻目錄等々を見ればかれの勞苦の多くが分かる方面にむけられたかがわかる。

かれは卒直に「自分には唯物辨證法がわからぬ」と洩らしたことがあるさうだ。これは確かにほんとうだ。唯物辨證法がわかるとはなかなか云へるものではない。何故ならば、そのことは宇宙體系の巨細を知り、自然及社會の全發展過程をつきとめるか、少なくともその臚げながらの把握に到達しない限りは云へないことだからである。その辨證法の型はかくかくだと容易に云ひ得やう。だが、大塚流に、それを實證的につきとめるとなると、一生の問題、否一生

かゝつて努力の半行程にすら達し得ないと思はれるからである。

かれは故福田徳三と竝んで經濟原論の併行講座に高名をはせた。大福田も全く押され氣味なほどかれの人氣は高く、聽講者をより多く集めた。だが、大風呂敷を擴げることの嫌ひなかれは、この講義でオーストリア學派の解説を試み、つぎつぎに各學派を席捲するメトードに據つたらしい。これはかれの習癖ばかりの結果ではなく、かれの終生の研究題目が經濟學史にあつたがためであると思はれる。

従つてかれは數多くの文獻を集め殊にマルクス文獻の豊富なことは人の知る所だ。

かれは年七十にして、轉向したアメリカの作家ドライザーに傾倒してゐたさうだ。これはかれの根氣の強さをよく現はす逸話である。かれが盛岡出身であるのを思へば東北人的異色がよく現はれてゐると思ふ。日本のリアザノフなるニツクネームある所以もこゝに基くのであらう。

※ ※

生れから云へば、かれは生粹の江戸兒である。明治廿五年五月十五日神田に生れた。その洗



練された趣味性は、そのためであるかも知れない。

かれは、アララギ派の歌人だ。

後にプロ短歌に轉向し齋藤茂吉と衝突したが、そのよみ歌は餘情切々たるものがあったことを覚えてゐる。

又倉田百三の「生活者」にも加はり、ワイマール精神を嘆美し、ゲーテに私淑するところが深かつた。

夏期には木曾の山に入り、天幕生活をしながら勉強したりした。かれが逃走中捕はれたと云はれた天城山下の湯ヶ島温泉も近年例として勉學の隠棲所であつたのだ。

アララギに、又ゲーテに趨いたかれの行動は、その都會人的趣味性にもよるであらうが、又一面インテリゲンチヤの眞理探求の遍歴行であつたと見るべきものだ。三十年配以上のわが知識階級が歐洲戦前からのあらゆる思潮にもまれて來た時代的カラーが、かれにも認められると云ふべきものだ。或ひはかれの特種な家族的理由から、煩悶の解決を求めた巡禮的行路に歸すべきものも存在したらう。

神戸高商に學生たりし頃坐禪して苦慮の解決を求めた姿も浮んでくる。その頃は寧ろアナキスト的な傾向が強かつたらしい。東京高商專攻部に入り、その優秀な卒業生として、學校のこり、福田徳三の推挽して措かざる頃から、徐々に思想的な推移が行はれた。殊に、大正八年歐米に留學し、紐育、倫敦、ローザンヌ各大學の門をくゞり、ゾムバルトに學び、戦後の悲惨なる社會相と、澎湃たる社會運動を見來るに及んで、その推移は次第にハッキリした形ちをとつて來た。

大正十二年歸朝して商大教授となつてからも、小泉信三、坂西由藏と並んで福田門下の三羽鳥とたゞえられ華やかな學界の寵兒となるに及んでも、その志向はこの社會的地位に眩惑されることはなかつた。盲ひた坂西由藏は別としても、小泉信三とは漸次對立的な陣營に傾いて行つたのである。

かやうにかれの進路は歐洲戦争を契機とした社會的潮流の影響を孕んで一步一步築かれて行つた。だが、あの氣むづかしく、同僚中毆られないのは左右田博士位だとさへ云はれた福田徳三の門弟に對する熱愛は、かれを長く商大の講壇に引きとめて、とく來り、とく去ることを



得ざらしめたものと思はれる。それでもかれのなさんと欲することを自から矯めてゐたわけではなく、歸朝後東京社會科學研究所を設立したり、ヴァルガ世界經濟年報を監修したり、武藏野消費組合の理事長をしたりした。又「女人藝術」を助けたり、ソヴェット友の會を指導したり、多角的な接觸面を見せてゐた。消費組合で組合員に何かあつて、にがき失敗を喫したこともあつたが、かれは病弱な體を引きづりながら、親切に面倒を見て行つた。

※ ※

新生共産黨關係事件に就いては、一説には昭和三年二月頃（三・一五の前）の總選舉の際左翼候補者に八百圓を出し現在まで月額十五圓づつを出したシンバ關係のためとも傳へられ、或ひは千位の金を時々支出し、シンバ以上であつたとも報ぜられる。

そのいづれかは裁判確定までわからない。商大學生の大塚教授釋放運動はマルクス主義擁護、刑事被告人擁護の意味があるとて制止されたが、大部分の學生は人として、又教授としての恩師に對する人情に發足したと思はれる。

しかく、大塚金之助は純乎たる人間味をもつてゐた。その畢生の志しも理論研究に主眼を置

いてゐた。かれが商大に辭表を今日まで提出せざる所以も、職に戀々たるためではなくて、その罪の重からざるを信じ學窓の人たり得ることを考へるためであらう。又或ひは、多少大學教授の地位に對するかれの所見を試みる意味をもつものであるかも知れない。平野義太郎、山田盛太郎の場合の如く、豫測の齟齬した場合もあることだから、戀々たりとの非難を押し切るのも、結果は別して、已むを得ざる所かも知れない。

家に老母あり、弟妹あり、妹さんは女子大學を退いて速記を學び、弟さんも早く白木屋をやめて方途に迷ふと聞く。その慈兄、愛兒を思ふや切なるものがあらう。その罪の輕からんことを想像し、又その虚弱なる體質の耐へがたからんことを思ひ、更に又その究學が遠き將來に寄與の一片を捧ぐることもあるを考へて、その罪の輕からんことを望むものは獨りこれら弟妹のみではないであらう。……

大塚金之助は獄中にもなほ生き抜くとは思ふが！

※ ※

河上肇の送獄された日は、堺枯川の無宗教葬の行はれる日でもあつた。



雪のチラチラする寒さのひどい日で、水漬をすゝりながら、僕の友人は云つた。「河上さんは颯爽としてゐたね」と。又、今日は「コーヒーも飲めない」と。

「茶微塵の袖の對の袷に外套も著ず、帽子もかむらず身の廻りの品を風呂敷包みにして手に提げて」と新聞記者が書いてゐる。

そのときの歌に、

「たどり來しふりかへり見れば山川をこえしはこえて來つるものかな」とあつた。

※

※

この歌を見れば河上さんの心境がいかなるものなるかがすぐわかると思ふ。黨員の無言の鬭争でないことは云ふ迄もない。鬭争的なアジの歌でないこともわかる。それは低徊的な書齋人の静けさを見せたものだ。もつと外に詠まれたものがあつたのかも知れない。だが、この發表を許されたものだけを見ると、その詩趣はソクラテスの心理であつて、スパルタクスのものでないやうに思はれる。

もう一つ「捨てし身を日に拾ふ生命かな」と云ふ俳句が示されたとあるが、これは誤りで

71 はあるまいか。この句は明法四十二、三年頃のものと思はれる。その人道主義時代の句であつた筈だ。

※

※

伊藤證信が最近一文を草して、社會主義評論から無我愛に、無我愛から國家主義に、國家主義からマルクス主義にと博士が轉々したことを説き、その本質は「徹頭徹尾儒教的教養に導かれたものだ」と論ずる。そして「獨り靜かに未決監に黙想を凝らした結果、又々轉身して儒教的人道主義の正道に歸つて來られるのでは無からうか！」それとも「更に進んで非人道的な道に徹して行かれるであらうか？」結局は「氏の最深の性格如何によつて、何れともその使命が決せられるであらう」と。

大塚金之助の場合は、すべてがこれからと云ふ感があるが、河上肇の場合は、伊藤證信の云ふが如く「行く處まで行かれた」と云ふ印象が強い。

それは五十五に達する年齢のためもある。が、又かれの足跡が今日に至る迄力強く踏みつけられその完成點に達したかと思はれるからだ。



博士の思想行程を證信の如くに、單に内心的の「深き性格」と熱烈な情熱の方面からのみ見ることには出来ない。儒教的封建的教養と、人道的自由主義時代の思想と、今日の社會主義的傾向の時代に亙る大いなる轉換と、かれの個性との相關のないきさつを思ひめぐらさねばならぬ。

博士はそのいづれの教養、性癖をも個性内に具備してはゐるが、その社會的行動はそれぞれの時代によつて制約をうけてゐたのである。本質を時代と離れて決定する！ それは出来ないことだ。

だが、博士が、百パーセントなり切つたプロ闘士ではないと云ふこと——それは何人も否定し得ないであらう。かれの經歷が、又かれの閱みした各時代が、さう云ふ制約を置かずにはゐないからである。

河上肇の「たどり來し山川」は、めまぐるしき變轉の幾星霜であつたが、そこに印されたかれの足跡も一寸比類のないほど大きい。これは評論界に於ける長谷川如是閑翁に比すべきものだ。

明治十二年十月山口縣岩國に生れ、帝大法科政治科を出たのが明治卅五年、博士と同じく法科研究室助手として國家學會雜誌の編輯をやつた筆者は、吉野博士らと共に當時の「國家學會」を編した時代のかれに就いて又聞きする機会が多かつた。たしか昔の同雜誌にその論文があつたやうに記憶する。

世路の第一歩は農大實科、及び學習院講師にはじまり讀賣新聞記者として社會的に進出した。千山萬水樓主人のペンネームでそのとき書いたのが有名な「社會主義評論」である。その文章は、中江兆民、又はその弟子の幸徳秋水風のものである。三木清がブルジョア啓蒙期の名評論家として兆民を挙げ、プロレタリア啓蒙學者として博士を對比せしめてゐるのは、文章の上から見ても興味あるところだ。筆者の常に兆民の一年有半と共に愛誦措かざる名文であるから、一寸その一端を載記することを許してもらはう。

「社會主義評論」開卷一頁は次の文章ではじまる。

「北鷗兄足下、余不治の病を得て、西歐より歸朝し、房總の間に客たること茲に二年、憂愁頻



りに繁くして心胸轉た平ならず、此地四圍の風光頗る身に適すと雖も、宿痾恐くは全癒するの  
日なからん、朝に鏡が浦の曉色を眺め、夕に富士の暮景を眺むる、快は即ち快ならざるに非ざ  
るも、竟に丈夫世に處するの素志にあらず」と。

又曰く、「夫れ社會主義の本質たる、固と經濟上の一主義たり、然も關聯する所、政治、宗  
教、倫理、道德、其他社會各般の事項に及ぶ、隨つて之れが完全なる批評は、是等社會各般の  
諸學に精通するの士を待つて始めて聞くを得べし、宜なり矣、本邦社會主義に關する著述の多  
く、見るに足るなく、其社會主義者の手に成れるものは、概して偏狹獨斷の弊に陥り、其の然  
らざる者の手に成れるものは、更に情熱誠意に乏しきの短を加ふるや、余も亦固より之れが任  
に耐えずと雖も、希くは少しく茲に力を致さん歟、古詩に曰く、「無限心中不平事、一宵清話總  
成空」と、余此地に僻在してより久しく心交の友に接して清話を聽くを得ず、滿腔の不平遣  
るに所なし、若し日々筆を執つて天下幾萬未知の人と語る、或は以て這の不平を忘るゝに足ら  
ん歟」と。

或ひは佐藤法學士と清談し、「この夜、月明に星稀に、一望の夜色恍として夢の如し、二人相

對して海樓に坐し、鮮魚の潑刺たるを割きて、村醪の美なるを斟み」と記してゐる。ヘン  
リー・ジョージを論じ、「民權是れ至理也、自由平等是れ大義也」と云つた兆民「命もいらす、  
名もいらす、官位も全くいらぬ人は、始末に困るものなり、此始末に困る人ならば、艱難を  
共にして國家の大業を成し得られぬなり」との南洲の言をひき、いまの「學者政治家の始末し  
易きに驚くのみ」と痛罵する。又トルストイを「一片海生月、幾家人上樓」と激稱し、又マ  
ルクスの「物質的歴史觀」と「科學的社會主義」を解説する。

その縦横無礙なるは應接に遑なく、博士の多角的才識、此一巻に最もよく現はると云ひ度い  
ほどである。

そしてその著の例言に、「社會主義評論を書くに當つて、最初考へました事は、自分が執筆者  
であると云ふ事が世間に知れては困るといふ事でした。」「何故困るかといへば、外でもない、  
一言にして盡せませす、我利の爲めによくはないからです」と云ひ、「病氣でないのに不治の病」と  
云つたり、「九州へさへ渡つたことのないのに歐米を漫遊した」やうに書いたと斷はつてゐる。  
このことわり書きは枯川のやうなユーモアたつぷりところが、眞面目に無我愛運動へ没入



した事情のもとにかゝれたのである。

かれの文章は今日山川均、荒畑寒村、大森義太郎と共に左翼的評論界の中心をなすものだが、殊に此の時代のものには實に奔放であつた。一部の評論家が「評論」序文の卒直な告白を逆用して、これを非難し、且つその後の思想的巡歴を偏執狂と酷評したのは、博士の性行を理解せざるためである。たゞ、博士が右から左に行つたのに比し、この評者が左から右に移つただけの差があるのだ。

「評論」時代の次にかれば無我愛道場に入つた。又日本經濟雜誌の主筆もやつた。

「善を爲しやすく、悪をなし難き」制度の研究をしてゐるが、「無我愛の實行で即時に成就出来ると思はれる」と云つて、證信らに加盟したのである。

後、國家主義に移つた。明治四十二年京大助教となり、大正二年外遊。「祖國を顧みて」を著した。これも數回繰返して讀み一部章句を憶えてゐるほどの名著だが、いまは割愛する。歸國後の「貧乏物語」(最初のもの)も紙價を高からしめたものだ。前後二十年に亘る京大教授時代は(大正三年博士となる)最も内容あり、業績多き時代であつた。「社會問題管見」「唯物史觀研

究」「近代經濟思想史論」「社會組織と社會變革」「資本主義經濟學の史的發展」「人口問題批判」「資本論入門」「マルクス主義の經濟學」「第二貧乏物語」「資本論」邦譯着手等々マルキシズム紹介解説の譯・著頗る多い。殊に個人雜誌「社會問題研究」は大正九年から昭和五年迄の間に百二十冊前後を發刊し大衆的に讀まれたものだ。

京大時代福田徳三、小泉信三、高田保馬等との論戰、並びに福本和夫との論戰等は常に學界注目の的となつた。

博士は昭和三年に至つて京大を退いた。

そのとき荒木總長によつて示された理由は、(1)マルクス主義講座廣告用冊子中の不穩なる短文、(2)香川縣選舉演説、(3)社會科學研究會中より治安紊亂者の出たこと。——尤も博士は公認されてその會を指導してゐたのだ——そのときのかれの辭表提出理由は「假令如何なる當局者であらうとも學問の社會にとつては單に俗人にすぎざる人々の學問上以外の非難の如きは敢てこれを考慮するを要しないが、經濟學部の決議で總長を経て、大學の意向として決まつたのであるから、大學自治尊重の立場から服従する」と云ふにあつた。昭和二年頃から右翼の一派に



迫られたことは屢々で、又新聞「日本」で、「無定見腰拔の大臣官僚の弱點にのつて傍若無人赤の手先きを稼ぐところに彼一流の伶俐さが見える。彼は此點で正真正銘の一山口縣人だ」などと攻撃してゐたがこれらはかれの意に介するところではなかつたらう。博士が大學をやめたとき、句としてはまづいが「荷を下ろし峠の茶屋に雲雀聞く」と俳句し、「大山君のやうに、政治方面に活動し度いと思ふが健康と勇氣なし」と述懐してゐる。その頃學外に資本論研究會の計畫があつたが、これに對しかれば、「二十代の諸君は生ける現代の心臓である。だが、私は五十の死せる心臓しかもたぬ。大學を去りて最も惜むは潑刺たる學問的本能に生きる諸君と、――講壇より講義するにあらずして共に眩をつき合はして究學し能はざることだ。どうか私を中心とするにあらず、むしろ諸君のかゝるやみ難き學問的研究が認められ、私を加はらしめることが許されるなら喜んで投ずる」と云ひ、「大學を去つても私の書齋の窓を開けば大學の時計臺が見える。その時計臺の下では多くのプロフェッサーが研究に従はれてゐる。私もその方々に劣らぬ努力をして諸君のこの好誼に背かぬことを誓ふ」とつけ加えてゐる。河上博士辭職反對學生大會實行委員會は博士の去るのを惜んで「河上博士のあの眞摯なる學者的態度、凡ゆる

障碍を恐れず凡俗なる常識の非難に屈せず、「我等に教へられた學者的態度を我らの教壇より失ふことを恐れて今まで戦つて來た。」

だが「今戦の矛を收める。されど銘記せよ我等が」「得たる確信は」決して「消えないであらう。」と云つた。又「大學を守ることは研究の自由を守ることである。」「研究の自由は我ら學生の手によつて守らるるより外道はない」とも云つた。

博士は大學を去つた。「社會問題研究」中の「嵐の中に立ちて」はその頃のかれを語る。が、かれの究學心は決して學界を去らなかつた。自來、半ば書齋に、半ば實際運動の街頭に、波瀾多き幾年かゞつゞいたのである。三年末京都支部代議員として舊勞農黨大會にのぞみ、相生署に檢束されて、これはどこですか？ などと奇問を發する餘猶も出來て來た。四年秋、北京大學の唯物史觀講座の擔任者として博士を招く風評もあつたが、實現に至らず、かれは挺身して新勞働黨樹立に邁進した。かれは十一月三日頃「早くから私も新黨組織に賛成せる一人で」「此運動の究極の効果から見て、合法運動が正しいと認識される以上、一切の非難を省みず、極力結成を成就させねばならぬ」と云つてゐる。五年二月第二普選に京都第一區から立候補し、山



田圭一郎や、水平運動の本多讓、岡本玲子、津田青楓その他黨員に應援されて戦つたが一敗地にまみれた。

いま、行方の知られず、あの芳子はどうしてゐるか父なる博士に心痛されてゐる芳子さんが、京都府立第一高女五年生として、「選挙権をもてる場合の注意如何？」と云ふ先生の問ひに答案として、(1)参政権を要求す、それが正しきが故に、(2)眞に無産者の代表たる人を見あやまらぬやう「他の議員病者に注意せよ」と書いたのも此頃のことであつた。

かれは落選後「當選は眞の目的でない。落選亦可なり。」「一ヶ月の絶好の機會を通じて七〇%位ひの鬭争はなし得た」と聲言してゐる。細迫兼光、小岩井淨の解消論起ると共に博士もこれに加はり、大山郁夫と袂を別つに至つて、今日に及んだのである。

※ ※

博士關係の起訴理由は、一萬七千圓の黨費提供、七年五月から風間文吉と連絡をとり、十月卅日熱海温泉で彈壓された全國代表者會議の承認議題となるべきコミンテルン新テーゼの翻譯をなし、且つ黨組織行動の重要書類が発見され、黨印鑑二個も発見されたによると、新聞は報導

してゐる。……

かれをめぐつて黨委員長への運動があつたやうに傳へられるが、これは事實どうかと思はれ……或ひは近親者一部の運動であつたのかも知れない。博士自身その意圖ありとも思はず、實際運動の指導者として自からを適任とは考へなかつたらうと想像する。

※ ※

證信は「自宅に自由に起居してさへ、寒さの身にしむこの極寒の天に、餘り強くもないあの體で、刑務所生活の苦しみは想ひやられる。今や氏は過去を憶ひ將來を考へて、萬感交々胸に溢るゝ事であらうと思ふ」と云つてゐる。

老友の思ひやりである。

※ ※

大河上の進退は、同郷の吉田松陰に酷似してゐる。だが若くして死んだ松陰よりは遙かに學者として完成し、又もつと強い心臓の所有者であるかも知れない。一筋に似て、多變的であり、多變的で、又一貫したところのあつたのが人間としてのかれの眞骨頭ではあるまいか？



それはかれの通つた時代の永さに基き、變遷の鋭角的なるが故である。常に青春の若さをもつかれである。あの老齡にして、又あの病體であるのに。(1932.2.10記)

## 吉野作造博士とデモクラシー

### 一、淡々たる死

吉野作造先生は長逝された。昭和八年三月十八日午後九時半。享年五十六であつた。……その日、鎌倉にゆきひよつくり同じ三等車から、のこのこ下車された牧野英一博士と同行して湘南サナトリウムに赴いた。その時既に呼吸も困難で、脈も腕の邊で看る程であつた。白蠟色の相貌で、これはむづかしいと直感した。危篤状態に陥られて後殆んど始めて牧野博士に口を利かれた。ついで赤松君の紹介に眼を轉ぜられて私にも物を云はれた。あの滔々たる達辯が今は呂律のよく廻はらぬハッキリせぬものであつた。「四月號の原稿を書いたか」と云ふのがその時の一言であつた。僕が浪人して以來不斷に心にかけて下さつてゐたが、四月號某誌に先生が受持つてゐられる欄を私に書かされた——それが出來たかと云ふ問ひであつたのだ。なほ、つゞけ



て物言ひたげであつたが、醫者に注意されて私はベッドの側を離れた。

日常通りの気分、それが死に直面した先生の心持ちであつたことがわかる。非常に、力むだことの嫌ひな淡々たる達人の心境が死に至るも少しも動揺してゐないのを知つて、私は深い安堵を感じた。その生前も清澄にして淡泊。その死も亦淡々たるものであつた。かういふ人格に再びめぐり會へるかどうか？ 私はサトリアムの廊下から、小坪の小丘の暮色をながめ乍ら、先生には恥かしい悲痛の感に敗けた。清流のせうらぎのやうなその生その死をたゞみ込んで置かう。それはわれら門弟と先生の交流が秘やかにつくつてくれた安息所だなども考へた。

先生は怪力亂神を語らない君子人であつた。例の浪人會との闘争のときでも静寂なものであつた。先生をよく知る吾々は、あゝいふ事件に關與することに反對だつた。その頃、——云はれたことに、途中もし暴漢があゝの角から現はれたら、こつちの横丁に逃げよう。後から來たら前へさけようと考へると、にこやかに話されてゐた、僕も唯博士の身の恙なからんこと願つてゐた。帝大柔道部の猛者連が護衛を申入れたのを謝絶してゐられた。僕はそれを眞の勇氣だと思つた。そのくせ、僕らの居あはせた瞬間に萬一のことあらば決死的に闘つてやらうと考へてゐた。

へてゐた。

鐵拳禪が嘗つて博士を「新緑の燃え立つやうな活氣はない。眞紅な血の滴るやうな熱烈はない。」と云つた。そして「黄色な健康の人」だと書いた。その通りだ。だが、博士の非力な肉體の中に肥大漢も及ばない終生かはらぬ一貫したものがあつた。これが一世を動かしたのだ。——

博士には文藝に、評論に、文藻豊かなるものがあつた。少年時伏から大成された頃に至る迄松風琴とか、瀋陽學人とか、古川學人のペンネームで藝術的方面に隠れたる才文を示された。しかしその主力が評論に政治學方面にそゞがれたことは云ふ迄もない。殊にその達意の文章は水の低きにつくやうに、よく大衆の中に浸透する向性をもつてゐた。若宮卯之助氏は「一種の教員文だ」と云ひ、「一の警語なく、一の提醒無く、一の省筆なし」と評した。が、博士はそんなものは嫌ひであつた。若宮氏も認めてゐるやうに「吉野博士には個の官臭がない」のであつて、市井の識者として、大聖市に陰れるゆき方で、實に居心地よげに大衆と共に大地を歩んだ。筆者も、博士を完全無缺とは思はない。云ひ度いことも随分多い。又現に先生に向つてそれを屢々口にした。大體俗客が多すぎた。利慾が鼻のさきにぶら下つたやうな商人や、學界の俗



物が、その寛容になれて自由に出入した。連帯の判などボンと蹴つてしまはれればいゝのに、ボンボン押すと云ふ風だつた。われわれは、露骨に、研究室などへ此の類の人種の來るのを嫌悪した。しかし、先生のいつも、うんよしよしと云つた明朗な調子には根負けがした。畑毛に、友人連中で別莊村をつくられたことがあつた。その地區割りに何某、何某の標識が立てられ、その中に吉野作造と云ふのがあつた。僕は先生にまねかれて一々畑毛旅館に泊つたとき、これを見て、何氣なく「先生墓標のやうですな」と云つた。先生は「うん全く墓標だ」と淋しさうな表情をされた。僕は悪いことを云つたと思つた。そして今更のやうに先生の不健康な體を仰いで見た。

先生はあの病軀を提げて、蠟をけづるやうに、生涯をかけてその與へられたる道を辿られた。畑毛などを氣にしたのは青年の潔癖であつたらう。先生には幾百の子弟を慈母の如き愛情で訓育され、活路を與へられた。江湖幾千幾萬に啓蒙の一段階を劃された。僕は先生の死ぬ前に會つて、友人や未知の先生を知るものに對し、なほ多くを傳へねばならぬ義務を感じる。が、それは一卷の冊子を以つてしてもなほ足りないであらう。

私は唯、死を目前にして淡々たる、いつもの通りの吉野作造であつたことを傳へることで満足しよう。それは憤死でも、ハラキリでもなかつた。洋々たる光明と、安心と、先生特有の樂觀につままれた死であつたと傳へておかう。

そしてその追憶の記念の一つとして、デモクラシーと博士とを叙して私の責めをふさぐことにする。

## 二、吉野博士のデモクラシー思想

吉野博士の評論界に於ける活躍は大正四年正月から「歐洲動亂史論」を連載したのに始まると見て差支へない。これは後に同じ題名の著書として刊行されてゐる。

その後博士の論稿も多くは、「巴爾幹の形勢一變を説いて戦局の大勢に及ぶ」とか「支那政界の大觀」(以上「中公」大正五年六月號)とか云ふ東西に互る政治史的觀察に屬するものであつた。支那政治史は博士が袁克定の教育者として支那在留時代から得た經驗的知識をも交へて頗る興味多きもので、著書「支那革命小史」の裡に收められてゐる。講筵に列して滔々として盡き



ざるその歴史觀を味到し得た筆者は、これも政治史家として博士の試みられた重要な一方面であつたことを知つてゐる。歐洲政治史、支那革命史、これに明治文化史の三者は政治史家として博士の足跡の鮮やかなるものであつた。たゞ筆者は今此方面に深く論及すべき場合でないから割愛せざるを得ない。私は博士が論壇に残された偉業の最大なるものとして、デモクラシー論を拉し來ることを適當と考へる。大正五年一月（中公）に博士は「憲政の本義を説いて其の有終の美を濟すの途を論ず」と題し、民本主義の巨彈を放つた。それはわが憲法制度を比較國法學的に論じ來り憲政の精神的根柢が民本主義にありと結論せるものである。博士は民本主義とはデモクラシーの譯語ではあるけれども、民主主義と譯すべきではなく民本主義となすべしと主張する。民主主義とは「國家の主權は法理上人民にあり」と云ふ意味をもつが、民本主義とは、かゝる主權論に關與するものではなく、寧ろ主權の運用に關聯するものであり、従つて、「國家主權活動の基本的目標は政治上（＝政治運用上＝筆者註）人民にあるべし」と云ふ意味であると説明される。

民主主義には、主權が本來人民一般になければならぬとする「絶對的又は哲學的民主主義」

と、「特定の國家に於て其國憲法の解釋上主權の所在は人民にありと論斷する」所の「相對的又は解釋的民主主義」の二者がある。が、民本主義とか、かゝる「法律の理論上主權の何人になりやと云ふことは措いて之を問はず、只其主權を行使するに當つて、主權者は須らく一般民衆の利福並に意嚮を重ずることを方針とす可しといふ主義である」。即ち「民主國體」と君主國體たるに論なく「政權行使及び運用の目標が民衆に存すべきものとするのが民本主義だと云ふのである。

此の立場に立つて、「誤解に出發し」且又「理論上の根柢なき」感情論に基く反對論を駁し、「少數の階級は」時勢の變を知らず大勢の推移に眼を掩つて、徒らに舊時代の遺物たる特權の擁護に熱中するのは、予輩の甚だ遺憾とする所である」と論じられる。又「相當の理論的根據に基いて、或は少くとも相當の理論的根據に基くの外觀を呈して、民本主義を難んずる議論」については、一つは民主主義と同義語に解するもの、他は民本主義は、歴史的に見て民主主義と提携するに至るとする考への二者があるとなし、前者に對しては民本主義の吉野的解釋で答へ、後者に對しては「實際の運動としては」その傾きがないでもないが、必ずしもさうばかり



は限らない。民本主義が「起源に於て革新的思想に出でたからと云つて」「何時でも危機なものと断定するのは誤りである」とする。「多少の弊害の出現に逡巡しては進歩發達の事業は何一つ手が出せない」、「發展は奮闘を愛する」とつけ加へるのである。

而して民本主義の内容は(1)政權運用の目的即ち「政治の目的」が一般民衆の利福にあると云ふこと、並びに(2)政權運用の方針の決定即ち「政策の決定」が一般民衆の意嚮に據ると云ふ二つの支柱から成立つと見るのである。こゝに民意を尊重する代議政治といふ一種の間接政治の生ずる所以があり、この代議政治の擴充が普通選舉制にあると云ふ風に論じて憲政有終の濟美を説かるゝのである。(以上「中公」大正五年一月號參照)

この論文について「國家中心主義と個人主義の對立・衝突・調和」(同、大正五年九月號)を發表し、更に「民本主義の意義を説いて再び憲政有終の美を濟すの途を論ず」(同、大正七年一月號)を世に問うてゐる。この民本主義再説は、過去一年間に世上に行はれたる幾多の批評に對する反駁の意味をもつもので、例へば福田博士が「近頃民本主義民主主義の區別を立つるものがあるが、こは所謂福面人をなつかしむるものであつて、畢竟無意味の區別である」と論じた

りしたのに對する辯明であつた。

民主主義の公式たるリンカーンの「人民の、人民によつて、人民の爲めの政治」の中、主權論を含む「人民の」を除去するのが博士の民本主義である。博士は「亞米利加のやうな民主國では兩者を區別せず「用ゐる」が「獨逸」邊で使はるゝ事になると、「我々は明白に觀念上此兩者の區別の明らかに存在してゐるのを認むるのである。」と云ひ、従つて「西洋に使ひ分けた例がないから日本でも使ひ分けるのがわるい」といふ説明は、學問上の議論として一顧に値しない」と結論する。當時に於て、又今日に於ても博士が理論行使のタクテイクとして、かゝる解釋によりカムフラージしたと解する者が案外多い。しかし筆者は博士がおよそタクテイクなるものから縁の遠い人物であり、況んや理論上の問題についてかゝる意圖を藏せられたものでないことを信じてゐる。と云ふのは當時學生の一人として、手紙で一度、又更に面會して、——それは恐らく親しくお目にかゝつた最初の機會であつたと記憶するが——此問題に就いて數時間微細な點に互つて一問一答した節も、この點は寔にハッキリしてゐた。筆者は博士がルソーに非ずしてモンテスキューたることを感じた所以もこゝにあつた。博士は經驗主義的な歴



史家であつた。従つてその方法論からはデモクラシーの解釋も日本のレアルな歴史事實に即するのが必然的であつた。

博士は此論文に於て、さきに民本主義の二つの内容となせるもの、即ち政治目的と政治運用方法をば、内容ではなくて、二つの觀念であると訂正された。即ち、前者は政權の運用によつて達せんとする目的に關する主義であり、後者は政治の目的を最も有効に達し得べき政權運用の方法に關する主義と解し、前者は政治の「實質的目的に關する主義」、後者は政治の形式的組織に關する主義で、兩者相待つて民本主義を構成すると云ふ風に見る。即ち内容及形式に關する觀念的（イズムの）二側面で、二個の併立的内容と見るべきではないと修正された。

當時大山郁夫教授は前者に當るものをシヴィル・リバーティーとし後者に當るものをポリテイカル・リバーティーと名づけ、浮田和民博士は、これを自由主義並びに民本主義と稱し、美濃部博士は自由主義及び民本主義と呼んだ。吉野博士はこれを民本主義に綜合せらるゝ主義上の二側面と解釋したのである。

博士の民本主義の要旨は以上三篇の諸論文にほゞ盡きてゐる。その行論を詳細に解説するこ

とは他日にゆづるが、その骨組みだけは明瞭になし得たと思ふ。此のスタンド・ポイントから官僚軍閥への批判が始終つゞけられたのである。が、博士の政治學說に見て明らかであるやうに、博士のヘーゲリアンの態度は（博士の「ヘーゲル法律哲學」参照）反對物の併存を常に考へてゐたことも否み難い。「軍國主義」は「平和主義」と對立し、「民本主義」は「官僚主義」と對峙する。そして、軍國主義は官僚主義と伴ひ、平和主義は民本主義と伴ふを常とする。この兩者は相剋的一面を有するが、又國策の二個の表現として併存兩立するものだと論じたのはその一證據である。（「中公」大正七年七月號参照）

この民意尊重の民本主義は、當然、まづ普選論に、又普選運動に發展せざるを得ない。その「普通選舉問題」（「中公」大正八年二月號）を究論せられたのはその詳細なる宣言と見るべきものであつた。博士の普選論はその著「普通選舉論」に説き得て微細を極めてゐるから、此處では觸れない。又今井嘉幸博士その他と普選運動の理論的指導を試みたことも周知のことであるからこれにも言及しない。たゞ、當時普選理論の發祥地とも云ふべき博士を中心に、その指導の下に舊新人會の同伴的研究團體として普通選舉研究會が設けられたことを一言するに



とゞめる。當時私も今某省の重要な地位を占めてをらるゝH君と二人で理論的根據を受持ち、H君の差別觀と自分の平等論とを幼稚な熱情で數週間論じ來り論じ去つたことをなつかしく憶ひ出す。その研究會のプランを博士が樹てられたが、その謄寫版を保存してゐたから記念の意味で左に掲げて見る。

選舉權擴張問題研究要目私案（吉野博士の——筆者註）

第一、選舉權の理論、（イ）天賦人權論、（ロ）第四階級權利伸張論、（ハ）國家經營責任論。第二、選舉權ノ制限、（イ）制限選舉制度ノ沿革、（ロ）選舉權制限思想ノ沿革、（ハ）選舉權制限ヲ是認シ得ベキ場合、（ニ）各國現行法上ニ於ル制限ノ種類、（ホ）婦人參政權。第三、選舉權擴張ノ實際的利害、（イ）擴張反對論及其批評、（ロ）選舉權擴張ノ道德的效果、（ハ）選舉權擴張の弊害矯正法トシテノ復數投票法。第四、選舉權擴張ノ方法、（イ）之ニ關スル各種ノ意見、（ロ）漸進説ト急進説トノ比較。第五、選舉權擴張ニ聯關スル各種ノ問題、（イ）復數投票法、（ロ）比例代表法、（ハ）記名無記名問題、（ニ）區制問題、（ホ）選舉取締問題、第六、各國選舉權の比較研究。第七、各國選舉權擴張ノ沿革、（イ）佛國ニ於ル普通選舉制ノ創設、（ロ）英國ニ於ル選舉權擴張ノ沿革、（ハ）澳

國ニ於ル普通選舉制ノ確立、（ニ）伊太利最近ノ選舉法改正、（ホ）和蘭及匈牙利ノ選舉法。第八、選舉制度否認論。第九、我國現行選舉法ノ批評（イ）舊選舉法の規定（ロ）現行選舉法の規定、（ハ）議會ニ於ル改正論ノ沿革、第十、我國ニ於ル選舉權擴張論ノ沿革、根據及其程度、以上。大正七年十二月二日

博士のデモクラシー理論はほゞ上記した所によつて知り得ると思ふ。その實踐は浪人會との確執の如きエピソードもあつたがその最も重要なものは普選理論及び普選運動への貢獻であつた。

吉野博士のデモクラシー思想は然らばいかなる政治學的背景を有してゐたか？

博士のデモクラシーを理解するがためには必ずその政治學理論に溯らねばならない。私は比較的の人に知られてゐない博士の政治理論を顧みなければならぬと思ふ。その一端は「政治學の革新」（中公）大正九年一月）にも現はれてゐる。

それはいまだいづれの著書にも織り込まれてをらない。それは博士の隠れたるアルバイトの



尤なるものゝ一つであつた。

こゝにその一部をでも發表することは博士の本旨に叛くことを恐れるし、紙幅もないから、他日の機會にゆづる。これは小野塚博士外遊中その代りに、政治學の講義をなされたるものゝノートとして遺されてゐる。

### 三、博士の自由主義の進歩性

吉野博士の民本主義は、普選運動を契機とした大正七、八、九年以後の民衆運動の指導的地位を占めた。それは、一面時代の要求ではあつたが、又他面その時代の要求によつて大いなる役割りをつとめさせられた博士の存在によつて促進された。殊に福澤諭吉、新渡戸稻造の先達に比敵する流暢平明な、牧野英一博士の所謂白湯さかの如き名文によつて天馬空をゆくやうな浸透性を發揮したことによつて、加速度的に一般化した。併年、わが國歐洲戦争後のデモクラシー運動はプロレタリア運動と直接に踵を接したものであり、普選運動は同時に労働運動、社會運動に展開して行つた。博士の民本主義は此場合新興イデオロギーに對して決して追隨阿諛の

態度を示さなかつた。従つて博士は「現今我々の主張する民本主義は極端の急進派と保守的の反動派との双方から攻撃される」と嘆ずる。博士は當時の思想傾向をば民本主義、社會主義、過激主義三者に色分けして、「民本主義は必ず社會主義者であるとは限らないが、然し社會主義者であつても妨げない。けれども斷じて過激主義者たることを得ざるものである」(「中公」大正八年六月號)と論ずる。

だから博士は唯物史觀に對して、餘り好意を示さない。殊に機械的な唯物史觀の解釋——それは初歩の時代に日本で行はれた——に對しては、制度其物が絶體價値を有するから、「改造その事のために改造し」「改造の後によりよき文化の花が咲くのは、我々の希望すると否とに拘らない」。従つて、「將來社會に對する豫想はあつても」「未來の希望に對する憧憬はない」と非難する。(「中公」大正八年十二月號)又労働運動に於ける知識階級問題に言及して「プロレタリアートの專制的傾向に對する知識階級の感想」(「中公」大正十年九月號)を率直に述べてゐる。かやうに、博士のデモクラシー思想は、一貫したものであつただけ、その限界性も亦はつきりしてゐた。だが、ファッショ的段階の新自由主義思想が、多く、反左翼的な點に力點を置い



たのと違ふ點があつた。それは上向期の自由主義思想の良心的分子がさうであるやうに、反動的封建的傾向への對抗の方に主なる重點を置いた點である。

博士歿後のある機會に石濱知行と嘉治隆一兩君が、たま／＼赤松克磨君に會つた。そのとき同君が、吉野さんもするだけのことをしたから死なれても悔みはあるまいと云つたのに對し、石濱がさうでもあるまい、近頃なかなか存在の意味が再生して來たぢやないかと云ふやうなことを答へたさうだが、それは私が右に述べた意味に當ると思ふ。

僕が知人Kの就職の件で先生に依頼狀を出した——實際此種の雜務で先生は一生惱まされたに違ひない——のに對し、意外にも病院から、退院したら大いに談じ度いと追伸されてあつたのも其の意味だと思ひ當る。

その病院と云ふのが、太平町の實費病院で貧民相手のものであつた。日頃先生のすゝめで友人のHや僕も萬一のとき入ることにきめてゐる所である。さう云ふ人々の恐ろしく拂ひの奇麗なことを先生は感嘆せられてゐた。

月額一萬圓位ひの實收中、未收は一〇%にも足らぬ少額でそれもいつかは返しに來るさう

だ。

博士はかう云ふ徳義ある病める大衆の集合所のやうな場所を安息所とも治療所ともされてゐた。恐らく、死所もこゝに求められ、氣やすく、平穩な市民として生を終り度いと念願せられたに相違なかつたが……、平凡主義に徹底するとそこに却つて非凡な力が生れる。先生のデモクラシーもさうしたものであつたと僕は信じてゐる。(1933.4.9稿)



## 河上肇と吉野作造の對照觀

※ ※

河上肇氏は社會問題研究百十幾冊の著述者として、またマルキシズム理論研究家として、日本の社會運動に没すべからざる功績をとめてられる。此の點は何人も否定し得ないところである。

乍併、その態度にはインテリの獨善主義を多量に盛つてゐて、小異をすてゝ大同につく度量がない。

最近河上氏の批評は、勞農黨解消運動以來の不評判をとりもどすつもりか、可成り八當りの氣味である。筆者も拙論に對する批評に對して答へたことがあるが、筆者の見解によれば、此の誤謬の最大なる點は、右に述べたセクト的な、獨善的な態度にあると思ふ。

河上氏は拙論が研究、解説を目的とし、それも目下の狭められたる出版合法性の窮屈きはまる限界に於てなされてゐる事實を知りながら、實踐的でない點を指摘せられてゐる。

そして天體的現象の如くに評されてゐる。が、筆者は、清算につぐに清算を以てする氏の地代論を研究上それほど尊重すべきものと思はない。そればかりではなく、博士は農業恐慌のいまかゝる地代論研究が實踐的意味があると自己辯護されてゐるのを滑稽にさへ考へる。

なぜならば、博士の地代論を、私は地上のものとも思へないからである。

それは地上のものでなく、机上のものだ。しかしさうしたものだとの自覺を河上氏はもつてゐない。實踐的に何等か有意義のものゝ如く考へてゐられる。

河上氏は『ファツシヨの危機が非常に切迫してゐる』と力説してゐるが、それならばなぜ今頃机上地代論をいかにもわかりにくく繰りひろげることをやめて正面から反ファツシヨ闘争なり論争なりをやらないのであらうか？

筆者は河上氏がファツシヨ論を試みたとしても、決して、たづさはりもしない戰略戰術論を一般市場雜誌上に於て展開せられないことを非難しないであらう。



惟ふに現在のインテリ情熱に二つある。それは實踐を眞に追及する情熱と實踐を趣味として玩弄する情熱である。戀愛を戀愛するもの……かゝる態度がインテリ、學者の間に少くない。河上氏の態度にも多分に此の傾向を認めざるを得ないと思ふ。

※

※

河上肇氏は山口縣岩國の出、その思想的行程に於ては幾多の難路を経てゐる。伊藤證信氏の無我愛運動の一人としての氏、『外遊中祖國を顧みて』文名一世に高き頃の氏、自來社會民主主義論争に福田徳三氏と争ひし彼、マルクス紹介に成功せる篤學者河上氏、間違ひだらけな福本氏の辨證法に苦もなく追従し奇想天外な辨證法を力説せられたる河上氏、實際運動に入つては勞農、大衆合同に際し解消論を唱へて書齋に歸られし河上氏——その行路は過誤なしとせぬも苦闘の一線をすすんでゐる。

終始机に向ふ以外、道を發見し得ぬ筆者は少くとも氏の努力の跡に畏敬の念をもつてゐる。が、一點疑問なき能はざるは、常に現状に對する冷靜なる省慮よりも、情熱的行動の先きばかりさるゝことである。かれをして逐進せしむるものも情熱、かれをして曲折せしむるものも情

熱。かれをして實踐家らしくふるまはしむるものも情熱。河上肇氏は夫れ情熱の人である。

唯、この情熱が純乎たる至情に終始することは私の知るところである。が、一面またこれが永續性を缺き、狷介孤高に墮したことも否めない。そしてこの種のインテリ社會運動指導者がわが國社會運動を非大衆的ならしめ、分裂主義的ならしめた主觀的條件の一つをなすことも亦否めない。

かゝる點を考へると、筆者は常に吉野作造氏が大山郁夫氏と共に、デモクラシー運動をあのやうな大衆的空氣たらしめた功績と力量とに想到せざるを得ない。

吉野氏は河上氏ほど理論的に尖鋭でないかも知れない。また河上氏ほどその理論が細微でないかも知れない。乍併、その一貫性と抱擁性ははるかに大きく、また遙かに效果的であつた。河上氏も信念型の學者、吉野氏も信念型の學者である。しかし河上氏の信念は信念を熱愛する信念であつて、その熱愛の對象たる信念は常に其の内容を異にし更新される。此の點に就いては吉野氏はキリスト教的人道主義を核心とする固定的信念の人である。河上氏の方が信念が不斷に向上するとは云へるかも知れないが、また吉野氏の方が確乎として信賴し得るとも云へ



る。

河上氏の方が強靱に見えて流動性があり、吉野氏は柔軟に見えて固定性が強い。故に吉野氏は世に入れられず静寂の閑地に自適する人で河上氏は常に青年の意氣で世と共に推移するのである。

※

※

吉野氏は宮城縣古河の人、河上氏と同様に、地方の名望家の出である。吉野氏は『家が綿屋——はじめて紡績機械を利用して同地方に安價なる紡績をひろめた——だもんだから小さい時から頭の毛の中に綿の粉が一杯つまつてね！ それでどうも體が弱く育つたらしいんだ』と、何んのつくり飾りのない温容で人に接する。河上氏は、筆者面識はないが、袴をはいて四角四面で眞面目に話されると聞いてゐる。

ともかく、型はちがふが、共に信念型の學者である。殉教者的なところは河上氏に多く、人間的な點は吉野氏に多い。そして吉野氏は民主主義完成期の思想的指導者、河上氏は社會問題華やかなりし頃の研究者、共に實踐家と云ふよりは啓蒙的、才幹と功績が大きい。

### 『時の人』 赤松克麿論

※

※

赤松君は國民社會主義を高調して社民を兩斷せんとしてゐる、下中彌三郎氏は總聯合關西派を動かして、全勞農大衆黨を割取せんとしてゐる。

が、共に社會フツアショ運動の一翼で、近き將來この二派は合同又は提携すべき趨勢にある。赤松君の理論は二つの支柱から成る。一つは國際主義の否定、他の一つは資本主義の否定である。しかし、インターナシヨナリズムの否定は國民主義を意味し、帝國主義への合流を意味する。とすれば、それは當然資本主義の肯定擁護を意味しなければならぬ。反之、あくまで資本主義を打倒せんとすればその支持とするところの帝國主義に反する結果となり、國際主義を否定し得ないこととなる。



しかし、赤松君は國際主義即ち社會主義のインターナショナルを否定するものではない。社會主義のインターナショナルの空想性のみを否定するのだといふ。そして、社會主義のインターナショナルの實現性を把握するのだと主張する。と云ふ意味は空想的な國際社會主義を否定し、現實的な國際社會主義を支持するのである。そして現實的な國際社會主義とは、國民内に社會主義を先づ樹立せんとするにある。

しかし、かやうに赤松君の空想的國際主義と現實的國際主義とを對比、差別することは、現實的でなく、空想的である。眞に辨證法的に具象的に考へればかゝる對立は起りやうがない。この對立を考へるのは、國際主義を單に空想としか考へぬ赤松君の考へ方に基づく、國際主義を空想とし、國民主義のみを現實的と考へるその考へ方は、當然、方法論上の破綻を示してゐる。

だから國際主義を否定せずと云ふも事實上否定してゐる。それで、赤松君は極力違ふと云ふ

が、舊來の反動的國粹主義と餘りちがひのないものとなる。

國粹國家主義が資本主義を打倒すると云ふことは、およそ困難なことだ。

赤松君は今日、華々しく右のやうな理論で、無産政黨を弊履の如く捨て、既成政黨を烏合の衆と見、無産運動が空想にねむり、既成政黨が噴火山上に舞踊するものと思惟し、新らしい希望をもつてゐる。

日本に於て國際主義が微々たる勢力をしか有しない事實は筆者もありのまゝに認識する。それは、富源に乏しい島國のもつ一つの特性に基く。また一つは徳川幕府の長き鎖國主義が國民主義擡頭を後らせ帝國主義的角逐に大きなハンディキャップを與へた最近世日本の歴史性に基く。

しかしながら、かゝる特性は墨守すべき國粹ではなく、打開すべき弱點である。

經濟制度が國內に於て統制經濟ならざるべからざる所以は、社會大衆の生存に根本理由を有



する。わが國內に於て統制經濟を妨ぐる根本理由は資源の缺乏よりも寧ろ、その利潤本位の無政府的、資本主義經濟に存する。

また、國際的にも人民大衆の生存は必然的に國際統制經濟を要請してやまない。この妨害たるものは、また利潤本位の、無政府的の、國際資本主義經濟に存する。

モルガン商會の個人經濟は、ドイツ一國の經濟より大きい。且つ支配的だ。しかもドイツ社會經濟ほどの生産性をもたぬ。大資本主義國の大富豪の經濟力（制度組織上の）は、弱少國の又は第二等國の一國經濟より優位にある。一縣下の百萬、二百萬の經濟は、支配的資本家の私的經濟に及ばない。

赤松君はもとより、かゝる經濟事情の國際的、國內的形相を知つてゐる。だから國際主義を否定し得ず、また資本主義を肯定し得ない。こゝに赤松君の眞面目な苦悶があり、またその魅力がある。

※

※

赤松君は山口縣の人である。熱血漢赤松圓心の後と聞く。が、筆者をして忌憚なく云はしむれば、その熱情の餘りに多角的に、急變的なことを惜む。赤松君は宮崎龍介、石渡春雄の二君と共に帝大新人會創設者の一人である。筆者はその一年の後輩として赤松君等の鼓舞のもとに社會問題の研究に向つたものゝ一人である。

※

※

しかし赤松君は、はじめ猛烈なサンデイカリストであつた。政治を否定して經濟的直接行動を力説した。筆者は政治の否定を愚論と信じ、政治行動の必要と永續性を考へてゐた。しかるに赤松君は卒然としてボルシェヴィストとなりその過激ぶりは書齋派たる筆者をして吃驚せしめた。赤松君はまた一轉して現實主義の宣言をやり政治行動主義を熱演した。筆者は、演者の何人なるやを疑つた。更に社會民主主義を以つて左翼と抗争し今日また急轉して國民主義に歸した。

過日ある座談會で、筆者は數年來めづらしく赤松君に邂逅したとき、右の點を指摘して『餘りセツカチではないか、變りすぎる』と批評した。



赤松君は例の人なつこい明朗な微笑で『大正八九年來勃興した日本の社會運動は急湍の如き外國の影響をうけた。僕もそのシユツルム・ウント・ドラングの裡にもまれたのだ。そのもまれた結果があれだ』と答へた。

『大杉榮氏などロシア新政府を無政府主義だと思つて上海まで連絡をとりに出かけたこともある。それほど何が何かわからぬ混沌であつた』とも答へた。

※ ※

筆者も回舊の情に耐へなかつた。が『君の企てはレボルチオン・フォン・オーベンまたは逆の改革手段のやうに思へるが？』と率直に評論家としての短評を試みた。赤松君は例の明るい調子で『さうであつてはならないと思ふ。その危険があつたらいつでも新聞雜誌上でなりとも叱正鞭撻して呉れ給へ』と答へた。そして私達は別れた。

かれ赤松は朗らかな快活な男だ。

### 堺 利 彦 翁

長谷川如是閑老が『批判』の二月號に堺利彦を論じてかう云つてゐる。

『堺氏は疊の上で死んだ。然し元老として死ぬべき人間が、一兵卒と同じやうに死んだのは、遺憾のない死に方であつた』と……

かれの社會的地位は東京市會議員に過ぎなかつたが、過去の經歷とその頑強な生涯の努力は隠然たる巨大の存在たらしめた。アメリカ社會運動の長老ユーヂェーン・ヴァイトーア・デブスに似て、終生社會運動の巨柱であつた。デブスは労働者出身で鐵道労働者として小學校を出ただけで身を立てた。堺利彦は士族出身の戰鬪的インテリゲンチヤであつた。ハードマンが社會科學百科全書に書いてゐる通り、デブスは、機關車火夫組合の一員として、社會運動に投じ、社會民主黨を組織してその牛耳を握つた。前後數回入獄してゐる。殊に一九一八年米國參戰に反



對して十年の刑に處せられ一九二二年漸く赦されて出獄した。一九〇〇年から四年、八年、十二年、二十年と大統領候補に立ち入獄中の立候補のときでも百萬票を得てゐる。死んだのは二十六年であつた。

堺利彦の闘争生活はあるひは、デブス以上であつたかも知れない。明治三十七年平民新聞で『嗚呼増税』の文章で二ヶ月、四十一年赤旗事件で二ケ年、大正十二年日本共産黨事件で入獄と云ふ風に連続してゐる。大正六年總選舉のときは東京から立候補して廿五票を得た。デブスと比較して格段の差があるが、これはかれの力量の問題ではなく、日本の社會事情の問題である。

明治三年豊前豊津に生れた。一高の前身第一高等中學に入つたが退學し小學教員をしたり、福岡日日新聞の記者をしたりしてゐた。かれが萬朝報時代非戰論を唱へたのは人の知る所だ。平民新聞の創設や、日本社會黨（三十九年）の組織はかれの一大事業であつた。晩年は無産大衆黨の中心となり後勞農大衆黨の顧問として第一線から退いてゐた。中風で斃れて永く病臥したが、終に昭和八年正月長逝した。

號を枯川と云ひ、貝塚澁六のペンネームもあり、幸徳事件後實文社によつてユーモア文學に縦横の才を振るつた。『へちまの花』がその雜誌であつた。今日の反動期にプロ文壇にユーモア文學の論議が少しく起りかけたのは、同じ思ひの枯川の死灰へ贈る淋しき微笑であらう。

かれの著書、翻譯、小説等は數十冊を數へる。多忙な闘争生活の裡に、よく、あれだけの仕事が出来たものだと驚嘆せざるを得ない。文筆家として枯川は第一流であつたが、政治的手腕もあつたらしい。この點が直情徑行で詩人肌の大杉榮とウマが合はなかつたらしく、アナ・ボルの闘争時代は勿論、その前でも宴席で大杉が盃を投げつけたりしたこともあつたさうだ。枯川老が、がまん役にまはつてゐたのはかれの忍耐力の然らしめたところか。

今、田原、落合ら翁の同志によつて堺利彦農民學校が十分の八出來上つてゐる。十分の二は資金不足のため未完成なためだ。この農民學校は、翁の闘争記録や著述に劣らぬ位の意味がある。況や有力なる後繼者がこの孤壘を守るに於てをやである。



佐野學に就いての感想

佐野、鍋山兩氏の「共同被告に告ぐる書」と云ふのをまだ読んでゐない。たゞ新聞記事だけしか見てゐないから、果して基本的なイデオロギーの轉向なのか、戦略戦術の變化にとゞまるのか定かでない。

その全貌を知らしむるに足る著述が發表されるにしてもその實踐的意味等を論ずる資格は僕にはないが。

科學や思想や評論に志すものに問題になるのは、主として物への理解の淺さ深さにあると考へる。これはなにも科學のための科學、思想のための思想、評論のための評論を主張する意味

ではない。悠久な歴史性への眞摯な關心をこそ目ざすものと云ひ得る。従つて、現實的には一種のデイレッツタンテイズムとは評し得ても、歴史性からの遊離とは云へない。あらゆるものへの深い關心が却つてそこに生れると考へる。

これが現實に事件や、運動を解決したり、指導して行かうとする者との根本的な態度の相違である。

實踐とは馬車馬のやうに、ひたぶるに駈け出すことではない。指導とは、やたらに、理論をデッチ上げて大衆を右往左往せしめることでもない。

一體、實踐としても云へば、個々の個人が、口も八丁、手も八丁働かせねば承知しない人が多い。この注文を出すのは、却つて觀客氣分の、又ファン氣分の人達なのであつて、無責任な彌次馬大衆とも云ふべきである。かう云ふグループ・マインドにリードされつゝ、リードし返すのが政治家、實際運動家の才能であるかも知れないが、かう云ふ場面を見てみると狂信家サヴォナローラを、レオナルド・ダ・ヴキンチが觀察したやうな感想が湧いてくる。却つて觀念的な實



踐と云つた感じがする。

※

※

大正八九年頃、學生時代に一度佐野氏の顔を見たことがある。當時滿鐵調査所の所員で、おとなしい學究膚の人のやうに感じた。われわれ學生の間に評判のよかつた松岡教授の社會政策の講義が、佐野氏の材料によるとのはさがあつたので、教授以上の學者とはこの人かと思ひながら、この人を見た。モーニングを着込んで神經質な感じであつた。野人型の麻生棚橋氏らに比べておおよそ運動に縁の遠い人かと思つてゐた。

その後の佐野氏の行動、足跡は新聞に出た以上には知らないが、佐野氏の同僚友人連中の懸念の言葉は屢々聞いてゐた。その性格的弱さとその弱さが變に強くなる不安についても……感情移入型のメンタリティーに對しては、僕は、英雄的崇拜心も起らぬし、褒貶の無責任さを敢てするのはなほきらひだ。

※

※

やたらに指導することの好きなヒーローも、指導されることの好きな大衆も餘り尊重しない。

ローリングの少ない動搖の少ない國家社會の根強いジリジリと歩んでゆく進歩性が一番たのもしく感ずる。

殊に、宗教の一部によく見るやうな、何年目にどうか、何年何月何日にキリストが再臨するとか云ふやうな盲目的な指導は無益であるばかりか有害でさへあると考へる。

※

※

もつと具體的な、實證的な研究がのぞましい。奇蹟が天の一角から俄然湧いてくるやうな氣分や、何かと云ふと、社會全體が浮腰になつてウロウロするやうな態度は、早慶戦やブラドネル服部の一戦の場合ならともかく、實際生活に直接關係ある場合つゝしむべきだ。知識階級の二千人や三千人が一生打込んで理解しつくし得るかどうかわからぬ大きな問題が、自然科學にも社會科學にも無盡藏にあるのだ。民族の問題でも、階級の問題でも同じだと僕は思ふ。こんな時代にデットとして居れるかと反問する人が多いであらう。誰れに對してもデットして居れと僕は云つてゐるのではない。何故なら、さう云ふことは一種の指導なんだから。唯デットとしてをれないからこそ、僕らは力のつゞく限り勉強せねばならぬと思つてゐると云ふの



だ。

政治家、實踐家は一舉手一投足、體を張つて立ち上つてゐる人々である。今までの行動が誤謬であつた場合致命的なのはそのためである。西郷型や大久保型は質はちがつても一流だと思ひ、高橋（是）型や佐野型が二流であると思ふのもそのためである。批評敗けや、喝采敗けのするのは三流以下である。

※

※

價值論がだめになつたのは、價值が論理的極限概念となつてしまつたからで、辨證法の破端する場合は、實踐の神祕化されるときだと思ふ。

※

※

感想でも述べよとある。ありのまゝの所感を述べた。感想はおよそ主觀的である。(33.6.12)

### 直木三十五論

…彼は何處へ行くべきか…

一

筆者は大衆文藝が好きだ。その第一人者として、私は直木三十五氏を評價してゐる。人としての直木氏を知らないが作品を通じてある程度わかる。又ゴシップの斷片をつなぎ合せて筆者の直木氏なる表象はある程度、構成された概念にまで、高められてゐる。それで、直木三十五論も一通り筋が出来てゐる。が、今はその場合でもなく、それを十分にやる準備はないが、簡単に試みて見よう。

※

※

彼の作品。私は主なるものは読んでゐるつもりだ。その近作でも楠正成だとか、相馬大佐を



描いたものとか、大鹽平八郎のある見方を展開したものとか、近藤勇が鐵砲に敗ける話とか、とりどりに面白いと思つた。ペンネームで書いてゐる文藝春秋誌上の戦争小説はつまらなかつたが、純科學小説的の戦争物の傑作をものする實力はあると私は見てゐる。

一番面白いと思ふのは、矢張り南國太平記である。あれは近頃大衆文藝中の最高峰である。大佛次郎氏の赤穂浪士以後の傑作に相違ない。

※

※

たゞ、南國太平記も、始めの中つゞけて書き、まとめて新聞社に渡したかと思はれ彫琢された文章と構想とをもつてゐた。殊にあの比叡山上に呪術者牧仲太郎を切るべく仙波父子が切り込んで行くところの叙述とその迫力は最も優れてゐる。あの『死闘』の一段を見てから、私の直木観はずつとレベルを上げた。あれだけの決意と迫力とは作物とは言へ、なまなかの氣力からは生れて來ない。片々たる文筆才子と思つてゐた直木氏の全容がぐつと、力強い焦點をもつて迫つて來たのはそれから以後である。あの場面は、中里介山の『大菩薩峠』中の一節、あさじが原に於ける机龍之介と佛頂寺彌助等が『十方碧らく』の間に相見えるあの叙述の肅殺的嚴

肅味以上の力をもつてゐる。

※

※

併しながら、その後あの場面とあの叙述ほどの迫力を感じない。また、上掲したその他の小作物には、才氣に充つるといへども、從來の片々たる直木ものの臭味がつきまとつてゐるのを見出す。

例をあげて見ると、大鹽平八郎を徳川幕府系統の流布本に古實を採つて皮肉な側面觀を試みてゐる如きがそれだ。それで、斷行的な大鹽に於ける本質にまともにぶつかることをしないですませる。相馬大作にしても、ある一角からの心理觀をねらつてゐるにとゞまる。嘗て芥川龍之介がある將軍について、モノマニアとしてのサイコロジを側面的皮肉のみから取扱つた。あの手法に見出したところの才人特有の通弊が現はれてゐる。

※

※

楠正成と、近藤勇は簡明でよく本質を掴んでゐたやうに記憶する。……  
ともかく、かゝる主人公の行藏や性格に對する好惡、賛否は別として、まともにこれをうけ



とり、それを周囲の事情に關聯せしめて動かして行く、——さうした態度が本格的であると思ふし『死闘』を見せてくれた直木氏にはやれることだと考へる。才人を捨てよ！ と忠告したいのはそのためである。

※

※

それともう一つは、かゝる態度を時代の進歩性に於て、言葉を換れば被壓大衆の解放過程に於て擱むやうになれば、大衆文藝も一大躍進をとげらると思ふ。

しかしこの點に就いては直木氏はまだなかなかだ。それは『科學』に就いてのかれの考へ方が一つの例になる。と云ふのは『科學』を社會運動と對蹠的な位置に於て考へるその癖である。科學的發明による生活の豊富を計らないで、乏しき現在量の徒らなる分配のみを、社會運動が思念してゐると見、その前提に立つて、『科學』が社會運動の代りに社會生活を救済し得る力をもつと結論する。簡単に云へば、テクノクラシー流に科學を社會運動と背反的に考へてゐる。

※

※

私は、直木氏の更に第二段の本格的發展のためにこの點を第二の忠告として書きとめて置き度い。

即ち、社會運動は包括的な大いなる科學なのだ。科學を行動的のもの、社會的行動から切離した純粹に超越的のものゝやうに考へるのは間違つてゐると。

氏のかやうな考へは反動的であるとさへ云へる。

何故か？ それは説明する途もないことだが、どんなすぐれた發明がなされても、その發明權の所有は經濟的支配關係によつて左右される。經濟的支配者はあらゆる發明を獨占し、その利用を専行する獨占である以上は、それが大衆生活の利便を第一義とすることは考へられない。寧ろ資本利潤追求上の有力なる要具とこそなれである。

電車の發明。それは結構である。電氣の發明。勿論いゝ。ガスの利用。甚だ便利である。

しかし大衆のなし得るところは十四錢の往復、十燭の電球、とろとろのガス火とである。そのことによつて、生活が文化にむいたことはあくまで確實だ。利便を増大したことは明瞭だ。しかし、社會生活は少しも向上せせず貧困は却て増大してゆく以上は、この文化と利便とを、利



便と感じ、文化を讚美する地位に置かれてはゐない。

この缺陷は發明そのものからは發生しない。その發明の所有と支配とを制約する社會關係がこの缺陷を増大するのである。

二

だから『科學』自體と云ふか、科學アン・ウント・フユア・ジツヒをもつともらしく説くのは、反進歩的になり、反動的になるわけである。

社會運動は、また、反科學的ではない。否寧ろ、総合的な科學、宇宙及び社會發展の具現である。

※ ※

『科學』と發明とは、かやうにして、象牙の塔から引き降され、大衆的生活の中に攝取されてはじめて、新しき生命と發展とを獲得し得るのである。

科學と發明とがどんなにすゝんでも、それが利潤追求の目的を第一義とされる以上、社會的缺陷は増大するばかりである。かくては發明も、利潤を通じての蓄積機會の一つとなり、植民

地支配の用具となる。

※ ※

生活にそむく科學、社會を困厄せしめる科學、——直木氏が、そんなものを考へてゐるとは云はない。生活のための科學を考へるからこそ、氏の科學觀があるのだ。が、そこを尙ほ一歩進んで考へて行くと、科學を社會生活の裡に攝取すると云ふか、科學の獲得の必要と云ふか、かやうなコペルニクスの轉回が氏に於て必要になるのである。

※ ※

『科學』は直木氏の思想型體中重要な一つの點である。

殊に科學力説への志向の強いかれであつて見れば、この科學に就いてのイデオロギーは非常に重大であらねばならぬ。

※ ※

およそ大衆文藝は今でこそ鬻物全盛だが、これに限るべき筈ではない。いはゆる社會小説の類もこれに屬すべきものである。プロレタリア小説も未啓蒙一般大衆を吸引する方面にその羽



翼を更にのばすことが急務である。  
嘗て雑誌『大衆文藝』が平山蘆江氏を中心として兩三年つづいた。あの『大衆文藝』は月  
月通讀して随分優れてゐると思つた。長谷川伸氏の短篇物などの光つたものが記憶に残つて  
ゐる。

が、何か大きなものが缺けてゐる。嘗て浪六の三日月次郎吉や、堺利彦匿名の社會小説のも  
つた意味が、あれに缺けてゐた。今見れば齒のうくやうなものだが、白樺派を中心とする理想  
主義文學が行づまつた後、一寸の間はやつた賀川豊彦氏の「死線を越えて」とか、沖野岩三郎  
氏の社會小説めくものなどのもつた意味を缺いてゐる。

近頃雑誌『大衆文藝』を私は、少しも見てはゐないが、矢張りこの根本的缺點を充塞しては  
ゐないと推察してゐる。

※ ※

この缺陷を直木氏も、もつてゐる、その上その科學觀は、反動的とさへ考へられる。

大佛氏の赤穂浪士などは、なだらかな叙述と時代を映す筆まはしにすぐれてゐるが、少しく

インテリむきで、ほんとに大衆むきであるかどうか疑問がある。此の點になると直木氏は、讀  
まれるむきが少し廣汎である。それだけに大衆小説としての外延も廣いわけであり、また同時  
に、その缺陷も目立つて來る。

※ ※

直木氏は最近の朝日紙上の隨筆『自分の事、人の事』の中で、自分の今書いてゐるものは食  
ふためだ。あの位のものを目に三十枚位書けないでは、作家たる資格なしと言つてゐる。この  
油の乗り切つた元氣は見てゐて氣持がよい。

しかし、その一生に一度やつて見ると云ふ『一日一枚ぐらゐしか書けぬ』純文藝ものより  
も、私はより多き期待を大衆ものゝ方にかけてゐる。

さう云ふ純文藝ものは、あの行き方では芥川と同一軌にして、かれを凌ぎ得ぬのではないか  
と思ふからである。

※ ※

私は、この大衆文藝の第一人者に就いて、本質的な二點を考へてゐる。その一つはまともな



ること。その二は進歩的なること。この注文を才人直木が馬耳東風と聞き流すか、『死闘』の直木が直面して考へるか、私のほんとの直木三十五論はそれが明かになつた後にはじめて完成するであらう。

※

※

私は、直木氏と一面識もない。観察の誤謬があるかも知れぬ。もしあれば、其の點他日補足することとして讀者に恕して頂き度い。

## 青山熊治の人物

……大 観 と 熊 治……

※

※

日本畫壇で横山大観を舉げれば、洋畫壇では青山熊治を推すべしと云ふのが僕の意見だ。大観の堂々たる畫風、大自然にがっちりぶつかつてゆく態度は何んと云つても大きい。北齋以來の傑物であると思ふ。

汽車が甲州を走つて信濃境に近づき、夕されば、車窓遙かに富嶽の暮景を見たとき、僕は、あゝこれだなと思つた。北齋が富士山の百態を寫したあの裏富士の描寫をそのまま思ひ出したのだ。刻みの深い山々だ。藍とも紫とも、紺ともつかぬあの色調。黒くもあり、明るくもある。豪壯でもあり、又麗美でもある。普遍性のあり、誰れにでもわかるあの山容のもつ藝術的



の秀拔さ。卑俗な繪描きのうつした富士山は、五錢風呂で足の裏を輕石でこし／＼やりながらでも、よくお目にかゝるやつだが、フンと思ふだけの印象しか残らぬ。月と陽と、山と海、そして富士山、軍艦、兵隊さん。これは繪心のついた子供が一番さきに對象とする畫題だ。がこの童心の引かるゝことはその畫題の限りなく廣い普遍性を意味するもので、この普遍性が刻苦と探究の藝術通路の後に、深められ高められた極所として、偉大な藝術家に再歸してくる。それは一つの Grenzbegriff のやうなものだ。喰ふことの喜びが、社會的關心と究理の幾段階の後、最極限の眞理性をもつて再生産されるやうなものだらう。などと、一瞬に考へながら、暮色につゝまれ、窓外に走り去つたこの山のぐりむぶすを双腕に抱き度いやうな景色三昧にふけた。

裏富士を見た刹那に、北齋の畫を見た。と云ふよりも、北齋の繪が汽車の窓わくにはめられて大自然のサロンに浮んだやうな感じであつた。その北齋の繪に、大觀の富嶽も似てゐる。鋭さに於て刻みに於て、北齋の線の方がまさるかと思ひ、大觀の方を大づかみすぎるやうにふと考へ乍らも、念頭に比較の對照として浮んだことに、矢張り大觀のえらさを見る。そんな感じ

であつた。

大觀が苦難時代に注文で書いた駄作を、俗物どもが、その財産價値を保證するために箱書きして呉れと頼みに来る。ところが大觀は空うそぶいて、そんな繪は俺は知らんねと突返すと云ふ。これは明らかに常識にはそむくことだ。かたりだ悪人だと俗物どもは云ひふらす。が大觀のこの態度は正しいと思ふ。藝術家が常識人としてもつ苦汁をのみ込み乍らボンとつっぱねる氣魂を尊重し度いのだ。

青山熊治は大觀のこの氣持ちをほめてゐるたさうだ。

かれは注文で繪をかゝなかつた。十年に餘るかれの物狂はしい歐洲放浪時代でもさうであつた。否その時代には繪もかけなかつたのであらう。かれの同情者たる長鳥一平の知人の金持ちが、偶然長鳥の留守に來訪した彼に會つたときも、五年間ほど繪もかきませんとかれは答へてゐる。普通ならパトロンになりさうな金持ちの所でかけぬとはなか／＼云へないことだ。心理



の周壁に、繪筆をとる以上に畫人の苦悶を刻んでゐる男でないと云へないことである。その人が青山の歸つた後で、その答へに大變感心して、バトロンになつてもいゝがと云つたのに對して、長鳥が青山はうけますまいよと云つたと云ふ。これもほんとの知音でないと云へぬことだ。

彼は石割の勞働者もやつた。仲仕もやつた。彼が知人と云ふ知人に一食一飯を助けてもらつたのはこの頃のことであらう。しかし二度同一人に迷惑をかけぬところが、かれらしい常識であつた。或ひは托鉢僧の氣分から出たのかも知れない。かれのやらなかつたのはハキ溜あさりの乞食生活だけであつた。これだけは絶対にやらなかつた。リオンにビール箱一つと毛布一枚を全財産として、三日三晩も、もの喰はず、死生の間を彷徨した頃がそのどん底であつた。流石豪快なかれも生を考へ死を想つた瞬間がそこにあつた。だが、そこから生れ出たものはハキ溜にのびる手ではなくて慾念から解脱された靜寂の心境であつた。ぼろ着て蓬髪のかれは、何んと思つたか、茫然と舗道をふんでリオン第一流の社交クラブの玄關に立つた。悠然洒々乎として入り込む彼に對して門番もつき出す術も知らなかつた。貴人のお忍びと思つたわけでもあ

るまいが、風に乗つた仙人のやうな、空氣のやうな浸透力を看過したとも云ふべきであつたらう。華やかな食後のダンス・ホールにヌーツと入り込んだ彼に、滿堂の視線の集中したことは云ふまでもない。けれども、かれがどつしりと椅子に腰を下ろして、たじろぎもせず瞑想をはじめると邪魔者と云ふ感じも起らず、ダンスはつゞけられて誰れ一人かれをとがめるものもなかつた。そのまゝ約十分、タイスの夢に入る天女の舞踏のやうな雰圍氣につゞまれたかれの心緒に去來したものは、云ひやうのない落着きであつた。よし、——俺は勝つた、さう感じて靜かにそこを出て行つた。

ある意味でかれはロマンティストである。だが、徹底せるロマンティズムは、やはり、ある綜合的境地に達するものである。この到達點に達した一步々々のあゆみはロマンティズムの道であつたにしても、到達點そのものは、一つの普遍的な畫境であつた。

※ ※  
かれのアルバイトは、大正十五年歸朝後、その縦横の才幹が爆發したものだ。



高原、三里塚の馬を描いた雨後、牛を描いた黄昏、朝、静物、投網、九州帝大工科の大壁畫  
土火木金水を勤勞者によつて現はさんとした未完成の遺品等がそれである。

「高原」とその後は多くセザンヌ風のもので「朝」以後からはシャヴァンヌ式のものであつた。  
かれはカンヴァスの物理的制約を素直にうけ入れた。そして平面のまゝに生かす工夫に到達し  
た。シャヴァンヌがそのメエトルであり得た所以はこゝにある。

九大工學部の大壁畫はシャヴァンヌの構圖に、ラファエルの明色を巧みに組み合せたもの  
で、日本壁畫の最大製作物の一つであらう。かれの畫道は大正十四五年から昭和七年四十七歳  
で急死するまでの短期間に壓縮されてゐるが、十六歳から美校専科に入つた修業時代にも逸品  
また尠しとしない。老鑛夫の如き、金佛、ホアンチュウの如き、卒業製作アイヌの如き、今日  
なほ遺作として尊重せらるべきものだ。

※ ※

晩年かれは多くの畫風をよくマスターした。一つの畫面にセザンヌ、ルノアール、等々の手  
法を自由に描いて見せ、この人達はかうだが、俺はかうだとばかり青山流儀の繪に全部をかき

なほすほどの活力を示した。

殊に、牛。牛がうまかつた。馬は少し牛のやうに見えさへした。鈍重な底力、迫力、——か  
れは牛のやうな畫家であつたのであらう。

※ ※

かれは帝展派の重鎮だが「第一美術」をも主宰した。山本鼎のやうに世俗的の、才氣があつ  
たためではあるまい。牛の様に、若い人達をのせてのろ／＼歩むことが好ましかつたのであ  
らう。かれが歸朝匆匆、神戸のある銀行に世話されて算盤も出來ず、簿記も知らずに、銀行の  
窓に幡居したのは微笑笑ものである。「もう來んでもよろしい」と云はれてやめたところを見て  
も俗才はまづないと考えて差支へない。だが「第一美術」の若い男が、喰ふ必要があるから展  
覽會むきにかゝざるを得ない、と云つたのに、開きなほつて、失禮乍ら、ほんとに喰へないと  
きは此の青山が米だけは應援致しますと答へた。若い人を壓伏し、指導するだけの對人的迫力  
は十分にあつたに相違ない。

※ ※



薄刃のかみそりの様なのばかりが藝術家ではない。鈍の様な重い力のかれであつた。しかも鈍重の中に繊細な神経がゆき互つてゐた。苦境の中にゆがめられた心の動きもあつたらしいが、頭をまつすぐに立て、大股に晝道をのして行つたかれには偉大なものがあつた。三十年に一人出るか出ないかわからぬ男だ。四十七では早すぎた。まだくすべき仕事も多かつたであらうに。(1933.6.8)

政治家篇



### 濱口雄幸の遭難

濱口首相の遭難は幾多の観点から觀察すべき重要な政治事變である。が、とも角先づ意外の感を催したことは、何人にも共通した感想であつたらしいが、政界稀に見る君子人であり、無慾恬淡にしてしかも嚴正剛直、利慾と私心とから縁遠い人であることは周知のこと、およそ私怨のまとなるべき人物ではなく、その上政治上の空氣にしても殺氣に類するものが少なかつたのにこの兇難に際會したことである。

乍然、政治上の雰圍氣が、さしあたつて險惡ならずとするも尙ほ社會低流の陰にしてまた慘なるは多言を要しない。だから上層現象として政治上のイキサツがさしせまつてゐなくても、



この暗流から突如障碍の發生すべきことは想像し得る。……とすれば失業大衆の一部からする直接行動、或ひは不況のため没落しつゝある中小商工業者の自暴自棄的行動の如きものが最もあり得べきものであつた。一般人の想像が事變突發の際此の邊を低徊したのは決して偶然ではない。

しかるに事實は全くこれに反し愛國社なる一團體所屬の壯士の暴發であるらしい。この一派は往年外務省阿部局長を刺したものの一味で、お多分に漏れぬ反動團體の一つであつた。

※

※

反動團體の取締りは濱口内閣の一つの方針であつた。それは民政黨の在野時代の實感から生起し來たもので、自由主義的氣分の一つである。この方針は相當程度實行され野澤組の檢舉をさへ見た。

田中内閣當時の暴力團の横行は想像以上であつて、政治上の被害者が山本宣治氏一人で済んだのがむしろ不思議な位であつた。彼等は大ぴらに公人との連絡を吹きまくりあらゆる悪事を働いてゐた。此の點に就ては宮田某の如きは少くも責任を免れ得るものではない。

兎も角暴力團に對する彈壓が内閣更迭後開始されその弊害を除去するに努めた。その點は少くとも濱口内閣の功績の一つである。が、それはいゝとしても、合理化政策の進行に伴うて失業増大し、勞働爭議が頻發するやうになると、政府の注意は大部分勞働運動の取締にそゝがるに至つた。

※

※

暴力團體に對する彈壓なるものは、決して、徹底的のものではなかつた。しかも左翼運動に對して注意が奪はるゝに及んで果然今回の事變の禍因が醸成せらるゝに至つた。諸新聞紙上に、左翼運動の取締が嚴酷に過ぎ、反動的運動に對する注意が緩慢であつたから、今後の反動團體に對しても嚴重な態度に出ると云ふ意味の報道が出てゐるのはこの間の消息を傳へて餘りあるものだ。

本來右翼的運動の範疇に入る可きものは多々あるが、その根本的傾向は社會の進歩的運動を嫌惡するにある。およそ現状を改變する傾向一切に反對して、その現状を維持せんとするものこれを保守主義といふ。保守主義の定義なるものは學者間諸説あるが、平たく言つて『改革



反對『現状維持』なる二點は共通した屬性である。

社會の進展に屬する凡百の事象がその反對する所である。新しき社會生活の開展、生産力の發展、政治に於ける大衆化、思想、科學、文學等々あらゆる進化現象は、現状を有利とし、その有利なる特權を把持する一部社會層の嫌惡する所となる。

社會思想や社會科學の研究は思想善導方針とやらにより、またはスポーツ政策により低迷せしめられる。そればかりではなく經濟及び政治の大衆化は、労働組合法案反對、普選擴張反對婦選反對等の諸運動によつて妨止せられようとしてゐる。

思想善導費とは何ぞや？ その妥當なる使途を知るものは恐らくあるまい。財政緊縮の時代に、何に使つていゝかわからぬ費目ありと聞けば讀者はびつくりされるであらうが、思想善導費などは結局學生を集めて『紅茶』を呑む位のものである。殊に組合反對、選舉權擴張反對の如きは、工業俱樂部や貴族院あたりで『ハマキ』の紫煙をたゞよはせつゝ議せらるゝのであつて、かくの如き社會の狭き一局部から保守主義のあらゆる計畫が生れ來るのである。

普通に保守主義には二つの種類がある。その一つは、現状維持の目的の上からある程度社會

の進運に適應しこれを取入れて行かうとする傾向である。その二は、頑迷な反動的行動によつて急激にブレーキをかけようとする傾向である。

この前者は進歩的保守主義であつて、イギリス政治史上に於てある時代には相當の役割をなめたものであるが、現代においては、この傾向は自由主義の威力にさへ打ち勝ち難きものとなつてゐる。筆者の見解によれば『金がなくては政治が出来ぬ』と覺つて政友會に入つた、犬養毅氏は今日保守主義者とは云へ、なほ進歩的なる形容詞を許すべきものと思ふ。政友會が濱口内閣のもとに自由主義の民政黨に壓倒せられてゐる根本原因はこの主義上の優劣、時代の適應性の差異にある。總裁問題をめぐりて暗流の絶えないのはかやうな『進歩的』傾向に對する『反動的』のそれが落ち着きを得てゐないからである。

そこで、民政黨は政友會から見れば危険思想？ であると見るさうである。況や純乎たる反動思想の徒から見れば民政黨の危険性？ が急遽に擴大して見らる可きことは容易に想像し得る。濱口首相遭難の眞因は、おそらくこの反動主義と自由主義との相剋の裡に求めらるゝであらう。



※ ※  
 社會運動は生産階級を中心とし大衆性をもつことを特長とする。そこで本來創造的傾向をもち、その運動も大衆の協働的行動たるものだ。デモ等に於て偶々破壊的結果を見ることがあつても、それは目的行動の結果ではない。況や個人的暗殺等は巨人大衆の念頭に浮ぶべく餘りにも些事に過ぎない。大衆的示威と個人刺殺と、——なんと明暗の相の對蹠なることよ！

勿論暴力的アナリズムやニヒリズムには暗殺等の手段が採られるが、これは一部インテリを中心とする運動であつて、決して大衆的運動を以て呼ぶ事は出来ないであらう。またサンデーカリズムも直接行動をとるがこれは經濟行動に於ける直接行動であつて、個人の生命に對する直接行動ではない。サンデーカリズムによつて『熔鑛爐の火』の消ゆることはあつても個人濱口氏の生命を滅却せんとすることはない。がやうに社會運動に於ける傍系的諸思想にして暴力的傾向のものを除き、大衆的と呼べるべき社會運動はおよそ暗殺などとは縁遠いものである。また自由主義にしても各人の個人的自由をその思想的根基とするもので、暗殺さるゝことはあつてもすることなどはあり得るものではない。

※ ※  
 『暗殺』は反動的方面からなざるゝ場合が多い。

そして、また、反動主義とは社會進展を頓挫せしめんとする傾向である。

殊に濱口氏の場合の如き、大政治家でないかも知れないが人格としても稀に見る完成された君子人、自由主義的にして純乎たる循吏型の巨匠濱口氏の遭難にあつてはこの點が著しく鮮明に浮彫されてゐるのである。

我國近代の暗殺史を繙いて見ても、來島氏の如き大衆的運動の發露である場合の極少數の例を除き去れば、大村益次郎、横井小楠、森有禮、星亨を始めとして殆んど全部と言つていゝ程度に於て、暗殺は保守派の手によつて行はれてゐる。

かの山本宣治氏の兇刃に斃れたときの如き、大杉榮氏の場合の如きも亦然りである。

山宣の壯烈な葬儀に列したある民政黨の少壯代議士は勞働大衆の代表者たる純勞働者の沈黙悲痛の默禱には心からゆり動かされたと言つた。互ひに握り合はされた大いなる兩こぶし——その『涙なき葬儀』の力に打たれたと語つた。また尾崎學堂翁もこれに列して、『我々の時代は



去つた』と詠嘆したさうである。

保守主義の兇刃は、山宣、大杉氏等を斃すだけではない。あらゆる進歩的傾向に對して擬せらるゝものだ。

だから自由主義に對してさへ濱口氏の場合の如き舉に出るのである。

※

※

兇行の原因は軍縮問題等に關する濱口内閣の方針に對する抗議にあると推察される。板垣退助氏は『板垣死すとも自由は死せず』と豪語し濱口氏は『男子の本懐』と口ずさんだと言ふ。態度として申し分のない所だ。自由主義の勃興期と全盛期とに於ける好個の歴史的道標が二個並び立つの感がある。しかもこの道標が兩政治家の受難に待つものであることは江湖感慨に充つる所以である。

※

※

田中首相も幾度か危難に臨んだが、警戒の慎重であつたせゐるか遂に免れてゐる。しかし出て來た徒輩が神経衰弱か何かでヨロヨロと傍人にけつまづいて轉んだりなどして誠に滑稽であつ

た。その上一千圓を贈呈されたりなどしてゐる。此一種の滑稽味は全體の空氣に似つかはしい。……といふよりも田中前首相その人の不思議な性格と不似合のものではなかつた。

濱口首相は、このやや滑稽ながら危険率の多かつた田中首相にくらべれば全く安全と考へられる人柄をもち且つ比較的によき状態の下にあつた。

三白眼の英傑や、白髪童顔は劍難の相であると謂ふ。かゝる人相學上の條件に外れてゐる點をとらへて、濱口首相の安全率を筆者は云ふのではない。保守主義者の攻撃を激發するほどのことなしと考へるから、しか云ふのである。

危険ありとすれば寧ろ不況及び合理化過程に簇生した倒産者や失業者の自暴自棄にあつたかも知れないことは既に述べた。しかし、大衆運動の本質上、餓飢線上の大衆でさへ社會生活の擁護を志向しても決して一二個人に怨恨を轉嫁することをしなかつたのは當然と云ふべきである。

※

※

世評は、この事變が却て濱口内閣を安定せしめたと見てゐる。しかし、その對蹠勢力を正視



してこれを克服しない限り、無爲の延命にをはるかも知れない。

この事變によつて醸成された所の政治的雰圍氣を勞働組合法案の通過、失業救済の敢行等への拍車に活用すべきである。そのことによつて自由主義は始めて、その完成期に近づき、社會政策的意義を發揮し得るであらう。この見透かしが目下の急務だ。禍福轉換の楔機がそこにある。(1930. 11. 16)

### 濱口君の心腸

松田源治氏は西園寺老公を友人扱ひする事で有名だ。しかし私は決してこの松源流の亞流を以て任じ、首相濱口氏を濱口君など呼んでゐるのではない。首相斃ると聞いたとき、私の念頭に去來した強き感情の一つは首相の息濱口雄彦君の斷腸の想ひに對する同情の念だ。わが濱口君とはこの雄彦君のことであること云ふ迄もない。私はこの感情の裡に首相遭難の側面觀を試み度い。小學時代、私は麴町區富士見小學校に學んだ。友人中長友たりしもの實にわが雄彦君と鈴木國久君の兩君であつた。

濱口君は大藏省の一吏僚の長子、鈴木君は司法省の區裁判所長か何かであつたかの鈴木喜三郎氏の同じく長子であつた。官吏の息によくある親自慢などの少しもない二人だ。貧乏浪人のおやぢをもつ私と竹馬の友として爾汝の間柄たりしことも決して偶然ではなかつた。



濱口君は腕力強く剛直な男性的の男だ。後年私の外遊するときシツカリ頑張れとはげましたのは彼れだ。鈴木君は讀者或ひは不思議に思はれるかも知れぬが温順篤學の君子人だ。更に後年私が浪人となつて東京の巷を歩いてゐるときたまたま邂逅し、『何故やめた、何故頑張らなかつたか？』と残念さうな顔をしたのは彼鈴木君だ。

濱口君は財務畑に親の道を歩んで、今ニューヨークにゐる。

鈴木君も同様に司法官をつとめてゐる。そして私もまたお同様に浪人の無軌道を走つて僅かに社會の一隅に住してゐる。

雄彦君の心腸に熱湯の走る如きものあるを私は感知する。『豫ての覺悟』と云ひ『犯人に對する凡人としての悲しみ』を感じると云ふ彼だ。しかも剛毅、涙を見せぬ執務ぶりの彼だ。私は友人として、彼に満點を與へてゐた。そして今更に子としての満點を與ふべきであると思つてゐる。何ゆゑか？ 銀行の使用人たる彼が首相の子たる特權を利用して歸朝せぬ決心をしてゐるのは當然のやうでなかなか出來ぬことと思ふがゆゑだ。

温情玉の如き鈴木君と共に遙かにこの友人の痛苦を慰め度いとは今切なる感想だ。……だ

が、しかし住する社會が、それとなく、いつとはなしに、かなりへだたつてもゐるし、會ふ機會も従つて乏しい。私は獨り靜かに濱口君の心腸を想望するのである。



若槻新總裁論

一  
遅々たる春日を楽しみながら、かれは伊豆伊東温泉にゐた。濱口首相は再入院再手術をした。しかしその結果は面白くなかった。

この華清の池に、水滑かに凝脂を洗つてゐたかれに、飛報は訪れたのである。四月七日卒爾として都門に入つた後、八日、九日の二日四十八時間にしてその總裁たる地位は確定し、十日十一日、更に四十八時間を加へて彼はその與へられたる地位を受けた。

しかも十一日は若槻氏が男爵を授けられたる日でもあつた。

その来るや風の如く、その登るや臥龍の昇天するに似てゐるではないか。春風桃李花開くの夜その感慨やいかに。まことに盆と正月が一緒に來たやうなものだ。

まさに登龍門下をくゞらんとするものの羨望に耐へざるところたるべく、また恐らく、その最高レコードを記録するものであらう。

安達内相は單數の政治家である。ひたぶるに一筋の道を歩む力行の人である。わが若槻新總裁は複數の政治家であり、絶塵虚靜の智者である。比喻下賤にわたるを、讀者幸に諒せば、私は敢て、かれ半と張り、われ若槻は丁でゆきしものと見る。私は少しも、新總裁選任を一六勝負に比して揶揄してゐるのではない。否、寧ろ現代の政治が、半の政治に非ずして丁の政治なる所以を諷刺せんとするのである。然らば、丁の政治とは何か？ 半の政治とは何か？ この解答は若槻新總裁論の骨子であり、新總裁と政治現段階との關係論に及ぶものである。

が、讀者よ、暫く待て、私はこの本論に入る前に少しく若槻氏を語るべき義務あるを感じる。

二

人間若槻を筆者は知らない。またその治績も、ものの本に書かれてゐる以外には洞察し得ない。私は一般常識となれる程度の若槻氏を土臺にして簡明直截に人としての若槻を描寫して見



る。これ以上を出で得ないのは、一つには私の若槻學が常識的水準を超え得ないのと、二つにこの小論の趣旨が、一言したやうに、新總裁の政治現段階的意義を究論するにあるがためである。

私は、かれを虚靜の智者と言つた。が、決して、かれを哲人視してはゐない。その政治家的行藏が實に無理のない往く水の流るゝが如きものあるに見ても、その本質は寧ろ常識圓滿なる政治家たるにあるを知る。かれは、イギリス憲政の通曉者だ。その政治的態度が加藤高明子の流れを汲んでイギリス流の立憲政治家型である。

と云つて、その類型は決して加藤子とその軌を一にしない。加藤子の鈍重、剛直なるに比せば恐ろしく輕妙、變通である。加藤子をアスキスの強きものとせば、若槻男は、時代の對照は少しくわるいが、少し柄のいゝパーマーストーンであると思ふ。

パーマーストーンは變通自在、狡猾とまで云はれた男である。若槻男も臨機應變、俗に瓢箪なまづである。捉へどころがなく、實にあてにならない。しかし、決して不得要領ではなく、却つてこの位る要領のいゝ人は稀だ。少しもあてにならない。しかし、かれは立憲の公道を歩

むで過たない。かれの最大の功績の一つが、加藤護憲三派内閣當時、内相として普選通過に眞劍な努力を拂つた點にあることが、その證左である。……

うそつき禮次郎のニツクネームがある。箕浦翁の如き愚直で大様な人は一杯喰はされる。昨日まで、自分は不適任だ、絶對謝絶と、公言しながら、今日になつては洒然として總裁を引きつける。かう云ふ點などを見て、私は日頃、漢の丞相陳平型の才物と云ふ感じを持つてゐる。乍併、うそつきと云ふのは當るまい。恐ろしく巧緻なる論理の所有者であると思ふ。かれの功績中恐らく最大のものたる這般の倫敦海軍々縮條約の締結は、一面かれの大勢洞察の達識によるが、他面かれの巧智による所がある。マクドナルド、スチムソンに伍して寧ろ優越した外交手腕であつたらしい。私が彼れに、タレーランの片鱗を見出すのは此處に基くのである。

しかし、かれはタレーランの如く營養質の好物ではない。むしろ瘦身長軀の隱者風である。長頸鳥喙で、樂しみを共にすべからざる如くして、事實は決してさうではない。名利にはそれほど執着しない。來るものは拒まないであらうが、強ひて名譽を追及して止まなかつた伊藤白壁公とは違ふ。貧乏の點で公と同じく家に儋石の儲なき方である。勿論その官歴は豊富であつ



て、第二次桂内閣時代の蔵次官、第三次桂内閣の大蔵大臣であつたし、一度は宰相の印綬を  
 帶し、大命を奉じて全權ともなつてゐる。榮爵をうけぬ原敬式の見識はない。

※ ※ ※

若槻氏は半ば官僚政治家であるが、しかし他の半ばは政黨政治家である。

此點で、幣原外相は到底かれに及ばぬ。幣原氏が思はぬ失言に失脚したるは是非もないが、  
 その讀書力と組織的頭腦は若槻氏の上にあらう。若槻氏は秀才ではあるが、本を讀まぬ人だ。  
 大學のノートだけを實に要領よく吞みこんだ不勉強家であると思ふ。しかし幣原氏の才は固定  
 する。失言を急には取消さぬバカげたところがある。反之、若槻氏は無限に融通無碍の才幹を  
 もつてゐる。無限にのびる、——と云ふよりもよく適應して行くのである。

桂氏が内閣組織の際、かけつけた若槻氏は玄關口で、桂氏の孫だか子供だかをかゝへ上げてあ  
 やしたと云ふ話しを聞いたことがある。何んと云ふなごやかな自然な、そして利口な變通性で  
 はないか。私は、田中首相が大命降下の後、大禮服美々しく、野田大塊翁の遺族に挨拶に行つ  
 たとき、大塊翁の孫が無邪氣に、「田中か」とどなたのに對して田中大將は目を白黒させたと

云ふ話しを聞いてゐる。彼此對照して妙を極めてゐると思ふ。

※ ※ ※

端的に彼の爲人を言へば、人間若槻は柔道の士だ。それはかれが柔道二段の腕前だと云ふ意  
 味ではない。虚靜の境涯に味到し得る人物だと云ふ意味である。

かれは、もとより、凛々たる英雄の才ではない。だから首をめぐらして神仙たるものなりと  
 私は言つてゐるのではない。かれは大臣も好きだ。首相にもなりたい人だ。しかし無理に獲得  
 しようとは思はないと共に、退いては、十日に一水を書き、五日に一石を書く底の雅懷をもつ  
 人のやうに思ふ。どこか靜寂な閑雅な虚靜なところがある。私はかれに、老莊の哲學ありとは  
 推察しない。たゞ常識具備の半隱半俗を見出すのである。

※ ※ ※

また、端的にかれの功績を言へば、軍縮會議と普選とそこばくの官歴にとゞめをさすであら  
 う。

かれの才幹が、政治家として幣原を凌ぐやうに、かれのこの功績は餘り大なりとなし難いま



でも、江木鐵相のそれを超ゆると思ふ。

江木氏の智能は、餘りに有名であるが、まだ内閣書記官長的臭味を脱せず、その功績も官界政界の駈引きと事務的組織の外にないやうである。江木氏の見透しと、策謀の鋭角的なのに比して、若槻氏のそれは恐ろしく、鈍角的、——と云ふよりもむしろ圓味を帯びてゐる。江木氏のそれが非常に短音波なのに比して、若槻氏は長音波である。が、江木氏はむきで眞面目で、直截に突進する。若槻氏は爪をかみかみ瓢箪なまざるを極め込む。

※

※

江木氏が小さきみにやつてやつて、やり抜いた揚句ふつと若槻氏を引きずり出した。そしてこれがいきなり安達氏とゴツツンゴをさせる結果になつて來たのである。

安達氏は己れを空しうする人である。が、若槻氏は自づから空しき所がある。安達氏は獻身的の黨人であり、數十年刻苦精勵の大番頭である。反之、若槻氏は玄虚に空々たる一面、人のためには指一本動かさぬ官僚政治家であり、ときどきうまいことをやる入婿である。七重の膝を八重にも折る苦勞人と、金つくり頭に下げるのが何より嫌ひなインテリとの邂逅である。

生粹の政黨人と帝大出身秀才との取組みである。古い例を引けば陣平と蕭何との對象の如きがこれに當るであらう。

※

※

私は、繰返して云ふが、人間若槻を知らない。が、新總裁の政治的意義を論ずるの準備として可及的に人間若槻を描いて見た。それは多岐亡羊の嘆なきを得ないが、およそ人性は斯く如しと思つてゐる自分にだけはわかつたつもりである。

少なくとも、私は、幣原、江木、安達諸氏等、民政黨首脳部及民政系準黨人首脳部との對照に於ては多少の明瞭を期し得たと思ふ。

そして、また、この對照が新總裁の政治的意義を論ずるにあつて多少役立つことを期するのである。

然らば、新總裁の政治的意義は如何？ 私はかくて本論に入り、これによつて結論をも兼ねしめたいと思ふ。



若槻氏の老莊味は安達氏の陽明流を制して總裁の地位を占めた。要領が地力を制した。しかし、要領はあくまで上層的であり、地力は直接に地盤を構成する。私はこの新總裁選定によつて、安達氏が動搖を起すことを少しも想像してゐない。安達氏が決意しなければ大動搖は決して起らない筈だ。小泉策太郎氏がしばしば安達氏との交渉を保つてゐる。苦勞人同志の知音と見える。しかし今回の總裁問題に就いての訪問は惟ふに出馬を煽動すると同時に、第三黨の一脈の香りを漂はし、或ひはまた提携入黨にまで及んだとも推察される。樺山資英氏が安達氏によき薩派を代表して牧野内府の意中をたしかめたやうに、小泉氏は安達氏のため義侠的に西園寺公の脈を引かんとし或ひは引いた結果を報告したのかも知れない。が、此處に私の觀測として強調せんと欲するのは、第三黨的計畫に對し恐らく安達氏は全然問題にしなかつたらうと云ふ點である。自己の不平に決して動かされぬ安達氏は脱黨はおろか動搖のけはひすら見せないであらう。寧ろ若槻氏が据膳の落着きのわるさを嘆ずる可能性が遙かに多からうと思ふ。

唯延長内閣に於て再び内相として持續し行くかどうか？ 此點に就いて私は肯定的觀測をもつものだ。と云ふのは、若槻氏としても黨の最勢力家を内閣樞要の地位に据ゑることは必要であるし、安達氏としても、個人的不平の爲に入閣しないことが新内閣に暗影を投じ、その基礎を薄弱ならしめることを民政黨のためにとらないであらう。これがその忍苦の質と、黨そのものになり切つた純黨人の進路として想像される。

この私の豫測は或ひは誤つかも知れない。若槻内閣の内相としては寧ろ江木氏が適當かとも考へられる。が入閣しない場合でも純然たる總裁格として黨の統率者たるであらう。そして現代既成政黨中最も優秀なるオルグとしての地位を依然として保つであらう。

※

※

民政黨の動きに就いては、將來に禍根が残存し、機會到らば爆發すべき危険を見るが、が、差し當つて大分裂は起り得ないと思ふ。そしてまた若槻氏への大命降下もほゞ確實的であらう。

乍併、かやうな所謂政局の表面的な動きに關聯する觀察よりも、政治の現段階にとつて新總裁はいかなる意義をもつかを私は觀察しなければならない。



※ ※

ロボット内閣の稱呼は、獨り首相代理としての幣原氏に委すべきものでない。假りに内閣成立すと假定して若槻内閣と雖ども、より以上の程度に於てロボット内閣である。(以下假定の語を略す)と云ふのは、幣原氏のロボットと稱せらるゝのは代理の轉用語であり、濱口氏の代人形と云ふ意味である。

これに比て、ロボット若槻内閣とは純然たる金融寡頭政治の代行者であり、特に三菱財閥の代表者である點を指摘する意味なのである。

三菱系の絶對支持の表明なくば、若槻氏は數次の公言の通りに、新總裁を引きうけなかつたであらう。若槻新總裁が安達氏より、より強い程度に於て、三菱財閥に近かるべきことは、新總裁受諾の裏面史を知るものにとつては自明のことである。

資金支出者の勢力が、既成政治家の行藏を支配すべきことは、現代政治學の應用的原理の第一である。その個人の見識によつて、被支配の程度と態様には差別があるであらうが：：。

この豊富なる財閥を背景とする若槻新總裁に期待し得るのは、器用なる手捌きによる合理化

政策の遂行である。剛堂の剛直、空谷の重壓、漢城の力行を、若槻氏に期待することは無理だ。

むしろ、比すべきものを求むれば、陶庵公の聰明比儔なき政治に近きものである。氣宇高亮、識見宏遠の點については多少遜色ありとしても、恬淡水の如きに對してねばりある變通性に於て一步優れてゐると思ふ。

この手法によつて、合理化政策をじわりじわり強行することこそ若槻新總裁の使命である。かれは卓越せる行政家である。非凡の財政家である。そしてまたくろうと素足の外交家である。

この政務能力百パーセントを以て、内外の信用を集めることと、金解禁以來の傳統的合理化政策を強行することこそ彼が資本家から、與へられた傳單の内容ではないか。

若槻新總裁がこの指令の強引的實行者でないまでも、その巧妙なる細工師たることは一般に信ぜられて差支へない。

※

※

私が、先きに丁の政治と云つたのは、實に黨務の外に政務を兼ねて金融寡頭政治を萬般の原野に涉つて浸潤せしむべき多元的複數政治の謂ひである。安達氏の半の政治とは、一般に政



務に氏が興味なしと考へられ、原敬式に黨務政治に偏する單數政治に墮するを云ふのである。金融寡頭政治は萬般の方面にその支配を擴張し透徹せんことを要請して止まない。この要請を實踐化するために、金融資本は民政黨内の優秀なる官僚と結托しこれ等をして民政黨内のフラクションとなしてゐる。このフラクションの熱烈な支持の下にわが若槻氏は立上つたのである。だから金融資本家的要請に對しては若槻が遙かに適任である。黨本位政治は、選舉民本位となり、多少民衆の要求に追隨せざるを得ず、産業振興等の積極政策や、人氣取りにしる社會政策的法案をむしかへす危険がある。

約言すれば、金融的獨裁主義の産業的自由主義に對する勝利を發見するのである。

このことは、後繼内閣に就いての財界人種の要望によつて、よく窺知し得る。東朝紙四月十一日に見るに、産業振興を主張する有賀長文氏、緊縮政策取消を強調する藤原銀次郎氏を除いては皆合理化の主張者である。池田成彬氏は「突飛な政策は御免」と云ひ、木村久壽彌太氏が「まだ經濟政策轉換の機でない」と論じ、中島久萬吉氏も「合理化政策を押し通せ」と語つてゐる。

かゝる財界の人氣を背負つて立つ若槻新總裁が合理化の強度化に精勵すべきことは云ふ迄もないことである。

※ ※

しかし、此の資本家的合理化の程度がすゝむことは無産大衆の生活の刻々の貧窮化を意味する。解雇、賃銀切下げ、俸給減等々、無産、勤勞大衆の困難は新たなる内閣組織を以て切迫し來るべきことを豫期しなければならぬ。

だから、無産階級が若槻新總裁に對して、用意すべきものが何物であるかは絮説する迄もなく明瞭である。

それは政治的鬭争の擴大強化に外ならない。そしてこの用意は、他のいかなる人物が新總裁となりし場合も、同様に緊急不可缺である。若槻新總裁が政治の現段階に於てもつ意義はブルジョアジーの側に於ては、合理化の強力化であり、プロレタリアートの側に於ては、その防禦力の増大に存する。

かゝる客觀的な、社會的な意味吟味は、之では盡されてはゐない。しかしその要點だけは右



の二點に存すること疑ひを容れないと思ふ。

※

※

意に充たぬこの小論の筆を擱くに當つて、私は若槻氏總裁就任の経緯に就いての感想を述べよう。

既成政治社會には、ブルジョア道德支配が顯著である。

角逐競争のアンキーが展開される。

連帶的な義理も人情もなく、油斷も隙もならないものがある。抗争せる反對黨との間よりも、遙かに黨内のいざこざが煩雜である。高踏的な傍觀者が支配的資本家の意圖にさへ合致すれば會釋もなく乗り込んで来る。田中大將の場合は最も顯著であるが、黨人とは言へ、貴族院議員、男爵たる若槻氏の新總裁就任もこの傾きがないとは言へない。下から上への構成ではなくて、上から下への支配である。金融寡頭主義的段階に於ては殊に其の度合が強められる。

無産政黨に於てその初期には閱歷學識等の關係から、ブルジョアの慣習にならつて社會的名士を黨首に迎へることが行はれる。が將來は益々下からの、勞農大衆の中から、實踐と生活の

鐵火の中から指導者が立ち上つて來なければならぬ。そしてその際指導權確立は、小股すくひや空巢ねらひのブルジョア的方法を全然排拒しなければならぬ。それは單に指導者間の階級道德の破壊であるばかりでなく、大衆的鬭争力を直截に反映することに失敗するからである。新興政黨の指導者は、だから、大衆卒伍の間から、そのランク・アンド・ファイルの間から立ち上らなければならぬ。

そこで惟ふに、若槻新總裁は、上からの、政黨的には力弱き存在である。だから選舉民大衆の基礎からは遠く、大衆的な勢力として弱い。

しかし、否、それだからこそ、現在の支配擔當者としては、非常に強力なのであるわけだ。

(1931.4.12稿)



久原房之助の人柄

久原房之助は實業家出身ではあるが、政治家としての手練に於ても堂に入つてゐる。

と云ふよりも、一寸得體が知れない所がある。押しと粘りとその鬭争力は、一寸類例がない。非常な悪黨のやうに見える人もある。しかしそれにしては朗らかすぎる。それは、なに、悪に洗練されてゐるからだと更に追及する。

既成政治家のもつ社會的意味、その持つ階級性、それ以外の個人的な屬性は、吾々が既成政治家を見る場合餘り問題にはならない。しかし今の政黨政治の動きを理解するために必要な程度に於ては、かゝる個人的屬性をも知つて置く必要がある。

犬養首相が鈴木内相、川村法相を据ゑる内閣改造案を、久原は、床次、岡崎、三土らと會合の席をはずしざまに、喰ひとめに出かけた。次の日の朝も捻ぢこんだ。流石の犬養もたじ／＼

となつたが、床次派の傍觀、舊政友系、中間派の自重的態度がハッキリして來て、久原系が孤立するやうになつてから斷行の氣勢を再び示すに至つた。久原も此の形勢を見て、遽に鈴木と握手し、初めから喧嘩するつもりではないさと云つた具合に妥協してしまつた。

ある批評家は、これも久原の算盤政治のゆき方なので、轉んでも唯は起きない證據だと論ずる。尙一步進んで、鈴木派と握手の結果、事が運んだと云ふことになれば、黨内の大勢は鈴木、久原の提携で動くのだと云ふ印象を與へ、久原派が主張に於て破れても、その鼎の輕重を問はれることはないことを、ちゃんと計畫してゐるのだと云ふ。なるほど政黨内部の觀測と云ふものは人の腹の中まで讀まねばわからぬから實にむづかしいものである。

敗け嫌ひな犬養は、改造決定の後で、なに、俺は何十年と政黨の飯を喰つてゐるのだ、どれ位の勢力があればどの位の位の騷動が起るかなどと云ふことは百も承知してゐると人を喰つた談話を試みてゐる。

久原は久原で、解決後の幹部の會合で、色々黨内混亂致しましてと、總裁の代理やら、總理への皮肉やら分らぬことを言つてのけてエへ、と笑ひで、萬座をも笑倒させてゐる。



久原が關西旅行の途次、「何んと云つても政治だ。政治には活動もあれば芝居もある。經濟もあれば喧嘩もある。あらゆる人生の味はひが政治の中に籠つてゐる」と心境を語つてゐるのもよくわかる。さては、かの臺詞は「喧嘩」のあとの「芝居」であつたのか！ 或は「喧嘩」が芝居で、あとの芝居がほんとの喧嘩なのかも知れぬ。

併しかれの「活動」はどうか？ またその經濟はどうか？ かれは田中大將と肝膽あひてらしたゞけあつて、恐ろしく無鐵砲な活動性をもつてゐる。そして經濟に國境なきことをよく理解してゐる。その意味で、かれは帝國主義的實業家である。その手はよく延びよく掴む。だから森恪あたりとは衝突するばかりの關係にはない筈だ。寧ろ高橋藏相あたりの自重的態度を、もどかしがり、犬養芳澤外交に不満を感じるものゝ一人であらう。

國民同志會を第三次普選の前に解散して、淋しく政界を隠退した武藤山治にくらべると、久原は融通性、適應性を多分にもつてゐる。武藤の理論と學識はないが、活力と闘志が横溢してゐる。武藤が紳士型の實業政治家ならば、久原は野人型の實業政治家である。武藤が個人主義的なブルジョアであるならば、久原は帝國主義的なブルジョアである。武藤は此意味で理論も

爲人もマンチエスター派であるが、久原は日本型である。國家と經濟との關係をよくのみこんでゐる。久原はだから、日本資本主義勃興期のものであると同時に、没落時代の腕力家でもあり得る。武藤は反之、その中間時期の資本主義華やかなりし頃のタイプである。これが武藤の當時成功した原因でもあり、また同時に、現今失敗の原因でもある。

久原はだから、いま個人主義的な資本主義の修正を少しばかり考へてゐるらしい。資本の五割位を國家資本とする折衷主義であるらしい。これはやゝヒットラーのイデオロギーに似てゐるが、その實は、中間財閥の共通の悩みを代表してゐるものではなからうか？

久原の協力運動が、かやうな經濟政策實現の意圖に出づると見るのは買ひ被りすぎる。が、かう云ふことを漠然考へてゐるのは事實である。かれは田中大將を人情で動く弱點をもつてゐたと見てゐる。張作霖擁護と排擊政策の間をさ迷つた事實を、かれはよく知つてゐる。かれはこれに比較すると冷靜な性格の持主だ。協力内閣失敗の後へ、犬養内閣入閣拒絶の聲明をしたのを、協同運動の同志安達らに氣がねして一所に冷飯を喰ふ方が氣持しがえゝからと説明してゐるやうだが、これは當てにはならない。政友會内部の關係から見ても、單獨内閣反對の立場



から見ても入閣はまづ出来ない情勢にあつたと見るのが妥當だからである。

かれは餅のやうな持久力をもつてゐる。逆境でもへこたれない。しかし餅も餘り搗かれてばかりゐると搗きべりがする。久原があせり出すのはいつ頃であらうか？ 餘り永くないやうに思はれてならない。

## 江木翼の引退

内閣のパイロット江木翼の引退は若槻内閣を支ふるところの三つの支柱、即ち、黨務安達謙藏、財務井上準之助、政務江木翼の一つの脱落を意味する。此の觀察は世評の一致するところであるが、そのまゝに正しいと思ふ。殊にその引退を行政整理中、省廢合の行惱み打開に利用し、身を以て、問題解決の範を示したことは實に鮮やかな進退であつた。かれが第三次桂内閣大隈、加藤内閣の三代に互つて書記官長たり、官制、官界駆引きの總參謀として無類の智略を藏したゝめ、人或ひは書記官長的才幹としてかれを見たが、かゝる進退の節と、問題に對する誠實とを見ると、政策に對する見透しある一流の政治家であることがわかる。世評も此點に於ても大體一致してゐるやうである。

かれの政策的中心が、合理化過程に應ずる行政整理に置かれてゐた點を思へば、濱口、若槻



兩内閣の根本志向の把握者であると見て差支へない。

だから、その引退は政策的に見れば、整理打切、非募債主義緩和の轉換を見るのではないか？ 少なくともその政策轉換への一つの障碍が除かれたと見るべきではなからうか？ 若槻總理も就任の當時非募債主義緩和を香はしてゐる。安達内相も選舉政策上非募債政策放棄を論じてゐる。黨内部にも此傾向は相當強いと思はれる。井上藏相がスノーデンばりに頑張つても、どの程度に貫徹し得るか、まだ疑問であると云ひ度い。

乍併英米等の物價下落に比し我國の下落程度が及ばないのを見ると、我國資本主義的合理化はまだこれ以上の整理を要求してゐるのかも知れない。さうだとすると江木鐵相なきあとの井上藏相の役割は倍加されるであらう。

非募債主義放棄、日華斷交論等々廣い意義の景氣轉換政策が、強調されるのは、資本主義の他の反面である。この兩者の相剋がどう動いてゆくか？ 冷徹江木翼閑地にあつて、一層明朗な見透しがつきはしないであらうか。

江木若槻兩相間の間隙があると傳へらるゝが、このことは若槻總裁就任當時、消息通の豫想

せるところであつた。何故かと云へば、兩者とも政策に練達し、官制に通曉せる官僚出身の政治家であるからである。若槻首相は無類の妥協家として政黨ともほどよく折れ合つて行く、そこにゆくと、江木、井上兩相は理論家的政治家で、所信を貫いて行くところがある。若槻安達兩相の現實主義はどの程度に於て、またいかなる方針によつて政策轉換を行ひ得るか、此點も亦、井上藏相に於けると同様に疑問の裡に置かれてゐる。かゝる本質的疑問が若槻内閣の前途に、民政黨の行路の前に、急に置かれるに至つた。そしてそのキツカケが江木翼の引退にあるとすればかれの存在も或ひは總理の進退以上の波紋をのこしたと云ひ得る。

たゞかれの引退及び政策の動搖が、いかなる意味に於ても、勞農勤勞大衆に重大な影響をもつとは考へられない。そして、また實にかゝる大衆生活に對する關心は、智者江木の腦裏にも餘り映じてゐなかつたかと思はるゝ、千慮の一失と曰はんか？!



人及び政治家としての  
井上準之助

井上準之助

## 一、井上氏暗殺の背景

井上準之助は死んだ。ブローニング拳銃の残酷な筒先きに脆くも斃された。人間井上は何人も避け得ざる死生の嚴然たる事實の前に立たされたのである。兇死の齎らす不気味なシヨックは、その家族、その政友のみではなく、一般人の感覺を一時なりとも揺蕩したのである。

この變事の發生により、いつ何が起るかわからぬと云ふ印象が深刻に傳播されたことは否み難い。政局動亂期に入ると見る筆者も、その亂脈速度が、一九三一年に比し、もつと異常なテムボを供へる事に驚愕を禁じ得ない。更にわれわれは、この暴行の背後のものが何物であるかの直感を蔽ひ得ないのである。兇行者の背後には何等の團體的のものがないらしいとの當局者

の言明を一應は信じてまい。それでも、われわれはその背後に「言葉の殺人」がひそみ、擡頭しつゝあるテロルの動向あるは、斷じて否認し得ないのだ。殺戮者が急進運動の一派であり、且つその取調べ官吏をも驚かすほどの無智盲昧さであることは、明らかに威大なる闇黒の蟠れることを意味する。嘗つて、某事件の軍法會議に於て傍聽の將官連が流涕やまざりし所以のもの、または山宣をやつた黒田某をして黒紋付の國士然たる扮装をなさしめた所以のもの、いはゞ保守主義のイデオロギーがいか横行するかの事實にいま直面せざるを得ないのだ。それはドイツに於て一九二一年にエルツベルゲル及びガーライスを斃し、一九二二年にワルター・ラーテナウを暗殺したるものと同一傾向のものである。と云つて、筆者は決して、殺戮の對象たるエルツベルゲル、ラーテナウと、リーブクネヒト及びルクセンブルグとを同一視しないやうに、殘虐の犠牲となつた山宣と井上準之助をば決して同列に見てはゐない。

## 二、井上氏の閱歴

井上準之助は、云ふ迄もなくブルジョア政治家である。銀行家出身の、官僚政治家でもあ



る。殊に金融資本擁護の、財政技術家的政治家でさへある。しかし、このことはブルジョア政治家としての必然的な屬性であつて、私は寧ろ、かれがブルジョア・イデオロギーを端的に表明し、その理論を忠實に強行したものと思ふ。

かれの成長の歴史を見ると、尙ほその必然性がはつきり髣髴して来る。

明治二十九年東京帝大を、市來乙彦、秦豊助、南弘、有吉忠一、神野勝三郎と共に卒業した時は、日清戦争によつてわが資本主義が第一階段に踏み上つたときである。この年の前後、即ち明治二十八年に濱口、幣原、勝田、俵、上山、小野塚、伊澤を出し、卅年に江木(翼)、川村(竹治)、井上(孝哉)を出し、現代の既成政治家、學者が一せいにスタートを切つた時代なのである。

かれは辯護士志望をすて、日銀に入つた。それは當時の日銀總裁山本達雄の引きであつた。その時代から、かれは土方久徴、久保田勝美と竝んで三人男と云はれた。明治卅二年土方氏と銀行研究のためロンドンにゆきバース銀行等で見習ひをやり、後京都大阪支店長となつた。殊に日露戦争時代國債募集に努力したことは注目すべきである。日銀本店の營業局長として戦後

の經濟政策にも關係してゐる。四十一年頃日銀監督役として紐育にゐたのだが、當時日銀頭取三島彌太郎が素人のため、日銀理事吉井友兄の交渉によつて、副頭取となつた。第一次山本内閣のとき高橋藏相のもとに、三島は日銀總裁となり、井上は正金の頭取となり、更に原内閣のとき大正九年日銀總裁にまでへのぼつた。大正十二年頃東京市長候補者にされたり、郵船社長に推されたりしたが山本震災内閣成立のときに大藏大臣として政治的舞臺に躍進して來た。かれがモラトリアム令を出し、更にその後始末を、日銀再割引補償令によつて片付けその財政家としての名聲を高めた。大正十二年末の虎の門事件で浪人し、貴族院に入つた。大正十三年一月清浦内閣成立後渡英。昭和二年田中内閣のとき高橋藏相のもとに再び日銀總裁となつて、その辭職後、財界世話業を専らしてゐるが、濱口内閣成立のとき再び大藏大臣となつて、若槻内閣を経て、今日に至つた。

かれの經歷を官歴の方面から顧みると、よく、かれがわが資本主義の足跡と行路を共にせることがわかる。日清戦争により勃興期に入れるわが資本主義時代のかれ、日露戦争時代の資本主義隆盛期時代のかれ、そして歐洲大戦争後その絶頂期に於けるかれ、更に、没落期に入り、



第三期に於けるかれ、が明瞭に描かれてくる。華やかなるわが資本主義の歴史はかれの華やかなる官僚政治家としての経歴でもある。そしてかれの悲惨なる死は、またわが資本主義の没落期でもあつた。

井上準之助はかくの如く、その明治廿九年社會人として三十五圓の初月給をもらつてから、棺を蔽ふ日まで徹頭徹尾ブルジョア政治家としての道を歩めるものである。然らばこの行路に於けるかれの政策はいかなるものであつたか？

### 三、井上氏の政策

端的にかれの政策を批評するならば、それはインフレーションとデフレーションとの間のフラクチュエーションに過ぎなかつたと断定し得る。それは單にかれの政策がさうであつたばかりではなく、わが資本主義の道程でもあつたわけで、その意味では資本主義の歩みを歩める井上であつた。

高橋財政がインフレーションに傾き、濱口財政がデフレーションに偏するのに比すると井上

財政はその個人的關係が高橋から濱口へと移行したやうに、右二者をうまく渡り歩いた感がある。謂はゞオツポテユニズムの色彩の強いもので、此點、溫和なる三土財政と、のんきな町田財政と一脈の共通點があると思ふ。唯オツポテユニズムであるとしても、否、それであるがために、臨機の處置、應變の態度は實にキビキビした腕の冴えを見せたもので、かゝる才幹に於ては財政家中彼以上のものはなからう。

が、又一方、そのために、可成りのデマと豹變とを混入してゐたことも亦否み難い。

例へば、大正八年であつたか、大阪銀行集會所で戦後歐洲の復舊事業のため、物資移動が多いから、當分日本も好景氣だらうと論じ好景氣政策をとつてゐたところ、たちまち大正九年三月のパニックにぶつかつてゐる。

また、その前後、アクセプタンス・ビル（輸入手形）引受の大宣傳をやり、爲替になれない銀行をして輸入を助長せしめて、パニックの程度を甚だしからしめたこともある。

また、大正八年七月の茂木救済に就いて、正金の融通限度額五〇〇萬圓なのを、正金を強要して、一千萬圓に達せしめたやうなことをやり、その他放漫な救済政策によつて財政的負擔を



増大してゐる。

また、大正十年の金融放漫時代や、その前後に於ける極度の金融緊縮時代にも金利対策をしなかつた。そして日銀割引歩合を大正八年十一月から十四年まで据置いて放任してゐる。これは機會主義的な敏感な井上財政にしては異例とすべきであるかも知れない。

殊に大正十二年の震災後、財界救済や、震災補償に九億圓の巨費を費した大膽さは、昭和二年恐慌の主要原因をなしてゐる。またやむを得ぬ處置ではあつたが、震災直後の關稅大撤廢をやり、同十二月正金建値引下げにより圓價の大暴落をひき起してゐる。

また昭和二年金融恐慌後に當つて、またまた、應急的救済をやり、貸付資金のコゲツキを生じ財政負擔を莫大なものとした。

右に述べたやうに、茂木救済や報徳銀行救済に預金部や特殊銀行を總動員し、且つ一般的に云つて、インフレーション政策を支持してゐたのに、昭和四年七月濱口内閣がデフレーション政策を以つて立つや遽ち入閣してその政策を助けてゐる。吾人は濱口氏が預金部改革の強硬論者であつたこともこゝに追記しなければならぬ。

殊に解禁政策のために、緊縮政策を強行し、物價引下げ輸出増進を企圖した。その第一着手は財政緊縮であり、その主眼は賃銀、俸給の引下げであつた。濱口内閣匆々に於て減俸問題を、つづばつたのはそのためで、その理由は大正九年増俸時の物價指數一〇〇%に比し昭和四年九月は六三%なりと云ふにあつた。緊縮政策の負擔と、ブルジョアの利潤擁護の負擔を勤勞階級に轉嫁する財政政策として痛く攻撃され、一時失敗に終つたが、後遂に資本の攻勢が成熟するに及んで成功してゐる。

また金解禁準備として在外正貨三億四百萬圓の外一億圓のクレジット設定成れりと揚言してゐるが、それは解禁見越思惑により圓買が起れるに乗じて正金をして圓賣り外貨買ひをなさしめた結果に基く泡沫的在外正貨であつたと云ふ。かゝる在外正貨準備はその額に相當する債務を反面に負つてゐるから、爲替回復と共に圓賣りとなり遽ち消失すべき性質のものであつた。しかも「その間に生じた爲替差損は大部分預金部に負擔せしむ」と謂はれてゐる。

かゝる財政的にも準備なく、殊に不景氣により生ず可き失業増大、一般の收入減に對する豫防策をも欠きたる解禁は必然的に、生産商業の全局面的衰微、失業、賃銀減、俸給減による社



會苦を招來して、未曾有の恐慌深刻化を招來した。

かゝる状態に於て豫算が、赤字を生ずべきことは明らかに豫見し得るのに、あく迄これを否定し、昭和五年の如き、實行豫算に、本年度豫算、節約豫算に來年度豫算と四度も豫算編成をやらざるを得ない窮境に陥つた。かれが山本地震内閣時代三回の豫算をくんだレコードを自ら再び破れるものと云ふべきである。

しかも、かゝる財政事情に對する議會質問に答へて世界恐慌のためと答ふるのみであつた。わが資本主義經濟が世界經濟の一環である以上、世界恐慌は單に外在的原因ではなく、同時に内在的のものでもある所以を、かれ程の學者が知らぬ筈はないから、矢張りデマゴークとしか考へられない。と云ふのは大正十二年十二月頃商大講師として國際金融に就いて講義をなし、相當の内容のものではあつたが、「國際金融に就いてあれ丈研究してゐる人が他にあるかね」と言つてゐる自信の手前、デマと解すべきものと信ずるからである。

更に財閥の猛烈な弗買ひに對して、爲替管理等の處置をなさず、七億圓餘を弗賣りに費したことは、弗買ひよりは害は輕微だらうが、彼としては拙劣な處置であつたと云へる。何故なら

ばその結果、金本位の大動搖が生じ、再禁止に至るべき必然にあるわけだから、解禁斷行、金本位擁護の建て前からは三思すべき場合であつた。

かやうに財政家としてのかれの政策を、批判的視角から見來ればその缺點が少なくないのである。殊に金融資本擁護に偏倚して勤勞大衆への攻勢に終始した點は忘れることが出来ない。けれどもかゝる批判は、かれ個人のみ責任に歸すべきものではない。またかれの死屍を鞭つため筆者が敢て云ふのではないことは勿論だ。

たゞ資本主義的財政のあるがまゝの姿を指示するがためであり、又その一代辯者としての井上財政の地位を描くがためである。

井上財政はかやうに資本主義的性質に終始したが、殊に戦後の獨占資本主義時代に於て、金融資本の獨裁的傾向の線にそつて、グングンのして來たのである。銀行家出身の財政専門家としてのかれの地位が、かゝる傾向の濃度化するに應じて、重大化し來るべきことは當然だ。そして獨占過程の進行、金融資本の優位が決定的となるにつれ、金融資本はその寡頭政治支配にまで向ふべき趨勢にある。この金融寡頭政治の線はまたかれの政界への進出路でもあつた。



かれが財政家的存在から、政治家的存在へ發展して行つたのはかゝる客觀的な根據によるのである。と同時にかれが政治家として必要な闘志に於て、また才幹に於て本來めぐまれた人物であることも記すべきである。即ちかれの主觀的條件もかゝる役割をつとむべき素質をなしてゐるものである。

私はこゝに闘士井上を語るべき場合となつた。

#### 四、闘士としての井上氏

日銀京都支店長時代、住友から招かれたときに、「住友に入つたら吉右衛門より偉らくなれんぢやないか」と云つたさうだ。かれの人生行路はこの鼻柱で最後まで押し通したものだ。闘士井上！しかし彼はまた細心な學究でもあつた。大正十二年末頃商大の講師として國際金融の講義を試みたことは既に述べた通りだ。これは單行本で出てゐるさうだ。筆者は讀んだことがない。また讀んでも微細に批評するほどの豫備知識は缺いてゐる。しかし、一般の評判はよかつたと聞いてゐる。後、帝大の講師もやり、その講義も單行本となり、英譯が、マクミランか

ら出版された。そして更に大阪商大で講義をやつて三部曲とする豫定だつたのが今回の不幸で果さずして終はつた。(下田將美氏記、大毎)かれの勉強法はある題目に關する文獻を集め、徹夜までやつて一氣にものにし、一通りの専門家として披露すると云ふ風だつたさうだ。その學者としての素養如何は、私は知らないが、かれの闘志が學問の方でもよく現はれてゐるのを面白く感ずる。二高時代寄宿舎の設備がわるいとて野宿すると頑張つたのも有名な話した。學生時代高山樗牛がPで、安西と云ふ人がOで、井上がIBで素手のまゝ野球をやつたものだ。學問でも競争相手だつた樗牛をした「井上は運動家としても成功する男だ」と曰はしめたほどであつた。だからゆくところ可ならざるなき闘志と才分とを多分にもつた人物であることがわかる。

その爲か、喧嘩相手が頗る多い。その正金銀行總裁時代は時の藏相勝田と頑張合つた。勝田が例の西原龜三の借款事件で井上を壓迫しようとしたのに對して、正金頭取は株主の選舉によるものだから政府の一存で首には出來ないと云つて争つた。しかしその時は終にやめてゐる。

こんど國民同志會をやめて、マンチエスター・スクールの純乎たる自由主義政黨の夢からさめた武藤山治とは多年の論敵であつた。そのはじめは大正十一年頃日本經濟聯盟成立のとき武